

マエリベリー・ハーンと賢者の石

ろぼと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メリーさんが最近進化が著し過ぎる結界操作の能力を制御する術を得ようとホグワーツに通うも、勢い余って某スキマ妖怪ヘクラスチエンジしちやつたりしなかつたりするお話

目次

FILE.	01	: 異端児ラフカディオ・ハーンの遺産 (挿絵注意)	
1			
FILE.	02	: 呪われた男と、妖桜の杖 (挿絵注意)	14
FILE.	03	: 英雄ハリー・ポッター (挿絵注意)	26
FILE.	04	: ホグワーツ城 (挿絵注意)	41
FILE.	05	: 組み分け帽子との攻防 (挿絵注意)	51
FILE.	06	: 焦燥と安堵 (挿絵注意)	67
FILE.	07	: 図書室の隠し階段 (挿絵注意)	84
FILE.	08	: 魔女見習いのクリスマス (挿絵注意)	99
FILE.	09	: 密会と困惑 (挿絵注意)	119
FILE.	10	: 悪女たちの皮算用 (挿絵注意)	135
FILE.	11	: “禁じられた森” (挿絵注意)	151
FILE.	12	: マエリベリー・ハーンと賢者の石 (挿絵注意)	167
EPILOGUE		: 無垢なる観測者たち	184

FILE. 01: 異端児ラフカディオ・ハーンの遺産
(挿絵注意)

西暦1991年7月某日 午前

アイルランド ダブリン
愛蘭土・都柏林某所 『旧ハーン診療所』

ダブリン都心、トリニティ・カレッジ通りの横道の奥で営まれている寂れた商店街。その裏手の細い路地に小さい檻樓アパートが建っていた。

三階建ての、コニアイルランドでは珍しいマンサール屋根を構えたその建物の地上階には、板で打ち隠された古い看板が掲げられている。

” HEARN’S CLINIC ”

十年ほど前に閉院した診療所で、今では代々受け継いできた医師の一族がたまに掃除に訪れるだけの無人の建物となっている。

故に、そのアパートの前を通る近隣住民の目には僅かばかりの好奇心の色が滲んでいた。

珍しくあの家の窓が開いているぞ、と。

「ふう…」

丸一年ぶりに外気に触れた『旧ハーン診療所』の三階奥。そこに一人の小柄な少女の姿があった。

軽いウェーブに広がる柔らかなプラチナブロンド。紫水晶の瞳が引き立てるビスクドールのように整った容姿は、ラベンダー色の清楚なワンピースに着飾られ淡く浮かびあがっている。

正午の陽光を受けキラキラと舞う埃の中に佇む華奢な姿は、まるで御伽噺の妖精のように幻想的で儂く美しい。

少女——”メリー”と呼ばれ親しまれる彼女はこの旧診療所を有するハーン家の遺児だ。11歳の誕生日を迎える今日、メリーは留学

先の日本から久々に地球の反対側にあるダブリンへ帰省していた。もともと保護者の親戚夫妻から「掃除当番」を言い渡されなければ訪れる事もなかった面倒事である。

「……………あら？」

埃叩きで払った蜘蛛の巣から家主が逃亡する姿をぼーっと見つめるメリー。そんな彼女はふと、その蟲が疾走する天井の木目に妙な溝が刻まれている事に気付く。

(まさか、隠し扉……………?)

巧妙に隠されているが、ここに居るメリーは学業より趣味活動にお熱な大のオカルトマニアである。奇怪な逸話の多い先祖が残した築130年以上の古い診療所。そんな曰く付きの建物で発見した非日常の気配に飛びつかない彼女ではない。

早速脚立を用意し、危うい手付きで隠し扉を解放するメリーの表情は満面の笑顔。

「けほつ、こほつ……………凄い埃」

そして雪崩のように落ちる灰煙のベールを潜った先で、少女は愛してやまない「神秘」の存在を目にしたのだった。

「あつた……………結界」だわ……………!」

それは超常の力。メリーを平凡な日常から救い出し、そしてその人生を根底から狂わせた、彼女だけが持つ特異な才能である。

そう。異端も異端。メリーは人でありながら、人ならざる力を与えられこの世に生を受けた。

——幻想の世界を認識し、そこへお邪魔する事ができる程度の能力。

自身のオカルト活動において最も貢献華々しいその異能が、またしてもメリーを新たな夢の楽園へいざなった。

「わあ……………」

平然と、苦も無く異界の境目をすり抜けた少女は、眼前に広がった光景に感嘆の声を零す。

それはまさに絵本に出てくる魔法使いの工房であった。所狭しと整理する巨大な本棚。光る液体が入った無数の小瓶。見たことの無い生物の標本……

多種多様な家具や道具が犇めく圧迫感を考慮しても、通常の住宅街ではありえない広さ。恐らく何らかの神秘の術で空間そのものを拡張しているのだろう。

メリー独自の定義においては「結界」の枠組みに分類できるが、神仏や高位の妖怪魔物が創造する「異界」と呼ぶには憚られる、実に単純なものだ。

だが、その等身大きが逆にメリーの興味を強く引いた。おそらくこれを作ったのは空間操作系の異能を持つ低位の妖怪か、もしくはそれこそ部屋の印象通りの民話に登場する魔法使い。

つまり彼女と同じ——人間だ。

「……ッ、やっぱり」

少女は本棚の前で一冊の分厚い不気味な皮表紙の本を取り、その題名に興奮する。

「THE DARK ARTS」……『闇の術』だなんていかにもね)

言語は英語。挿絵は人体。人間の言葉を使い、人間の体を描いたものだ。

堪らず表紙を捲り、中に紹介されていた未知の知識に没頭する。だがあまりに難解なそれはメリーの並外れた頭脳を以てしても解読には至らない。

少なくとも、今は。

「ふふっ、ご先祖様からのステキな誕生日プレゼントってどこかしら」
日本で暮らす親友に伝えたら狂喜乱舞しそうだ、とメリーは頬を緩める。貴重な夏季休暇を利用した数々の予定をこちらが棒に振ったせいで不貞腐れていたあの子だが、この隠し屋根裏部屋の事を伝えればたちまち機嫌も直るだろう。

早速室内の写真を現像し、彼女にエアメールを送って自慢しなくては。メリーは悪友の寮部屋宛てに手紙を書こうと踵を返し——

「……ッ!？」

——突然耳に飛び込んできた大きな羽音に思わず飛び跳ねた。

換気していたどれかの部屋の窓からハトでも入って来たのだろうか。慌てて屋根裏部屋の隠し扉から脚立で降り、屋内を見渡す。

すると、ペンキの剥がれた古めかしい窓枠に、ずんぐりとした白い塊がふてぶてしく留まっていた。

「…フクロウ?」

何故こんな都会の下町診療所に？

メリーは突然部屋に舞い降りた大型鳥の存在感に後退り、続いてその口に啜えられた一通の手紙らしき物体に気付き硬化した。

伝書バトならぬ、伝書フクロウである。

「招待…いえ、案内状?」

戸惑いながら近付くと、フクロウが嘴を持ち上げ封筒を差し出してきた。鳥どころかサルすら超える高度な知性。不安と期待を胸中に渦巻かせながら、少女は古風な蝋封が施されたそれを凝視する。

ダイヤ貼りの封筒に描かれていたのは中世・ルネサンス期に多用された盾エスカッション章らしき紋章。四つの区分にはそれぞれ獅子・蛇・穴熊・鷲の動物の絵図チャージが彩られており、中央の内盾にはHのイニシャル。紋章記述には”DRACO DORMIENS NUNQUAM TITILLANDUS”とラテン語で何かの隠語が綴られている。

そして上部スクロールに記されている、見慣れない固有名詞に少女は首を捻った。

“HOGWARTS”…? 紋章の様式的にはスコットランドの団体か組合のようだけど…)

紋章学はファンタジー小説ファンの必修科目だが、スクロールを盾の上に描くものは確かあの国の固有の様式だったはずだ。ちよつとした雑学程度の認識で記憶の片隅に置いていたが、まさか役に立つ日が来ようとは。

とは言え、自分にこのような無駄に格式張った封筒を貰うような社会的ステータスは無い。メリーは人より少しだけ優れた頭脳を持ち、歴史ある家系の一人っ子で、魔術工房らしき隠し屋根裏部屋がある閉

院した診療所の管理を任された、人ならざる異能を持つ、普通の……いや、かなり珍しい11歳の女の子だ。

強烈な不安を覚えた少女は震える手で蠟封を捲り、中に収められていた一枚の手紙を開く。

そしてその奇妙な文面に自身の名を見つけた瞬間、唐突に診療所の玄関のブザーが鳴り響いた。

「ッひゃあっ!?!」

咄嗟に零れた悲鳴は開かれた窓から近隣へと木霊する。

状況と言い、明らかに狙ってやったとしか思えない奇跡的なタイミング。あまりに怪しい訪問者ではあるが、掃除の途中で窓や扉を全開にしている現状で居留守を使い逃げることは不可能だ。

恐る恐る、メリーはフクロウを避けながら隣の窓へ近付き、覚悟を決め、外から階下の玄関を覗いた。

「——初めまして。私、『ホグワーツ魔法魔術学校』で副校長を務めておりますミネルバ・マクゴナガルと申します」

そこには、深緑色のローブと魔法使いのトンガリ帽子を被った老女が、厳格そうな表情でこちらを見上げていた。

——Miss マエリベリー・ハーンは御在宅でしょうか？

西暦1991年7月某日 午後

日本・京都府某大学 『秘封?楽部』部室

「——と言ひいことがあったのよ」

「久々にウチの活動サボって実家帰ったと思ったらそんな面白そうな目にあつてたのね、メリー」

モンスーンの季節が終わり、東アジアの灼熱の太陽光が降り注ぐ日本の京都盆地。

山科にほど近いとある大学の一室に、エアコンの冷気を全身に浴びて寛ぐ二人の場違いに幼い少女たちがいた。

ここは歴史ある大学サークル『秘封？楽部』。稀有な力を持つ霊能者たちが自然と集まる、世にも奇妙なオカルト研究会だ。

この会の参加資格は「能力者」である事のみ。メンバーは皆が10代前半、サークル顧問も弱冠18歳の天才物理学者が務めている。果たしてそんな未成年たちを教師や学生として迎え入れる大学の前衛的な制度が当の子供たちの才覚によって拓かれたものなのか、はたまた『秘封？楽部』の名が持つ神秘の力が常識そのものに干渉している結果なのかは、サークル関係者たちの異能を知れば卵か雛かの話だと領けるだろう。

そんな関係者の一人——実家のダブリンから舞い戻った飛び級留学生の”メリー”ことマエリベリー・ハーンは、もう一人の部員である宇佐見蓮子へ旧診療所で起きた事を報告していた。

「いや、ホントびびりすぎたんだから。アパートの部屋を掃除してたら魔術書の書庫になってる隠し部屋見つけたり、凄いいもふもふしたフクロウが家の中入ってきたり……」

「で、そのもふもふメール読んだ直後に謎のコスプレマダム襲来&魔法の世界のご案内、と……今回は妙にメルヘンチックな神秘ね。いつも私を案内してくれる夢の世界は殺伐としてるのに、この差は何なのかしら」

「煩いわね。不満なら話してあげないわよ」

辛辣な言いようのクセやけに目を輝かせている蓮子に呆れながらも、メリーは彼女と同じく興奮していた。

蓮子の言う「夢の世界」とはメリーが時折見つける非現実の世界のことを指す。異界の境目を視認し、その中へ足を踏み入れることが出

来る彼女は、何度も蓮子を連れて二人で異界巡りを楽しんでた。
それが今代の『秘封？楽部』の基本的なサークル活動だ。

だが此度メリーが体験した神秘はそれらとは根本から異なっていた。

物理法則を無視した理解不能な現象。いつも目にする異界での出来事ではなく、日常の現実世界で、しかも自分と同じ人間が奇跡の術を使って見せた事実。メリーは衝撃を受けていた。

「杖を振るい、呪文を唱え、物を浮かせる……まるでデイズニーか児童アニメの世界だわ」

「……二十世紀の作品に神秘が宿るなんて考えにくいけど、確かに”いかにも”な異能なのよね」

「ふふつ、そのマクゴナガルって人も見る目あるわね。だってメリーより魔女っ娘姿が似合う女の子なんていないもの、あははっ」

「あなたね……」

無論、話を聞いた蓮子の驚きも大差ない。だが蓮子のはしやぎ様はどこか、相棒のメリーと違って件の「魔女」に選ばれなかった寂しさの裏返しのようにも見えた。

彼女の様子からメリーも察してはいたが、やはり蓮子の許に魔法学校の入学案内は来ていないようだった。

「私たちの世界にそんな力を教えてくれる学校があるなんて凄く羨見よメリー！ 私もイギリス留学しようかしら。素質が無くても少しくらいはおこぼれに肖れると思わない？」

「……えっ？ ちょ、ちょっと待ってよ蓮子」

一人で話をあらぬ方向に転がす蓮子をメリーは慌てて制止する。彼女は彼女で意外と常識的な判断ができる人間なのだ。

「いや、確かに魔法の話はしたけど、そもそも『魔法学校に行く』だなんて一言も言っていないわよ、私」

「……は？」

呆けた顔で目をぱちくりさせる蓮子。

「いや何言ってるの、行きなさいよメリー」

「いや、いきなり『魔女になれ』と言われて『なります』とはならない

でしょ。大学どうするのよ」

「いやなるでしょ。こんな貴重な機会を自分で捨てるとか貴方才カルト部員の自覚ある?」

「いやだから……」

刹那的な親友の主張に対し、メリーはとにかく慎重だった。理由は複数ある。

「まず『ホグワーツ魔法魔術学校』は七年制。そして一度入学したらあっち側の人間と判断されて、全ての記憶を消去しない限り二度と戻れないみたいなの」

「へえ、記憶消去だなんてまた凄くフアニーな手段ね。まあ誰だって自分の神秘は秘密にしたいか」

中々に凶悪な魔法なのだがあつさり存在を受け入れる蓮子。しかしメリーにとっては記憶消去など以ての外。そんなことをされては魔法学校に通う意味自体が消え、かといひ隔絶された魔法社会で死ぬまで幽閉されるのも論外である。

なにより——口にはしないものの——メリーの消極性の最たる理由は、この親友と過ごす秘封倶楽部の日常を気に入っているからだっただ。

「ふーん……つまり魔法に関する記憶を脳以外の場所にコツソリ保管すれば問題ないって事ね?」

「え?」

そんなメリーのいじらしい本心を察してくれない蓮子は、やはり一人で良からぬ事を考えていた。

「筆記媒体は危ないけどデジタルデータならどうかしら。彼らが科学技術に明るかったら私たちはとっくの昔に支配されているはず。少なくとも神秘が入り込める余地のない電子空間ならこちらの土俵よ」

「……正気?」

「口封じに殺さない時点で向こうも穏便に済ませたいんですよ。それに私達が本当に欲しいのは魔法の理論であって魔法そのものじゃない。日本は遠いし知識の再記憶だけならそう簡単に露呈しないと思うわ」

能天気な親友の笑みにメリーは頭が痛くなる。

「……私には何で貴方がそんな樂觀的になれるのか理解出来ないわ。今回の私の夢の世界じゃなくて、れっきとした現実なのよ？ 私についてくる気なら貴方だって無関係じゃられない」

「そりゃ確かに危険かもしれないけど、そんなの今更でしょ？ いつもやってる結界巡りだってとても安全とは言い難いし、異国の神秘を分析できるチャンスを多少のリスクで手放すのは惜しすぎるわ」

「結界巡りで遭遇する妖怪の危険と現実の人間を相手にする危険は全く違うでしょ。いつもみたいに私の力で夢の世界を観測してるのは違うんだから。もし全部バレて魔法界から命を狙われたらどうするの？ 一生怯えて暮らすの？」

メリーは彼女がここまで魔法学校に拘る理由が分からなかった。異界を巡る度に強化し続ける自分の異能とは異なり、蓮子の能力は非常に限定的だ。妖怪の恐るべき脅力からも、魔法使いの魔法からも身を守ることができないのに、何故彼女は自ら敵を作ろうとするのか。避けられる危険に自ら飛び込もうとしているのか。

「だって……最近の貴方、ちょっとおかしいもの」

「……え？」

その疑問の答えは、蓮子だけが捉えていた、メリー自身の身に起きつつある異変にあった。

「気付いてる、メリー？ 貴方、自分の異能で出来ることがとんでもなく大きく……恐ろしいものになってるって」

それまでの期待に満ちた笑顔とは真逆。真剣で、神妙で、不安に呑まれた彼女らしくない表情に、メリーは言葉を失った。

「毎日のように夢で異界の妖怪たちと戯れて、少しずつ出来ることが増えて、この前なんてそのせいで怪我までして寝込んだのをもう忘れたの？」

「ッ……」

「突然ぼーっとしだしたと思ったらいきなり別人みたいな怖い口調でブツブツ独り言を始めるし。体どころか精神までおかしくなるなん

て、私にとっては貴方を蝕むその力のほうが魔法界の追手なんかよりよっぽど恐ろしいわ……！」

突き付けられた事実にも固まるメリーを、蓮子が強い意思の籠った言葉で射抜く。

「今まで黙ってたけど、いい機会だから言っとくわ。私はね、メリーにその力をちやんと制御出来るようになって欲しいの。他でもない、貴方の身のために」

日に日に力を増す異能と、それにつられるように変わりゆく少女の人間性。その力と変化が齎しかねない、想像することすら恐ろしい悲劇。それが蓮子の、暗雲立ち込める未来に震える無力な少女の、長らく懐いてきた恐怖であった。

故に、蓮子は大切な親友が遠く離れた故郷で出会った奇跡の秘儀に活路を見出した。

「メリーが抱えてる問題は私たちの世界の科学ではどうしようもないわ。でも魔法なら、貴方の身に起きてることを解明出来るかもしれない。異能を制御する術だつて見つかるかもしれない。賭ける価値は十分あると思うの」

「蓮子……」

「私も出来ることは何でも試してみるつもりよ。魔法の素質が無くて、知識さえあれば理論を組み立てることくらいは出来るはず。今回の神秘はどこか、距離が近いような気がするの。私でも触れることが出来そうな、身近な神秘って感じで」

常にメリーに手を引かれながら様々な結界へ足を踏み入れる彼女は、目の前の先導者と自分との間に大きな壁を感じていた。二人寄り添い夢幻に見える少女たちは、その実、異界の客人とその付き添いという全くの別物。決して対等な関係ではなかった。

無論多少の不満はあれど、彼我の才能の差を認められる程度には蓮子の精神は年齢以上に成熟していた。劣等感に苛まれ大切な友情を棒に振るほど少女は愚かではなく、また事実メリーと共に楽しむ結界巡りは実に心躍る体験ばかりであった。

それこそ、身に余るほどに。

だからこそ、蓮子の言葉には確信があった。メリーが出会った「魔法」という体系化された神秘であれば、異能的な力に劣る自分でも何か相棒の助けになれる…と。

蓮子の最大の長所は『天体に関する自身の異能』ではなく、その卓越した頭脳で物事を論理的に分析する力なのだから。

「だから、たとえメリーが魔法学校に通い出して、今みたいに二人でワイワイ遊ぶ時間が減っても——」

そして一拍、躊躇うように俯いた蓮子は、ぽつりと小さく呟いた。

——貴方が力に吞まれて取返しが付かない”モノ”になるよりマシよ

言い終わった少女が、長い溜息を吐いた。そんな親友の思い詰めた姿を直視出来ず、メリーは沈痛な想いで顔を伏せる。

どれほどの時が流れただろう。永遠にも思える沈黙を破ったのは、やはり、いつも自分の手を引いてくれる親友の明るい声だった。

「……なあんてね、大丈夫！ 長期休暇もイギリスの一般校みたいに年に三回あるし、連絡も文通なら大丈夫なんですよ？ 試しに行くだけ行ってみなさい。確か一般人でも受けられる魔法関係の試験があるんだっけ？ メリー危なっかしいし、その試験受けて私も一緒にイギリス住むわ！」

「蓮子……」

「最悪こっちが魔法の情報持ったままバックレるつもりなのがバレそうだと感じたら、素直に諦めればいいのよ。それにたとえ記憶を消されて在学期間の数年を無駄にしても、私たちは元から飛び級して大学生やってるんだから大したロスじゃないわ。長期の潜入捜査のお遊びみたいなのよ。スパイユニットみたいでドキドキするわね！」

ふわり、と表情を緩めいつもの彼女に戻った蓮子。その顔には未知に胸を弾ませる年相応の笑顔が輝いている。

ずるい。メリーは、今回もまた相棒に上手く絆されてしまった現実を澁々認め、せめてもの意地と唇を尖らせた。

元より口で彼女に敵うはずもないが、ここまで言われてしまったら逃げる事など出来やしない。よって。

「……一年だけよ」

人形のような美貌の西洋少女の唇から零れたのは、深いお手上げの溜息であった。

「試しに一年だけ通ってみる。可能な限り魔法学校で魔法の知識を学んで、その間に私の能力の制御に役立てそうなものが見つからなければ、記憶を消してもらって二人で日本に帰る。もちろんこのことは進級直前までホグワーツに秘密にするわ」

「おおつ、メリーー！」

相棒の歓声に気を良くしながら、メリーは最低限の譲れない条件を突きつける。

これから行おうとしていることは、悟られれば社会一つを敵に回す大罪だ。互いに身の安全の保証が出来ない以上、せめて避けられる危険くらいは避けておくべきだろう。

「まずは一つ……これは向こうにバレないことが前提になるけど、私があつちで調べたことは全部暗号化した手紙に載せて毎日そつちに送るから、蓮子はその保管と隠蔽を徹底して」

「ええ、もちろん！ こつちでも色々考えとくわね」

「二つ目……絶対に、知識も無いうちから焦って一人で魔法の研究に手を出さないで」

「はいはい、わかってるわよ」

「あと三つ目だけど、マクゴナガル先生に聞いた”W・O・M・B・A・T.”とかいう一般人向けの試験の受験はしばらく待って。こつちで調べて安全を確認してからにします」

「お、おう……」

「それと私達のイギリスでの拠点についてだけ——」

矢継ぎ早に飛ぶ少女の注意。幾つも釘を刺される蓮子の顔に冷や

汗が伝う。だが彼女の頬は赤く、居ても立っても居られないのが丸わかりだ。

そのウキウキ姿に呆れながら、メリーは再度大きな溜息を吐く。もつとも、胸中に沸き立つ感動を誤魔化しきれていない分、メリー自身も蓮子と同じ穴の貉。

故に、神秘を夢見る女の子が最後に選んだのは、やはりお互いが最も欲した答えであった。

「約束できるなら、行くわ——」

H O G W A R T S
S c h o o l o f W i t c h c r a f t a n d W i z a r
d r y

そして長い、されど心地よい沈黙の末、どちらともなく二人の少女は笑い合った。

「ふふっ…期待してるわ、秘封？楽部所属ハーン課報員。コードネームは”Dr. LATENCY”でいいかしら？」

「私の恥ずかしいペンネームも遂に国際化するのね……全く感慨深くないけど」

かくして、かつて英国魔法界に混沌の嵐を巻き起こした『異端児ハーン』の末裔は、古代魔法の牙城へ舞い戻る——

FILE. 02:呪われた男と、妖桜の杖（挿絵注意）

西暦1991年7月31日 午前

イギリス ロンドン
英吉利・倫敦某所 『ダイアゴン横丁』

チャリング・クロス街道に面した商業街に一軒の寂れた宿屋が営業している。

レコード屋と本屋に挟まれた好立地ながら不自然に人が近寄らない店、"LEAKY CAULDRON"。『漏れ鍋』と訳せるその宿屋の正体は、日常と非日常の交差点だ。

そして裏口の隠し門を抜けた先にあった光景に、メリーは思わず感嘆の声を零した。

「凄い……」

「ここ、ここで新入生は備品を、そっ揃えます」

隣の案内人の言葉も掻き消えるほどの活気は、幻想の秘儀を生業とする人々の生きた営みであった。

色とりどりのローブを纏う通行人。空を飛び交うフクロウたち。如何なる技術によってか歪んだように傾き佇む奇妙な建築物。キラキラと輝く薬瓶や、用途不明な多種多様の用具が整列するショーウィンドウ。中には怪しげな動物の部位を展示する店や、魔女らしい魔法の箒を店員と交渉する人影もある。

『ホグワーツ魔法魔術学校』の学用品を買い揃えるべく付き添いの男性教師に案内されたこの地は、ロンドン市内のど真ん中。そんな大都会の一角に繁栄する童話のような世界にメリーは感動していた。

「ま、まずはお金の換金です。ホグワーツの学費は無料ですが、にっ日用品は生徒側の負担です。マグルから見ると魔法界の物価は極めて安いので混乱することもあるでしょうが、すっ少しずつ慣れて行きましょう」

「はい。わざわざありがとうございます、クイレル先生」

少女に”クイレル”と呼ばれた若い男が唸りながら「いえいえ」と笑顔を返す。頭に紫色のターバンを巻いた奇抜な装いでここまで無数の一般人の視線を集めてきた、潜む気の全くない神秘の担い手である。

クイリナス・クイレル。

ホグワーツの必修授業 “DEFENCE AGAINST THE DARK ARTS” —— 『闇の魔術に対する防衛術』を担当する教師だ。

実家で見つけた魔術書と関係がありそうな授業。それを教えるクイレルとの出会いを喜んだメリーは模範生らしく愛想よく振る舞い、友好関係の構築に成功していた。先ほどのように現世人のメリーを気遣う彼の発言がその証拠と言えるだろう。

(発音障害なのか少し話し辛いけど、マクゴナガル先生よりは現世に詳しいし、そっちの意味ではクイレル先生はちゃんと話が通じる魔法使いさんでよかったわ)

会話の中で知ったことの一つに彼の意外な経歴があった。クイレルは過去に “MUGGLE STUDIES” —— 『マグル学』という現世社会の文化や学問を教える授業を担当していたらしい。メリーにとって彼は同じ現世の価値観を知り、同時に目当ての専門知識を持つ貴重な相談相手だ。

そんな彼に連れられて、少女は魔法使いたちの百貨街『ダイアゴン横丁』を進んでいく。

「こ、ここがグリンゴッツ。マグル界ではありえない、小鬼ゴブリンが働く魔法界の金融機関です」

「……！」

しばらく歩き、周囲の光景に慣れ始めた頃。”GRINGOTTS” と見事な看板が門上に飾られた建物に案内されたメリーは、店内で動き回る小さな人影を見て瞠目した。

小鬼。

それは少女がよく遊んだ夢の世界にしか存在しないはずの異界の住人。咄嗟に周囲を見渡し結界の境目を探すも、見つかるのは力の弱

い魔法的なものだけだ。

それはつまり。

「嘘……本当に魔法界では幻想の生物が暮らしているのですか……？」

「ぜ、絶滅してしまったものもいますが、魔法省には熱心な保護活動家が多いので、いつ未だに多くの種族が生き残っているのですよ」
彼自身、何らかの貢献を果たしたのだろう。驚愕するメリーにクイレルが誇らしげな笑みを見せる。

釣られるように少女の唇が弧を描いた。しかしその喜色は魔法界の偉業に感動したからではない。

現世では存在出来ないはずの生物が境界を越え、世界の斥力に阻ま
れず完全な生物として定住している。メリーはそこに、自身の目的で
ある「異能を制御する術」の光明を見たのだ。

（早速、蓮子に吉報を送れるわね）

日が差し込む銀行の豪華なホワイエを進み、ポンドの両替を受け付
けで申し込む。聡明そうな眼鏡の小鬼が人間のお役所仕事のように
担当者へ繋ぎを付ける姿に目を瞬かせているうちに、プラスチックの上品
な受け皿に見慣れない貨幣が几帳面に積み上げられていた。金貨ら
しきものがガリオン、銀貨がシツクル、銅貨がクヌート。聞き慣れな
い呼称、魔法界独自の通貨だ。

ふと気になった少女はこちらを見つめる担当者の小鬼に尋ねた。

「あの、『銀行』ということは一般の……その、マグルの銀行のように
口座開設も可能なのですか？　ここまで飛行機と電車を乗り継いで
来るのは少し大変だったもので」

「17歳未満の未成年者による申請は如何なるものも原則受け付けて
おりません」

現実世界に暮らす異界の住人が語る、欠片すら融通が利かない頑固
でぐうの音も出ない正論。何ともおかしな光景に思わず苦笑いを零
すメリーであった。

（まあどのみち自分の異能の制御にめどが立てば京都に逃げ帰るつも
りだし、ここの口座なんてあっても最終的には邪魔になるでしょう

ね)

魔法界唯一の銀行である彼らが有する経済的影響力は絶大であろう。不必要に関わるのは避けるべし。

メリーは顔を覚えられる前に退散しようとクイレルの姿を探す。すると奥の受付から喧騒が聞こえ、そちらを見ると、小鬼に熱心に話し込み迷惑そうに追い払われている見慣れたターバン男がいた。

「名門校の立場ある大人が何やってるのよ……」

あの厳格なマクゴナガル然り、クイレルの装いや振る舞い然り、ホグワーツの教師ともなると何かしらの変人でないといけないのだろうか。メリーは一瞬迷うも保身を選び、営業妨害客の連れ添いとして目を付けられぬよう密かにホワイエを後にした。

「——先生、こちらです」

銀行の正門脇で待つこと少し。爪を噛みブツブツと呟きながらクイレルは現れた。

そんな顔の青い彼にメリーは微かな違和感を覚える。いかにもな動揺の仕草とは別の、何か。

「あの、先生……?」

まさかメリーが銀行での口論に加勢しなかったことを怒っているワケではないだろうが、気になった少女は彼の俯いた顔を覗き込む。

クイレルが歩き出したのはその直後だった。

「……急ぐぞ、ハーン」

「ッ、え?」

「制服は『マダム・マルキンの洋装店』で手直しして貰いたまえ。杖は『オリバンダー』だ。私は一年の教科書とその他を揃えてくる」

流暢な英語でそう言い残し、クイレルが大腿で真向かいの書店へと去っていく。唐突な豹変様にメリーはその場でぽかんと彼を見送ってしまった。

焦燥、視野狭窄。あのこだわりの吃音演技を止める程とは一体銀行で何があったのだろうか。流石に心配になるが、同時にメリーの心の主流は「関わるべからず」と冷淡だ。

町中で一人。そんな善意と好奇心、理性の間で足踏みする少女の不注意な姿が余程危なっかしく見えたのか、近くを通ったふくよかな魔法が声をかけてきた。

「——こんにちは、お嬢さん」

はたと振り向いたメリーの顔が、魔法のキラキラした瞳に映り込む。

「まあっ、なんて可愛らしい！ 遠目でも思ってたけど伝承に聞く”湖の乙女”とはきつと貴方のことね！」

「……えっ？」

「お嬢さんはホグワーツの新入生かしら？ 制服をお探しなら後ろの『マダム・マルキンの洋装店』へどうぞ。私の自慢のお店よ」

「あ、あの……」

「人込みにこの日差しですもの。お疲れでしょう？ 中に冷たいレモネードがあるから、採寸が終わったらめしあがれ」

有無を言わせぬ魔法の熱意に負けたメリーは、なすがままに洋装店へ連れ込まれる。奇しくもクイレルから丸投げされた用事の店だ。

流石は魔法界。浮遊しながら自動で生地を糸を通す針や、採寸してくれる巻尺などの力でテキパキと制服の丈や裾が整えられていく様は、呆けるメリーでも注意を引かれる大変見事なもの。

果たして頂いたレモネードをちびちびと口に行っている短い間に、洋装店の素敵なシヨールは閉幕となった。

「はい、どうぞ。一度お召しになるなら奥の更衣室をお使いなさい」

「あ、いえ……どうかお構いなく。杖の購入がまだなので、制服の確認は自宅に戻ってから行います」

「あらそう……貴方の制服姿を見てみたかったけれど残念だわ。ああ『オリバンダー』なら横丁の突き当りの古着屋の隣よ。気をつけてね」
「はい。ご馳走になったレモネードも美味しかったです。ありがとうございます
ございました」

名残惜しそうに見送ってくれる女店主の視線を背に、メリーはいそいそと洋装店を後にした。

クイレルの様子も気になるが、やるべきことは残っている。賑わう人々の波を掻き分け、辿り着いたのはもう一つの用事の店。

（『Makers of Fine Wands since 382 B.C.』……金剛組より九百年も古い店がポンと建ってるのが凄いわね）

『OLLIVANDERS』。展示棚の古ぼけたクツシヨンの上に置かれた一本の杖が目を引く、古式豊かな店構えの専門店だ。

扉を潜ったメリーを出迎えたのは、壁面を埋め尽くすほどの無数の長い紙箱であった。その全てが杖、杖、杖。ゆつくりと埃臭い店内を見渡し、少女は思わず息を吐く。何と圧倒的な光景だろう。

杖の海に見惚れていると、ふいに店の奥から一人の老人が姿を現した。

「いらつしやいませ……おや、これはこれは素敵なお客さんだ。もうそのような季節なのですな、当店へようこそ」

「あ、はい。よろしくお願いします、おじいさま」

肖像画のベートーヴェンを草臥らせたような容姿の人物。職人と言うよりは売れない音楽家だろうか。失礼な印象を頭から追い遣り、メリーは老人に目利きを申し込む。

「ふふ、こちらこそ……さて、礼儀正しくお淑やかな貴方には——リンゴにユニコーンの髪、12インチ、しなやかで振りやすい」

京都で大学に飛び級留学するほど成熟しているメリーの立ち振る舞いは、11歳とは思えないほど大人びていて美しい。悪友の蓮子が聞いたら笑いそうな人物評価に頬を染めながら、メリーは老人に指示された通りに杖を振るってみる。

だが定番のキラキラした魔法を期待していた分、メリーは起きた結果に完全に意表を突かれた。振るった杖の先にあつた箱が突然粉々に吹き飛んだのである。

「ツキヤ……！」

「ではこちら——ヤナギにユニコーンの髪、13インチ、忠実で大人しい」

思わず悲鳴を上げるも何事もなかったかのように杖を回収され、別

のものを手渡された。目を白黒させながら、メリーは動揺した心のまま恐る恐るそれを小さく振るう。

今度はカウンター裏の鏡が砕け散った。

「——ッ!? ぐ、ごめんなさい、弁償します! すぐに掃除を……」
しかし老人はメリーの粗相を気にも留めない。

「ごらごら、杖選びに集中しなされ。店の惨事など些細な事」

「は……ええ?」

「ホッホッホ、それにしてもこの杖に嫌われるとは、お顔に似合わず中々わんぱくなお嬢さんのようですな。さて、となると毛色を変えて——ハナミズキにドラゴンの心臓の琴線、11インチ、暴れ馬」

乱れたお気に入り入りの薄紫色のワンピースの裾を直しながら、メリーは一変してしまった老人からの人物評価に内心涙する。そしてこれ以上の恥はかけまい、と差し出された三本目の杖を祈るように振るった。

すると、ようやく望んだ煌びやかな魔法が具現化した。明るい緑色の光が周囲に輝く幻想的な現象だ。

「……悪くない。が、おそらくこれならば更に——シカモアに不死鳥の羽根、9インチ、気紛れでやかましい」

感動から咄嗟に振り向く笑顔の少女に反し、老人の表情は険しい。何が問題なのかわからず小さく唇を尖らせるも、メリーは差し出された新たな杖を素直に振るった。だがそちらもまた首を捻られてしま

う。
そこから無数の杖を紹介されては苦い顔の繰り返し。どれもそれなりに美しい反応を示してくれているのだが、老人はお気に召さない様子。

当初の興奮も冷め、メリーはしばらく杖を振るい光らせ返すだけの機械になっていた。

「うーむ、あと一步と言ったところなのじゃが……おや?」

暇を持て余したメリーが独自に杖の材料とその傾向を分析し始めてしばらく。ふと老人が困惑の声を上げ、少女のスカートの右側を指さした。

「お嬢さん、その手にお持ちなのは一体……」

「……え？」

彼の示す先へぼんやりと目を向けると、そこには一本の杖が握られていた。

他の誰のものでもない、メリー自身の手の中に。

「え、嘘。私いつの間に……」

「む？ 何と……これはもしかや——サクラに不明な骨片、8インチ、求め人来ず」

不思議な現象に驚いていると、店主が「試しに振ってみなされ」とこれまで何度も繰り返されたはずのことを神妙に指示してきた。不安を押し殺し、メリーは慎重に従う。

すると。

「リボン……？」

少女が振るった杖の先に、突然真っ赤な布が現れ、可愛らしい蝶結びを作り浮遊しはじめた。

それまでの光の星々や天の川のようにキラキラとした抽象的な現象ではない。専門家の老人すら仰天するほどに異常な、初めて物質的なオブジェとして表れた魔法効果に、メリーの胸が強く鼓動する。

高揚感か、はたまた得体の知れない現象を引き起こした己自身への恐怖か。それは彼女にもわからない。

「これは……ふむ、お嬢さんはサクラの逸話をご存知かね。これは極東からたまに流れてくる珍しい木でしてな。日本という国が主な産出国で、あちらでは霊樹やときに妖樹として神聖視されておるそうなのですが」

「！」

老人の口から述べられた思いもよらぬ第二の故郷の名。魔法界を裏切る心算満々のメリーは自身の秘密が暴かれた気分になり、思わず冷や汗が垂れる。

「ただ残念ながらここでは魔力の質の違いもあってサクラはあまり人氣があるとは言い難い。そこに更に人氣のない骨片を心材にしたとあって、作られてから100年以上、ついに触れる方はいらつしやら

なかった」

「そう、ですか……」

「私の祖父ゲボルドが、当時のあるホグワーツ卒業生に材料を渡されて作ったものだと言われておりましたが……結局受け取られることも無く、今まで倉庫の肥やしとなっていたのですよ」

店主の説明が何故か、妙に耳に残る。

「しかし、何故今になって、それも貴方のような魔女見習いに——ん？

いや、もしやまさか」

「……！」

何か思い当たる節でもあるのだろうか。老人が微かな期待感をチラつかせる目を向けてきた。

「お嬢さん、まだお伺いしておりませんが、差し支えなければお名前をお聞きしても？」

杖の由来といい、胸騒ぎが止まらないメリーだが断る理由も見つからず、躊躇いがちに名乗るべく口を開く。

だがその唇が紡いだのは別の言葉。少女の視界の端、店の雲った窓の外に、苛立たしげに佇む知人の姿が映ったのだ。

不味い、案内人のクイレルが分担してくれた買い物を済ませて待っている。

「あ、あの。折角の貴重なお話の途中に大変申し訳ございません。これ以上は付き添いの先生のご迷惑になってしまいますので、ご縁があったこの杖でお願いします」

「む、あれは……ターバンでわかり辛いが、確かクイリナス・クイレル君。ハンノキにユニコーンの毛、9インチ、よく曲がる。おお、ホグワーツ教師になられたと聞いておりましたが、なるほど彼を待たせているのですか。わかりました」

忙しなく、店内の少女と老人はガレオン金貨で取引する。一生モノだけあって、魔法界の安い物価ながらそれなりの値段であった。

「それでは杖も決まりましたし、お側に戻られたほうがよろしいでしょう。私もようやくそのサクラの杖に主が見つかってほっとしております、ホッホッホ」

「お世話になりました。ありがとうございます」

時間を食われたものの用事はこれでお終い。一礼して踵を返した背に「何か異常があればまたいつでもお越しく下さい」と店主の機嫌の良さそうな声が届く。何やらいわく付きの一品だったようだが、出来ればその「杖に異常」などは勘弁してほしい。

もつともそうでなくとも何となく、あまり二度三度と訪ねるのは避けたかった。

『オリバンダー』を飛び出したメリーは、店前で両手に大荷物を抱えたクイレルの許へ駆け寄り謝罪する。

「大変お待たせしました、クイレル先生……!」

だが彼から反応がない。メリーは恐る恐る顔を上げ、顔色を伺う。そのときだった。またしても、少女の異能の琴線が震えたのは。

「……るじよ、しば…待ちを……!」

「!」

頭を抱え、不穏な独り言を呟くクイレル。前にも増して様子がおかしく、咄嗟に聞き取ろうと耳を澄ますも、横丁の喧噪に掻き消され――気が付いたら男はいつものヘラヘラとした気弱な顔に戻っていた。

「先生、今のは……どこか具合が悪いのですか……?」

「! し、失礼。では残りを売っている店へ参りましょう。教科書以外の調合鍋など魔法薬学の学用品もついでに買い揃えておきましたので、あつ後は一、二件で終わりです」

心配するメリーをあしらい、クイレルは微笑を張り付けたまま速足で先を急ごうとする。

その後ろ姿を眺めていたメリーは、瞬間。彼のグリーンゴツツでの豹変から――否、最初に彼と会ったときからずっと頭の隅に棲み着いていた、小さな違和感の正体に思い至った。

まさか。しかしこれまでのように勘違いと斬り捨ててもおかしく

ない臍気なそれが、メリーの稀有な異能の感知で確信へと変わる。

(……あれって、”憑きモノ”よね)

見抜いたのは、クイレルの側頭部から漂う「邪気」の存在。

一度知覚してからは芋蔓式に見えてくる。明らかに人間の肉体の許容範囲を超えた靈魂の収容密度。そしてその邪気の基は大きい魂に寄生するように居座っている小さな、異なる魂だった。まずマトモな存在ではないだろう。

(魔法界ではよくあること、なワケないか……)

周りを見ても誰一人として似たような状態の魔法使いは居らず、またクイレルの異常に気付いている通行人もいない。となると考えられるのは、クイレル自身がそれを隠蔽していること、若しくは彼に取り憑いているあの靈魂が、この神秘の世界の住民でさえも感知できない高位な存在だということだ。

(触らぬ神に祟りなし……なんて割り切れたら簡単なんだけど)

魔法界を裏切る算段を立てているのに更なる藪を突いて蛇を出すなど馬鹿の所業である。

だがメリーは知人の身に迫る脅威を無視できるほど心が強靱ではなかった。加えてクイレルの知識の価値を知っている以上、損得勘定の天秤にさえバイアスがかかってしまう。

(……駄目ね。この事は蓮子に相談してから決めましょう)

幸いにもクイレルに寄生する邪気の気配は極めて弱い。それに万が一容態が急変したとしても、関わるか否かで迷っている時間で何らかの除霊手段を探した方が有意義だ。

霊能者サークル部員を名乗っているが、別に除霊や退散の術に明るいわけではないメリーは、一先ず問題を先送りにすることにした。

「待ってください、クイレル先生」

増えた厄介事に溜息し、若き魔女見習いはどっぴん人込みの奥へ消えていく案内人の後を追いかけた。

……だがその意に反し、少女はこの男の問題に早速巻き込まれることとなる。

それは帰りに通った『漏れ鍋』の酒場での、一人の少年との出会いが発端であった。

FILE. 03：英雄ハリー・ポッター（挿絵注意）

西暦1991年7月31日 午後

イギリス ロンドン
英吉利・倫敦某所 『漏れ鍋』

「——おつ、クイレル先生じゃないか！」

ホグワーツの学用品を揃えたメリーは、帰路に通った宿屋『漏れ鍋』の酒場で唾然としていた。

自分の、実に二倍以上もの背丈を持つ大男。人間ではありえない、まさに巨人と呼ぶべき存在が地響きを立てながら笑顔で近付いてきたのだ。

「奇遇ですね。ハグリッド先生は今年も新生生の、つつ付き添いですか？」

「おう、幸運にもです！ 何せ魔法界の英雄さまの担当だ」

クイレルとの会話から察するに、どうやらこの“ハグリッド”なる巨漢もホグワーツの教師らしい。小鬼ゴブリンに続く異形人種の登場にメリーは密かに目を輝かせる。

「ハリー・ポッター……！……！」
「？」

すると突然クイレルが驚愕の声を上げた。何事かとメリーが彼の視線の先を追うと、そこには巨人の汚らしいコートコートの陰に隠れた、一人の眼鏡の少年がいた。

何故今まで気付かなかったのか疑いたくなるほどに異様な気配を漂わせる男の子だ。

「ほれ、ハリー。この人は今年からウチで『闇の魔術に対する防衛術』の授業を担当するクイレル先生だ」

「お、お会いできて、感激です。Mr.ポッター……！」

彼らの会話に交ざるように、周囲の酒場の客たちも口々に少年を歓

迎える言葉を送っている。貴人に対する遜った態度ではなく、まるでハグリッドが言う通りの「英雄」を称えるかのよう。

魔法界に目を付けられたくないメリーは咄嗟にこの有名人らしき子供を警戒する。

「こ、こんにちは先生。……あの、ところでその女の子は……？」

だが少年は人々が自分自身へ向ける注目よりも、目の前のメリーのことが気になって仕方がない様子。そのわかりやすい彼の反応は当然周囲の笑いを呼んだ。

「はっはっは！ その年で美人に首ったけとは、流石は父さん、ジェームズの息子だ。あいつも入学時からお前の母さんにメロメロだったからなあ」

「そ、そんなのじゃないよ！ っていうか初めて聞くお父さんの話がそれって……」

「なあに、お互い初めて会う新入生なんだ。まだ見ぬライバルたちから一歩リードってやつさ！ 今の内に仲良くなっとけよ、ハリー？」

「……こんなお姫さまみたいにキラキラしてる子がいるなんて、魔法界ってやっぱり凄いや……」

そんな少年の純粋な感情にメリーは戸惑いを隠せない。日本の大で年上の教師や学生たちによく可愛がられる天才少女であるが、思えば彼のような同年代の男の子と対面したことは実に久しぶりであった。それもこういった異性を見る熱い目で見つめられるなど全くの初めてのことで、メリーは居心地の悪さから赤くなった顔を逸らす。

「……マエリベリー・ハーンと申します。マグル出身の新入生ですが、もし学校でお会いしたときは気軽に声をかけてくださると心強いです。どうぞ宜しくお願い致します、Mr. ポッター」

「マエリベリー」って言うんだ……あ、ごめん。Miss ハーンだよ。ぼ、僕はハリー・ポッターです。よろしくおねがいますっ」

この少年のしどろもどろな自己紹介は、漫画などでよく見るボーイミーツガールの甘酸っぱい緊張故だろうか。魔法界に情を残せない身である以上、申し訳なくあまり彼の好意は歓迎出来ないが、メ

リーは消去法的にそちらであってほしいと願う。

まさか彼までクイレルのように憑き霊に日々魂を侵され吃り癖が付いているワケではあるまい。

だが、ふと少年の額に奇妙な痣を見つけたその瞬間、まるでメリーの冗談が言霊となったかのように。

「……ッ！」

——ゾワリと体中の毛が逆立つような悪寒が少女の身体を這いずり回った。

咄嗟に肩を掻き抱くメリー。当人たちを前に表情を保てたのは幸運であつた。

この感覚には何度も覚えがある。フォトンが支配する物質世界では観測できない異界の生物。メリーたち人間の生きる浮世とは相容れぬ存在。

霊魂。それも人に害を成す悪霊に類する者たちの気配だ。

(それだけじゃない。この感じ……まさかクイレル先生のと全く同じ霊があの子にも憑いてるっていうの……?)

異なる人物に同時に憑依する力を持った悪霊など、それこそ北野社の天神様のように神格化されるほどの上位存在だろう。

もっとも、メリーは己の異能の副次効果で霊魂を認識しているだけで、それらの詳しい生態に明るいわけではない。だが僅かな知識しか持たない彼女であっても、この二人に憑いている霊が平凡な存在でないことくらいは直感出来た。

「——えっ、Miss ハーンって魔法使いの家の子じゃないの!?
こんなにキラキラしてるのに……」

「そりゃ案内の先生が付くのは魔法使いや魔女の親がないマグルの生徒がほとんどだからな」

メリーが少年の秘密に震撼していると、何やら場の話題が自分の事になっていた。慌てて会話に集中する。

「……けど確かに意外だな。その人間離れしためんこい顔、てつきりヴィーラか何かの血でも入ってると思つとつたが。お前さん、何か父ちゃん母ちゃん特別な血を持つてたとか聞いたらんか?」

「ハグリッド、『ヴィーラ』って何?」

「女を挑発し男を虜にする、美しい女神のような姿をした魔法生物だ。ホグワーツにも靴小人レブラコーンの血を引く先生がいるし、人間と魔法生物の混血は珍しくはないぞ。かく言う俺も母ちゃんが巨人で——あ、これは言っちゃいかんかった、うおっほん!」

中々に興味深い魔法界の住人たちの人種民族関係の話。しかし異能を除けば己は真つ当な人間だと信じているメリーにとつては無神経な分析であつた。例の謎多き先祖など、ハグリッドの質問の答えに嫌な心当たりがあることも合わかり、たとえ容姿を褒められようと素直に喜べない。

とはいえ、今はクイレルとポッターの悪霊憑き問題のほうが切実。ホグワーツでこんな異物に囲まれて勉学に集中できるものか。

(御し易そうなのは、その……お年頃そうなポッター君だけ)

教師のクイレルよりは未熟な子供相手のほうが情報を引き出せるだろう。しばし周囲の会話に適当な相槌を打っていると、教師陣が何やら校長の特別任務やら学校の職務など大人の話に集中し始めた。

英雄少年へこつそり接触できるチャンスである。

「……あの、Mr.ポッター。少しよろしくて?」

「えっ? うん、うん、もちろん! 何でも聞いてよ!」

彼の期待に高揚した顔をスルーし、少女は言葉が続ける。

「その、貴方どこか体に違和感とかあつたりしないかしら? 体調が優れないとか、気分が妙に沈んだりとか……」

そしてメリーは背後の教師陣を一瞥し、声を潜め少年へ耳打ちした。

「——おでこに、何か異常があつたりとか」

すると彼女の微かな接近に赤い顔で仰け反つたポッター少年は、「この傷のこと?」と困惑げに自身の額に触れた。

どうやらクイレルと違い、例の霊はポッターに何らかの悪影響をもたらすものではないらしい。この様子では彼から情報を得られても不正確なノイズにしかならないだろう。当てが外れことにメリーは肩を落とした。

結局、その後はあらゆることが消化不良に終わったまま、メリーは後ろ髪を引かれる思いでダブリンの実家へ帰宅した。

そして、その日の夜にあの巨人教師が危険な賊に襲われたとメリーが風の噂で知ったのは、一月後の入学式でのことだった。

西暦1991年8月1日 午後

アイランド
ダブリン
愛蘭土・都柏林某所 『旧ハーン診療所』

「——つまり最初に会った計四人の Hogwーツ関係者の内、半分が悪霊に憑かれてたんだ。メリーの巻き込まれ体質は魔法界でも相変わらずなのね」

「茶化さないで、蓮子。流石に学校の先生と同級生の危機を無視できるほど私は人でなしじゃないの。特にクイレル先生は絶対に今後も『闇の魔術』関連でお世話になるんだから、引っ越しの荷解き終わったなら知恵を貸しなさい」

ロンドン・ヒースロー空港から1時間半ほどの空の散歩。晴れぬ気分を実家の旧診療所の魔術工房へ戻ったメリーは、そこで8倍近い飛行時間を経てわざわざ日本・成田空港から飛んできた宇佐見蓮子に出

迎えられていた。

「あれれ、心配なのはホントにクイレル先生だけえ？ 英雄ポッター少年のあつうい視線にはときめかなかったの？ ふぷぷぷ」

「いえ、有名人は論外」

「……そこは可愛らしく恥ずかしがるぐらいしなさいよ、枯れてるわねメリー」

「それよりコレ、一日でやったの？ 最早別の部屋じゃない……」

蓮子が何故ここにいるのか、それは彼女の驚異的な行動力の賜物であつた。

メリーが『ホグワーツ魔法魔術学校』へ通うと決断した当日。蓮子は早速東京の実家を説得し大学に休学届を叩き付け、意気揚々と初めてのブリテン島へ急行した。どんな魔法を使ったのかとメリーが呆けている間に蓮子は屋根裏部屋の大掃除を敢行し、あれほど汚かつた魔術工房もあら不思議。先代の所有者が使っていたであろう水回りや焔炉の魔法具も発掘され、埃臭かつた魔術工房は今や食料さえあれば何の不自由もない隠者の楽園と化している。

少女たちはそんな素敵な仮称『秘封？ 楽部・第二部室』で今後の活動計画を立てていた。

「まあメリーの恋愛事情は置いとくけどさ、悪霊とか私に一体どうしろっていの？ 除霊の方法なんて大して知らないわよ。ウチは靈能者サークル部だけど、そっちは守備範囲外ってヤツよ。メリーも結界で遊んでばっかだし」

「……何で私が悪いみたいに言うのよ」

「魔法だって、試しにここの魔法書ざっと見てみたけど正直常識が違い過ぎてさっぱりよ。この……」 THE DARK ARTS ”つて本があつた棚でちらほらSOULSとかSPIRITSとかそれっぽい単語が載つてる本見つけたくらいで」

蓮子が「うーん」と腕を伸ばし、遠くに積まれた書物の山から見覚えのある不気味な表紙の一冊を抜き取つた。

「それ、私がこの秘密部屋つけたときに最初に手に取つた魔術書ね。勝手に『闇の術』って和訳してるけど、合ってるのかしら」

「大体そんな感じよね。凄いおどろおどろしい装丁だし、それって多分ファンタジー定番の禁術の類よ。一部の儀式は人間の臓物とか使うって書いてあったし、メリーにはまだ早すぎるわ」

「いや『まだ』って……やっぱそういうのにも追々触れていく予定なのね……」

「貴方の常識外れの能力を制御する魔法が外法じゃなかったら何だっというのよ」

呆れる蓮子から思わず目を逸らしてしまう。

メリーの異能を制御する魔法の発見・開発は、最優先の命題として二人とも認識していた。だがメリーは人であり続けるために異能を制御する術を得ようとしているのだ。その研究のために人の道から完全に外れてしまつては本末転倒である。

少女は自分の魔法がどうか他人の犠牲が前提となるものにならないでほしいと切に願つた。

「つまり何が言いたいかつて言うと、靈魂に関する魔法はどれもこの”DARK ARTS”とかいう人体実験必須な系列みたいだから、今の私たちじゃ魔法での除霊なんてとてもじゃないけど無理つてこと。そのクイレル先生とポッター君のことは現時点では放置しときなさい」

「……歯がゆいわ」

「多分ポッター君に関しては彼を英雄扱いする魔法界が何とかするでしょう。大事なのはその時に専門家の除霊術をしっかりと観測して、解析して、本命のクイレル先生で私達が実践すること。今はその時に備えて知識を蓄えましょ」

わかつてはいたが、気持ちの割り切りとはいつだつて難儀なもの。小さく頭を振り何とか未練を追い払つたメリーは気を取り直し、蓮子へ再度向き合つた。

薄情だが、彼女達にとつてはここからが本題である。

「……じゃあホグワーツでの活動の話に入るけど、まず私は具体的にどう動いたほうがいいの？ 一応潜入捜査みたいなことになるんだから、私のアンダーカバーくらいは決めておきたいんだけど」

「普通に優等生のフリしてれば十分よ。今学校の教科書を斜め読みしてるけど、座学は簡単な暗記ばかりだわ。メリーなら主席くらい寝ても取れるでしょうし、適当に教師の信頼を勝ち取って行動範囲を広げましょう」

「まあ実技もココで練習できるものね」

小学生の中に、飛び級で大学に通う子が混ざれば然も在りなん。論点はその飛びぬけた状況をどう上手に利用するか。

「そうね、まずは何と言ったって——これよっ！」
「げっ……」

蓮子がホグワーツの学校案内が載る冊子の一頁を指さす。そこには「RESTRICTED SECTION」と二つの英単語が。

意味は——『閲覧禁止の棚』だ。

『闇の魔術に関する危険な書物が収められている特別書庫。閲覧には全学年必須授業「闇の魔術に対する防衛術」の担当教師による許可が必要』……ですって。ここならメリーの能力に関する魔法書があるかもしれないわ」

「……ダメって明記されてるわけじゃないけど、これ一年生も見せてもらえるの？ 説明読む限り全く期待できないんだけど」

「今年の担当はクイレル先生なんでしょ？ 既に縁が出来たし、全力で媚売ったら特別に許可出してもらえるかもよ。貴方のその顔で涙ながらにお願いされたら誰も断れないわ。いや割とマジで」

「ええ……」

のっけから頓挫しそうな場当たりの計画に呆れるメリー。つい先日まで大学生に交じって精神学を学んでいたメリーは、とても自分にそんな年相応の女の子らしい真似が出来るとは思えなかった。

「……じゃあ大筋の目標は、魔法全般の基礎知識と技術の獲得。例の禁書書庫へのアクセス手段。そして書庫で結界や境界に関する魔法の知識、もしくは魔法そのものを探すことね」

こうして言葉にすると何とも漠然としている。前途多難だと途方に暮れるも、隣の蓮子はどこか楽しげだ。

「まあまあ。今のメリーに必要なのはそんなことよりも、幻想の空気

をその身に受け入れる心の余裕よ。現代人みたいにカリカリしてたら魔法の方から逃げちゃうわ」

「貴方ね……」

「目標が漠然としても得た智と技は貴方を裏切らないわ。少しは魔法社会を楽しむ凶々しさを持ちなさい。貴方も栄ある秘封？楽部の一員なんだからっ」

そして少女たちは入学式までの一月間、教科書の暗記から魔法の練習、魔術工房の蔵書の解説に魔法具類の試運用など、寝る間を惜しみありとあらゆる魔法知識の吸収に没頭した。

魔法省は17歳以下の青少年の魔法使用を禁じている。だが不思議と『秘封？楽部』の二人の行動を咎める者は現れなかった。

彼女たちがその理由に気が付いたとき、僅か11歳の少女であるホグワーツ新入生マエリベリー・ハーンは、既に禁忌とされる『闇の魔術』に手を伸ばすほどに、その恐るべき神秘の才を花開かせていた。

西暦1991年9月1日 午前

イギリス ロンドン
英吉利・倫敦某所 『キングス・クロス駅』

” PLATFORM 9・ $\frac{1}{2}$? HOGWARTS EXPRESS
SKINGS CROSS St. | HOGSMEADE S
t.” ……そんなものどこにも無いんだけど」

発着掲示板を望む駅の中央ホール。その正面にそびえるレンガ壁の側で、手元のチケットを途方に暮れた目で見つめる可憐な少女がいた。

大きなトランクケースを大事そうに抱え、何度も掲示板を見ながら眉を傾斜させるその姿は、老若男女万人の庇護欲を擲るほどに愛らしい。

「蓮子のバカ、何が『行けばわかる』よ。クリスマス休みに帰ったら絶対引つ叩いてやる……っ」

秘封？ 楽部の二人は魔法界についての情報を分担して集めていた。魔法全般については魔力に長けたメリーが行い、蓮子は魔法界の一般常識や歴史、昨今の社会情勢などを幅広く、といった具合である。

今メリーを困らせている『ホグワーツ急行』の乗車方法は、蓮子が担当していた魔法界の一般常識の項目だ。今頃彼女はダブリンの魔術工房でゲラゲラ笑っていることだろう。

「でもこれだと他の現世出身の生徒たちは一体どうやって……って、あら？」

それらしい子供の姿はないかと周囲を観察するメリー。すると予想外ながら、ホールの右端の宙に、黒い煙のような線が漂っているのを見つけた。

異界の入り口。日本で遊んだソレと変わらずメリーを惹き付ける、幻想の片鱗だ。

(境界……?)

その黒線は複数あった。いつもの如く魅入ってしまった少女は時間も忘れ、身近な一筋をフラフラと辿っていく。

そして黒線の端、境界の隙間まで辿り着いたメリーは、はたと我に返る。気付けば彼女は”PLATFORM 7”と”PLATFORM 8”の二つの文字版が掲げられた乗車ホームに立っていた。

(……「7番線」と「8番線」の間のレンガ柱？ 何でこんなところに結界が……)

境界を隔てた先に見える景色は、時間の流れも、結界それぞれが持つ独自の”色”も、今メリーが居る現世のそれと全く同じ。これはどちらかと言えば実家の魔術工房のような改造空間に近く、結界と呼べるほど確固たる異世界として成立しているわけではないようだ。

(こんな人間の活動が活発なところにあるなんて面白いわね。一体誰

が何のために——)

その瞬間、メリーの脳に天啓が下りる。もしや、この7番線と8番線の間で設けられた改造空間は「7・ \square ／ \square ?番線」を指すのではないか。(だったらこのチケットの「9・ \square ／ \square ?番線」って……!)

目の前の推定「7・ \square ／ \square ?番線」の行先も興味深いのが、今は寄り道をしている場合ではない。後ろ髪を引かれながらメリーは目当ての路線へと急いだ。

そして目的地の9番線と10番線の間。そこに立つ三つのレンガ柱の内の三つ目の前に立ったメリーの口は、ひとりでの得心の声を呟いていた。

「ホントにあった……」

不自然なまでに人の通りが少ない乗車ホームの一角。そこに先ほどと同じ黒い線のような、明らかに意図的に作られた結界の隙間が開いていた。

あの7番線と8番線の間にあったものと同じ改造空間である。

ここまでくれば、あとは秘封?楽部のいつもの結界遊びの要領だ。

(わあ……)

苦も無く境界を跨いだメリーは、眼前に広がった秘密のホームの光景に目を輝かせる。

そこに停まっていたのは真紅の蒸気機関車。日本ではイベントでしか動いている姿を見れない風情ある車容は、それそのものが非日常の塊だ。周囲に賑わう人影は皆が魔法使いだろうか。子供と抱き合い、ときに車両の窓へ手を振る大人たち。

間違いない、あの列車が『ホグワーツ急行』だ。

だがメリーの興味は目の前の蒸気機関車よりも、その周囲に張り巡らされている複雑な隠蔽魔法にあった。

無数の簡単な性質を付与した覆いを重ね合わせ、一つの疑似結界を創造する。言うなれば煉瓦で摩天楼を建てるに等しい行為。高位の神仏妖魔が好んで使うような秘儀を矮小な人間が再現している奇跡に、メリーは同じ人間として感動を覚えていた。

(日本でよく見かける境界とは違う発想だけど、これも一応は境界の分類に入るのね。ホグワーツに着いたらここで使われてる隠蔽魔法に付いて調べてみましょう)

ウキウキと脳内予定表に書き込んでいると、発車を告げる汽笛の音がホームに木霊した。メリーは慌てて列車の荷物置き場にトランクケースを投げ入れ、車内へ飛び込む。懐中時計の分針は11と0の間。出発ギリギリの時間だった。

(うわ、ほぼ満席……7番線の境界を辿って遊び過ぎたかしら)

幅広い年齢の少年少女たちが騒がしく談笑する客室を横目に、メリーはひとまず車内の人気のない場所を探す。ここホグワーツ急行内では魔法の使用が認められているため、試すなら教師の目がない今の内だ。

車両後部の化粧室へ入り、鍵を掛ける。そして持ち込んだシヨルダーバツグに向かって杖を振るい、静かに呪文を詠唱した。

「*Diminuendo*、縮め」

唱えたのは対象を縮小させる呪文。すると僅かな間の後、一瞬でメリーの肩掛け鞆が財布ほどの大きさに縮んだ。

(よかった、いつも通り)

メリーの目的は、実家の魔術工房の外で魔法を使ったときの感覚の差異を調べることだ。先祖が残したあの秘密の屋根裏部屋は100年以上も魔法省の感知を逃れてきた強力な独立空間であり、未だその構造の多くが謎に包まれている極めて特殊な環境だ。最悪その違いで魔法事故になる可能性も危惧していたメリーはほっと一息つく。

(さて……)

続けての呪文は、彼女の本命にして鬼門。これはダブリンの拠点で暮らす蓮子へ向けたホグワーツ潜入作戦開始の合図でもある。

「せー……のっ——」

その瞬間、呪文を詠唱することなく魔法が発動した。杖に至っては構える間すらない。

無言かつ無杖。これがメリーが自身の異能との適正を感じる系統の呪文。特定の対象を自分の許へ引き寄せる【呼び寄せ呪文】だ。

そんな神がかり的な練度の魔法で召喚したのは、黒い女性用の中折れ帽。悪友、宇佐見蓮子の愛帽だ。

ダブリンの拠点を離れ未だ3時間弱。別に心細かったわけではないが、あの腐れ縁の少女の私物を手にした瞬間、メリーは心に何か温かいモノが宿った気がした。

(つたく、そこらの親元離れたばかりの小学生じゃないんだから……いやまあ、私も子供なだけで)

何故か無性に恥ずかしくなった少女は気持ちいを切り替えようと、続けて【取り替え呪文】で私服から魔法学校の制服に着替える。そして鏡の前で着崩れ等の確認にくるりと回り、使える全ての魔法を試したメリーは実験の総括に移った。

(……さて、この中で明らかに完成度が異次元なのは、やっぱり【呼び寄せ呪文】と【盾の呪文】。どちらも空間関係の魔法ね)

自分を覆う魔法の光膜をつつきながら、メリーは召喚した蓮子の帽子を片手に思考の海へ沈んでいく。

この二つはホグワーツの四年生で学ぶ比較的高度な呪文である。少なくともメリーと同年齢の子供の魔力と精神力ではまずマトモな結果にならない。

魔法界で用いられる魔法は『術』『呪文』『まじない』『呪い』『呪詛』の五科名法の他に、「対象へ性質を付与する」ものと、「対象の形状を変化させる」ものと二つの大きな分類が存在する。

前者が”TRANSFIGURATION”、『変身術』。例えば【変幻自在術】の魔法は、物体の有する性質そのものを操作し、無機物を有機物へ、金貨をドラゴンに変化させることさえできる。

そして後者の類が”CHARM”、『呪文術』。例えば物体を透明にする【目くらまし術】の魔法は、体積、質量、形状など、その物体が有する様々な性質の中に「人の目に映らない」という新たな性質を追加する形でその効果が表れる。

この内メリーが得意とするものは後者の『呪文術』。特に対象を空間を超えて移動させる転移系の魔法は、その効果を思い浮かべただけ

で容易く使うことが出来ていた。まるで自分の手足を動かすように、軽々と。

特筆すべきは『呼び寄せ呪文』。蓮子の帽子を召喚したメリーの呪文だ。

「Accio、来い」の詠唱で発動するこの呪文には本来、空間を越えて物体を呼び寄せせる力は無い。しかしメリーの呪文では国一つ越えたダブリンの、しかも彼女の先祖が強固な魔術的防御を施した屋根裏部屋の魔術工房から相棒の帽子を召喚している。

小鬼ゴブリンら魔法生物の生息に、クイレルとポッター少年に憑く悪霊の分霊。そこに新たに見つかった、空間系魔法とメリーの異能の親和性。蓮子はこの発見がメリーの異能の謎を解き明かすピースになり得ると期待し、研究の進展に大喜びしていたが、メリーの胸には一抹の不安が棲み着いていた。

この異常な魔法適正は、果たして「才能」の枠組みに入れてよいものなのか。それとも、もつと強大な、人間という種族の壁すら超えた力の片鱗なのか。

そしてもし、そうなのであれば。この力を磨いた先にある、自分の未来は――

「……いい、いやいや！ 大丈夫、私はちゃんと人間だから……！」

メリーは体を抱きしめながらそう自分に言い聞かせ、いつの間にか出発した汽車の振動に促されるように化粧室を後にした。

客観的に見れば、そんな不安げな彼女の姿は、実に人目を惹くことだろう。

柔らかく波打つ、肩で揃えられたシフォンウェーブの絹髪。ローブの隙間から除く透き通るような新雪の肌。憂いに伏せられた瞼の奥に垣間見える鮮やかなアメジストの紫瞳。

まるで人形のように整った少女の容姿は宛ら泉の乙女たちの如く、車窓の陽光の中で淡く輝いている。

故に。

「——あつ、あの！ えつと、Miss ハーンだよね？」

一月前にダイアゴン横丁で出会った彼女の、美しくも儂い横顔に、その「生き残った男の子」と呼ばれる彼は一目で気付けたのだ。

FILE. 04：hogwarts城（挿絵注意）

西暦1991年9月1日 午後

英吉利・スコットランド蘇格蘭某所 『hogwarts急行』23番客室

hogwartsへ向かう古風な列車の旅の途中。嫌味な少年グループとの喧嘩を終え自分の客室へ凱旋したハリーは、共に立ち向かってくれた戦友の同級生たちと冷め止まない興奮の余韻に浸っていた。

「……………え？」

ふと、口数が少なかった戦友の一人、ネビル・ロングボトムの呆けるような声を耳にする一同。彼の視線が指す車両の廊下へ目を向けたハリーたちは、そこに居た小柄な人影を見つけた瞬間、思わず息を呑んだ。

逆光の客室の入り口を借景にした、一人の少女。その光景はまるで教科書に載る名画のようだった。

「ぎ、君……………」

しかしハリーはそんな彼女の横顔に強い既視感を覚え、咄嗟に声をかける。

振り向いた少女、その人間離れした美貌を彼が忘れるはずがない。あの日、ハグリッドの案内で飛び込んだ魔法の社会で体験した事の中でも一、二を争う衝撃的な出来事。彼女はハリーにとって、間違いなくこの新たな世界を象徴する素敵な出会いだったのだから。

少女——マエリベリー・ハーンと名乗ったあの絵本のお姫さまのような同級生との再会は、彼女に相応しい実に美しく印象的なものであった。

「ひ、久しぶり、Miss ハーン。あの、僕のこと覚えてるかな。前にロンドンの魔法使いたちのパブで会ったんだけど」

「……………ええ、勿論。お久しぶりですね、Mr. ポッター」

大きい宝石のような目を丸くしていた少女が僅かな沈黙の後、逆光

の中で静かにその唇を開く。

「よ、よかった！ あ、えつと、ここ空いてるけど……座る？ どこも混んじやってるから、ここが一番だと思うよ」

顔を覚えてもらっていたことに喜んだハリーは、勇気を出してマエリベリーへ隣の席を進める。その甲斐あつてか、彼女は僅かな迷いの末「ではお言葉に甘えて」と行儀よくキャビンの客席へ腰を下ろした。

場所は一同の端、栗毛の少女ハーマイオニー・グレンジャーの隣。ハリーにとっては一番遠い微妙な席だが、残された二つの空席のうち同性の彼女の側を選べばそれも必然とあきらめるしかない。

「おつたまげた……！ 君、凄いキラキラしてたんだもん。妖精に魅入られたんじゃないかって思ったよ」

「え、ええ。私も天使が舞い降りたかと……」

「ぼ、僕も」

ようやく我に返った友人たちも口々に少女の神秘的な雰囲気や誉めそやす。中でもハーマイオニーの情熱は人一倍強かった。

「でもよかった、さっきのは光の加減だったみたいね。こうして近くで見ると……近くで見てもあまり変わらないじゃない！ そのふわふわして綺麗な髪の毛とか嫉妬しちゃう！ ねえ、貴女シャンプーは何をつかっているの？ コンデイションナーは？ それとも魔法かしら？ ああ、ホントに素敵！」

「え、ええと……」

「あ、ごめんなさい！ まずは自己紹介よね！ 私はハーマイオニー・グレンジャーで、こつちがロナルド・ウィーズリーよ。でも彼の事はロンって呼んであげて。こつちの男の子はネビル・ロングボトムで……ハリーのことはもう知ってるみたいだし紹介はいいわよね。私たちも今日ここで会ったばかりなの。同じ新生よ、よろしくね！」

キンキンと響く甲高い声で機関銃のように言葉を吐き出す栗毛の少女にマエリベリーが戸惑っている。しかしそれも一瞬。直ぐに穏やかな物腰に戻った彼女は、初対面のハリーの友人たちへ簡潔な挨拶と自己紹介をしてくれた。

「……初めまして、Miss グレンジャー、Mr. ウィーズリー、Mr. ロングボトム。私はマエリベリー・ハーンと申します、よろしく
お願いします」

もつともハリーが『漏れ鍋』でも思ったように、彼女の硬派な姿勢には周囲も眉を傾斜させる。

「マエリベリー」……不思議な名前ね。でもとっても綺麗！ あ、私のことはハーマイオニーでいいわ！ 苗字呼びなんて他人行儀で寂しいもの」

「僕もロンって呼んでよ。礼儀に煩い大人ならともかく、同い年の女の子に”Mr.”なんて呼ばれたらむず痒くてたまらないや」

「ぼ、僕もネビルでいいよ」

だがそんな少年少女たちの真っ直ぐな瞳にもマエリベリーは無反応。

「いいえ、親しき中にも礼儀あり。これは私のクセのようなものだから、どうかお気になさらず」

「そ、そう……？」

威圧とは違う、有無を言わせぬ不思議な強制力に一同は口を噤むことしか出来ない。だがこういうときに強いのも、やはり口から先に生まれる人種と言われる女のハーマイオニーであった。

「でも礼儀も大事だけど、時には親しみを感じる呼び方で相手を呼ぶことも大事だつて本にも書いてあったわ。ギルデロイ・ロックハートの”MAGICAL ME”って自伝んだけど、マエリベリーは知ってる？ 魔法界の勉強をしているときに学ぶことが多すぎて、少し途方に暮れちゃったときがあつただけだね。貴女もそんなときあるわよね？ でね、そのときに彼のハンサムなスマイルと、ウィットに富んだ作風に何度も助けられて、私もうすっかりファンになっちゃった！」

固まった空気を栗毛少女の言葉の弾幕が叩き壊し、調子を取り戻した男の子たちが会話に合流する。些か喧嘩腰なのはソバカスが印象的な少年、ロナルド・ウィーズリーの”ロン”だ。

「うげ、あいつかよ。止めてくれハーマイオニー、ウチのママがお熱で

いつもロックハートのことばっかり話すんだ。学校でまであいつの名前を聞いたら気がおかしくなる」

「ちよつと、何よロン！ 彼の悪口はゆるさないわ！ 貴方なんて、さつき見せてもらったけど魔法族のクセに全然呪文使えないじゃない！ 魔法に触れてまだ二月の私のほうがずっと上手よ！ ロックハートも『男の嫉妬は見苦しい』って言ってたけど、本当にその通りね！」

「何だと!？」

「ふ、二人ともケンカはよくないよ……」

唐突に幼稚な言い争いを始める二人。ハリーは客室の端に座るマエリベリーの啞然とした顔に何故か焦りを覚え、慌ててネビルと一緒にロンとハーマイオニーを止めようと腰を浮かせる。

「——Miss グレンジャーは現世の出身なのかしら？」

だがキャビンの剣呑な空気を掃ったのはマエリベリーだった。

「え？ ええ、その通りよ。魔法界では“MUGGLE”って呼ばれてるみたいだけど。でも『現世の出身』って言葉を使うなんて、もしかして貴女もマグルなの？」

「ええ、そうよ。お家の掃除をしてたら窓の前にフクロウがとまって、とてもびっくりしたわ」

マエリベリーの言葉にハリーを除く三人が息を呑む。確かに彼女のような現実離れた容姿の人物が普通の現代社会を生きる子供だったとは中々に信じ難い。ハリーも初対面の『漏れ鍋』で大層驚いた記憶がある。

「君が!? マグル界には凄い女の子がいるんだなあ……ちよつと外の世界に興味が出てきたかも」

「マエリベリーも私と同じなのね！ 私はお誕生日に友達から貰ったカードを読んでたら、その中にホグワーツの入学案内が入ってて、もう一日中パパとママと一緒に大騒ぎしたんだから！ こんな素敵な世界があったなんて初めて知ってから、もう毎日が楽しくてしょうがなくて——」

余程の感動だったのだろう。ハーマイオニーが顔を赤らめ当時の

思い出を捲し立てる。まるで酒に酔った叔母ペチユニアのようだと
思い、ハリーは少し腰を浮かせ彼女から距離を取った。気持ちもわか
らなくはないがこの場ではしゃぐのは些か恥ずかしい。

対し、マエリベリーの彼女への評価は高いようだった。

「素敵な向上心ね。私は初めての魔法の授業が不安で、休みの間に教
科書や魔法書のある程度読み込んでみたけど……Miss グレン
ジャーはどれくらい予習したの？」

予習。

その嫌な単語を聞き、今日までずっとホグワーツ生活を夢想しては
しゃいばかりいたハリーは硬化した。

「予習は完璧よ！一年生の教科書は全部暗記したし、呪文もその魔
法の効果も覚えたわ！学校外での魔法の使用も魔法薬の調査も魔
法省に禁止されるから、実技はどうしようもなかったけど、知識だけ
なら同級生の誰にも負けない自信があるの！」

「……なるほど、それはいいことを聞いたわ。困ったときは色々と貴
女の勉強方法を参考にしてもいいかしら？」

「ええ、もちろん！マエリベリーも勉強が好きなのね？話してみ
てすぐにわかったわ、『この子は優秀だ』って！でも成績は負けない
わよっ。」

「そうね、お互い頑張りましょう」

ライバル宣言を交わす少女たちの友情にハリーは思わず肩を竦め
る。他界した両親は魔法界の人間であったと人伝に聞いたが、少年自
身は目の前の女子二人と同じ普通の家庭で育った子供。呑気に時間
を無駄にしてしまった事実に気付き、周囲に無責任にも「英雄」と期
待される彼の背中を冷や汗が伝う。

「参考までにMiss グレンジャーが今使える一番難しい魔法を見
てみたいのだけど、お願いしてもいいかしら？」

「もちろん構わないわ。でも実際に魔法を使わせて貰ったのは最近だ
し、使ったことのある呪文の中でなら……そうね——」

気になる少女マエリベリーの失望が怖く内心穏やかでいられない
ハリーを余所に、同級生のマグルの才女たちは実技のテストまで始め

る始末。

ふと気付くと、自分の目の前にハーマイオニーの杖が突き付けられていた。

「Oculus Reparo（眼鏡よ、直れ）！」

杖の先から小さな光が走った直後、ハリーの視界に変化が起きた。驚いた彼は眼鏡を取り、ようやく魔法の効果を確認する。

意地悪な従兄に割られた眼鏡のレンズが綺麗に直っていたのだ。

「汽車の出発前にパパのサングラスもこれで直したの。マエリベリーなら知ってるでしょうけど、『基本問題集・グレード 1』に載ってる【修復呪文】よ。壊れた物をより直しやすいように物ごとに専用の呪文があつて、慣れるとただ「Reparo、直れ」だけでどんなものも自在に直せるようになるみたい。私はまだ試してないけど、絶対使いこなしてみせるわ！」

「すげえ……流石ガリ勉」

「ほ、僕も頑張らないと……」

ハーマイオニーの魔法に感嘆する少年たち。厭味つたらしくはあ
るものの、いがみ合っていたロンも彼女を称賛している。

「……休みの間ずっと魔法が使えない環境にいたのに、たった一日で一年の教科書の難関呪文の一つを……これはすごいわ、Miss グレンジャー。素晴らしい同級生に恵まれた私はとても幸運よ」

「ふふっ、ありがとう！ これでも頑張ったのよ」

そう笑うハーマイオニーを注視する少女の紫色の瞳は輝いていた。

最初にマエリベリーと出会ったのは自分だというのに、ハリーは彼女が何かに好意的な関心を寄せるような表情を見たのはこれが初めてであった。

「Miss グレンジャーはご存知？ ホグワーツの図書館には全学年の教科書が置いてあるそうよ。余裕があるときに今度覗いてみるつもりなんだけど、貴女も一緒にいかが？」

「ええ、聞いたことがあるわ！ どんな知識が載ってるのかしら。楽しみね、マエリベリー！」

交流を深める女子たちの姿にどこか面白くない気持ちになったハ

リーは、教科書にほとんど目を通していない自分の非を誤魔化すようにそつぽを向き、溶けかけたカエルチョコレートを口に運ぶことに没頭した。

西暦1991年9月1日 夜

英吉利・蘇格蘭某所 スコットランド 『ホグズミード駅』

夜の帳が下りる魔法使いたちの村、ホグズミード。その最寄り駅に停まったメリーたちの赤い汽車は、静かに白煙を夜空に立ち上らせていた。

「さあ新入生の皆さん、私についてきてください。足元に気を付けて」
厳格そうな老女がホームの中央に立っている。ホグワーツ魔法学校の副校長を務める『変身術』の権威、大魔女ミネルバ・マクゴナガルだ。

キビキビと先導する彼女の厳しい態度に益々緊張する新入生たち。前年、凶体は大きくとも愛嬌のあつた巨人の森番に案内された上級生たちの憐憫の目が虚しい。新聞に載っていたこともあつてか、常の担当者ルビウス・ハグリッドが何者かに襲われ、魔法界の中央医療機関『聖マング魔法疾患傷害病院』に入院中であることを知る生徒は多いようだ。

そんなハグリッドの不幸の煽りを受けている初々しい新入生たちの中に、一際目立つ美しい女の子が一人。

(まさかポッター君と列車内で遭遇するとは……)

白金色の髪を風に揺らしながら、その華奢な体を更に縮ませ歩く少女——メリーは伏せた顔の裏で困り果てていた。

ちらりと隣を窺うと、話題の少年が周囲の視線を集め恐縮している。名乗ってもいない内からこの様子とは余程に顔が割れているの

か、天性のスター性か。成り行きで汽車内から行動を共にする羽目になったが、結局離れる機会を見つけれないままホグワーツに着いてしまった。

蓮子への手紙に書くネタが増えたと思うしかない。メリーはそう自分を慰めながら、親友と交わした先月の会話を振り返った。

『——あの朴訥そうなポッター君が極悪人を倒した?』

朝食のスクランブルエッグを二人分の皿に装いながら、メリーは居候の少女、宇佐見蓮子へそう聞き返す。それはダブリンの廃診療所で二人暮らしを始めてから半月が経った日の朝のことであった。

『11年前まで魔法界を支配していた悪の魔法使いの禁術をポッター少年が撃ち返して倒したんだって。ほらメリー、ここに書いてる』
『うわ、ホントだ』

蓮子が手渡してきたのは、メリーが先日ダイアゴン横丁で買った“DAILY PROPHECY”——『日刊予言者新聞』の七月の縮刷版。その日の記事が載るページはあの悪霊憑きの眼鏡少年の話題一色であった。

『って、あれ? 11年前ってポッター君が赤ちゃんの頃でしょ?』

『そうよ、乳児が魔法界史上有数の大魔法使いに勝利したの。大本営発表だ』

『それは凄い……のよね? 突拍子も無さ過ぎてよくわからないわ。魔法だしそんなこともありそうな気もするけど』

『私としてはそんな与太話を本気で信じる魔法界とポッター君のどっちが凄いのか議論したいくらいだわ』

必ず相手を殺すが扱いの難しい「死の呪文」。油断など気の緩みで呪文が失敗して自分に跳ね返ってしまった、なんてことも考えられる。詳細は邪推を含め推測するしかないが。

『0歳児の英雄なんて冗談にもならないし、本当に魔法省の与り知らぬところで起きた奇跡なんだとしたら……』

『実際に相手を倒したのはポッター君に憑いてる例の悪霊さん、とか?』

『ええ……あんな怖い感じがしたモノが助けてくれたって言うの？
無い無い』

『単純に悪霊さんが例の極悪魔法使いと敵対してたんじゃない？
ポッター君は運悪く巻き込まれただけで、助けられたワケじゃないの
かも』

『……確かにクイレル先生にも同じ悪霊が憑いてることを考えれば、
悪同士の大決戦でより魔法社会への影響力が強かった極悪魔法使い
側が敗れただけ……とも解釈できるわね』

少ない情報で妄想を楽しむ少女たちであつたが、気が済んだ蓮子が
一拍置き本題に移る。

『まあ私はつまり、メリーにメロメロなポッター君は魔法界随一の有
名人だから、可哀想だけど仲良くするのは避けなさいって言いたい
よ』

『何よその罪悪感煽る言い方……』

メリーとしてもポッター少年を避けるのは賛成だが、やはり見て見
ぬフリは気が重い。煮え切らない彼女の態度を見て、全てを割り切っ
ている淡泊な蓮子は溜息を吐く。

『てかそんな悪霊なんかと戯れてるヒマがあるなら、魔法界でしかで
きないクイディッチとか魔法生物飼育とかで遊びなさいよ。除霊
ごっこは日本でもできるじゃない』

『……蓮子が友達少ない理由がとてよくわかったわ』

『まあ酷い。同族嫌悪だなんて低レベルな反論だコト』

『失敬な、私はまだマシよ！ ……マシよね？』

『傷の舐め合いでもする？』

『しないっ！』

既に魔法という最高のオモチヤを得ているからか、随分とそれ以外
にドライな蓮子。異能のせいで人の道から外れつつあると自覚して
いるため、人らしい感情を大切にしたいと常に頭の片隅で考えている
メリーは、彼女のような合理的過ぎる考えには少しだけ消極的であつ
た。

しかし、蓮子の主張のほうが一理も二理もあるのは事実。

『はあ……でもそうね。蓮子にもこうして助けてもらってるわけだし、こちらの害にならない程度のお付き合いに留めるわ』

『別に私が居ようと居まいと、神秘との賢い付き合い方は「君子危うきに近寄らず」なんだけど……まあメリーはすぐトラブルに巻き込まれるから、そのときはもう割り切りましょ！』

『……絶対にポッター君には近づかないわ』

『うわ、これはもうダメね』

そして、その結果は以下略。

「——ねえ、見てマエリベリー！」

そんな脳裏の蓮子の呆れ様に拗ねていたメリーは、隣の親しげな栗毛の少女の声で現実へ呼び戻される。通学の汽車で知り合った新たな友人、もとい隠れ蓑——ハーマイオニー・グレンジャーだ。

グレンジャーと親しくなれたのは偶然であった。同じ外部生マグル生まれの同級生にして、明るい将来を感じさせる魔女見習い。強い自己承認欲とそれに見合った才を持ち、勉学を好む彼女は、さぞ教師の覚え目出度い優等生になるだろう。

授業態度で教師陣の信頼を得つつ、危険視されない程度に己の魔力を制限しなくてはならないメリーにとって、ハーマイオニー・グレンジャーという指標の存在は大変ありがたかった。

「何かしら、Miss グレンジャー」

「ほら、あれが Hogwartz 城よ！」

メリーは彼女の指差す方角へ目を向ける。そこに広がっていた幻想的な光景は魔法を愛する万人の心を捕らえて離さない、湖畔の山頂に建つ魔法界最大の城郭、Hogwartz 城。

全ての魔女魔法使いの登竜門『Hogwartz 魔法魔術学校』。最も高い魔力を持つ子供たちが世界中から集い、旅立ち、そして名を遺した、神秘の最高学府である。

満天の星々が天湖より照らす古代魔法の牙城が、『異端児ハーン』の血を今一度、その大きな胸襟に歓迎しようとしていた。

FILE. 05：組み分け帽子との攻防（挿絵注意）

西暦1991年9月1日 夜

英吉利・蘇格蘭某所 スコットランド 『ホグワーツ魔法魔術学校』 大講堂前待機室

「新入生の皆さん。ご入学おめでとございます」

サクソン、ゴシック、ルネサンス。何世紀にも亘る増改築の跡が色濃く残るホグワーツ城。その圧倒的な歴史的価値にメリーが目を奪われていると、先導していたマクゴナガルが振り返った。

ここは名高いホグワーツ大講堂へ通じる仰々しい大扉——の隣にある待合室。緊張に強張る新入生たちを見渡し、老魔女がこれから始まる入学式の進行についての説明と注意事項を述べる。

「今から皆さんは先ほどの大扉をくぐり、上級生と合流します。ですがその前にまず、皆さん新入生が入る四つの寮の組み分け儀式について説明します」

ざわめく生徒たちに紛れ、メリーは考えを巡らせる。

寮組み分けの儀式。学校の創始者たちが立ち上げた四つの寮へ新入生を組み分ける年度最初にして最大の行事だ。寮は当人の本質や一族代々の傾向を参考に選ばれ、個人の意思が尊重されることは稀とされる。明確な目標を持ち、望む寮がある程度決まっているメリーにとっては悩みの種だ。

（生徒が素質に反した寮へ選ばれた例は少ないらしいけど、私の場合はそれが逆に不味いことになるのよね……）

グリフィンボール。勇敢で情熱的な生徒が集い、正義を重んじる高潔な寮。そのためか自己主張が激しい短気で頑固な問題児が多く、よく教師陣を困らせている。現在の魔法界はダンブルドア校長を筆頭にグリフィンボール出身の著名人の影響力が強いため、この寮の生徒たちは何かと学校側から優遇されるとの噂も。ちなみに世間の認識

では、あのハリー・ポッターもここに入ることが血筋的にほぼ決定的らしい。

ハツフルパフ。温厚で忍耐強い生徒が集い、平和と忠誠心を重んじる友好的な寮。過度な競争を好まないせいかなぼんやりとした生徒が多く、他の寮から劣等生寮と蔑まれていているらしい。この寮出身の魔法使いには稀に歴史に残る大偉業を成す偉人が現れ、それがハツフルパフ生たちの数少ない自慢だとか。

レイブンクロー。勉強に長けた気高い生徒が集い、好奇心を重んじる知的な寮。聡明だが冷淡な生徒が多く、他の寮の生徒は勿論、同じレイブンクロー生でも尊敬に値しない者はとことん見下す傾向がある。魔法省の研究機関職員の席はこの寮の卒業生でほぼ独占されており、彼らの評価は非常に高い。

スリザリン。知能に優れる狡猾な生徒が集い、魔法族の誇りを重んじる保守的な寮。内部の結束は固いが反面同寮の生徒以外には排他的で、特にマグル出身の者を嫌う純魔法族主義者が多い。この寮出身の卒業生は代々優秀な官僚や政治家として大成することで有名だったが、半世紀ほど前から禁忌とされる『闇の魔術』に傾倒する者が増加しており、そのため優秀なスリザリン生は学校から密かに警戒されるらしい。

どれも実に個性的な寮である。

(まずスリザリンは私が現世出身ってことと、先生に危険視されかねないことの二点から論外。グリフィンドールもポッター君を避けたいからご遠慮願いたいわね。残る二つだと、レイブンクローはあのグレンジャーさんが入りそうだし、他にも色々都合が良いんだけど……闇の魔法使いを殆ど出してないハツフルパフも先生の信頼という意味ではメリットが大きいのよね)

説明を終えたマクゴナガルが一時離席する姿を見送りながら、メリーは入る寮の皮算用を続ける。だがその時、少女は不意にこちらへ近づく異様な気配を感知した。

「……………」

「どうしたの、マエリベリー?」

グレンジャーの問いかけを右手で制し、メリーはじつと近づくソレらを待ち構える。すると左の生徒の集団の中から甲高い悲鳴が上がった。

「うわあ、ゴーストだっ—」

現れたのは20を数える白い影。人の姿をしたソレらは風のように室内を縦横無尽に飛び回り壁をすり抜けていく。

『許せよ忘れよ。そろそろピーブズを見逃してやったらどうかかな?』

『修道士よ、君もあやつのせいで幾度も悪名を被ったではありませんか。そもそも奴はゴーストではないと言うに……おや?』

その内の二体が動揺する新入生の輪へ顔を向けた。色褪せた修道服を腰巻で留めた小太りな男性と、見事な口髭とひだ襟をしたホーズ姿の中世貴族風男性だ。

『君たちは何故ここで屯しているのです?』

『見かけない顔ぶれだね……おっ、もしかして新入生かな?』

突然話しかけられ怯える子供たち。だが沈黙の中でメリーだけは、素晴らしい研究対象と巡り会えた幸運に興奮していた。

「はい。初めまして、組み分けの儀式を控えた者です。あなた方は、その……幽霊、なのですか?」

クイレルの憑き霊とは異なる気配を持つ者たちではある。だがまさか同じ靈魂種と理性的な会話ができるとは思わず、メリーは周囲の目も憚らず彼らへ話しかけた。

『おおっ、お返事を貰えるとは幸い! 初めまして、美しいお嬢さん。

私はおっしやるとおりゴーストの……おや、名前はなんだったかな。遠い昔のことは忘れてしまったよ』

「ゴースト……」

『代わりに修道士とでも呼んでおくれ。ハツフルパフで会えることを楽しみにしているよ、生前の私の家だからね!』

太った修道服の男の友好的な態度につられ、メリーは貴重な機会を逃すまいと質問を重ねる。

「あの、差し支えなければ皆さまゴーストの種別についてお伺いしても——」

「騒がしいですよ、Miss Hahn。私語は慎みなさい」

だが少女の取材はマクゴナガルの声によって阻まれる。どうやら組み分け儀式の準備が終わったようだ。

「土爵、修道士も。新生をからかうのはお止めください」

『なんと！ 全くの誤解ですぞ、ミネルバ副校長！ 我等をあの忌々しいポルターガイストと同列に扱わないでいただきたい！』

『ふうむ、この評価はよろしくないな。サー・ニコラス、やはり貴方の言う通りピーズにはもう少しお仕置が必要かもしれない』

マクゴナガルの白い目に憤慨した二体のゴーストたちは互いに頷き合うと、既に退散していた他の同胞たちを追ってどこかへ消えて行った。去る彼らを惜しむメリーも、はたと我に振り返り慌てて老魔女へ謝罪する。

「失礼致しました、マクゴナガル先生」

「ゴーストは気紛れで厄介な存在ですので、此度は大目に見ます。次は気を付けなさい」

「はい……」

殊勝に俯き、新生たちの輪へと戻る少女。ハリー・ポッターと愉快な仲間たちの好奇の視線が突き刺さる。

（全く、貴方の憑き霊をどうにかしたくてやったことでもあるのに……）

だが、この学校にゴーストという大きな情報源があると知れたのは幸先良い。その友好的な一人、太った修道士にメリーは期待を寄せていた。

（……よし決めた。寮の希望が通るならあそこにしてもらおう）
その後しばらくし、マクゴナガルがようやく一同を大講堂へ案内した。

「よろしいですか？ それでは皆さん、私に続いて入室してください」
そして老魔女の先導でくぐった大扉の向こうの景色に、メリーは感嘆の溜息をついた。

全在校生と教師陣の拍手に迎えられた少年少女たちの頭上。高く

そびえるゴシック建築の大ヴォールトに——広大な幻想の宇宙が広がっていた。

西暦1991年9月1日 夜

英吉利・蘇格蘭某所^{スコットランド} 『ホグワーツ魔法魔術学校』 大講堂

無数の浮遊する蠟燭の灯りと、星々の祝福が降り注ぐホグワーツ大講堂。魔法で生み出された夜空の下、そして左右四つの長テーブルにズラリと座る上級生たちの間を進み、メリーは他の新生たちと共に講段下に集合した。

壇上に設けられた横長のテーブルには17人の魔女魔法使い。老若男女問わず北歐系、アフリカ系、中東系、アジア系、そして小人のように小柄な異形の男性。こちらはあの巨人教師が言っていた^{レフコーン}靴小人との混血だろう。他にはマクゴナガル副校長、フィールチなる魔法の使えない管理人、最後に入院中のハグリッドを含めた総勢20名がホグワーツの教師陣らしい。

座る先生たちの中にはメリーがダイアゴン横丁でお世話になったクイレルもいる。しばらく視線を向けていると目が合い、彼の引き攣った笑顔で返された。不器用なそれも錚々たる顔ぶれが居並ぶこの場では心強い。変わらず憑いてる後頭部の悪霊が不気味だが。

そして問題の、中央に座るトールキン小説に出てきそうな長い白髭の老人こそ、近代最高と名高い大魔法使いアルバス・ダンブルドアだろう。メリーが近い将来裏切る予定の魔法界。その武力の象徴とも言える恐るべき存在だ。この優しそうなお爺さんをどこまで出し抜けるかが今後の焦点になるだろう。

ふとダンブルドアから教壇に視線を下げると、そこには小さな丸椅

You, ll make your real friends,
 Or plrhaps in Slyt her in kind;
 W h e r e t h o s e o f w i t a n d l e a r n i n g,
 W h e r e t h o s e o f w i s e o l d m i n d,
 O r y e t i n w i s e o l d R a v e n c l a w,
 A n d u n a f r a i d o f t o i l;
 T h o s e p a t i e n t H u f f l e p u f f s a r e t r u e
 W h e r e t h e y a r e j u s t a n d l o y a l,
 Y o u m i g h t b e l o n g i n H u f f l e p u f f,
 S e t G r y f i n d o r s a p a r t;
 T h e r e d a r i n g, n e r v e, a n d c h i v a l r y
 W h e r e d w e l l t h e b r a v e a t t e n d o r,
 Y o u m i g h t b e l o n g i n G r y f f i n d o r,
 W h e r e t h e y o u k e n a n d I w i l l t e l l y o u
 S o c a t r y m e b a n d I w i l l t e l l y o u
 T h e S o r t i n g H a t c a n, s e e,
 T h e r e n o t h i n g h i d d e n i n y o u r h e a d
 A n d I c a n t h e w a r t s S o r t i n g H a t
 F o r I, t o p t h e H o g w a r t s S o r t i n g H a t
 Y o u c a n k e e p y o u r b o w l e r s b l a c k,
 A s m a r t e r h a t t h a n m e.
 I, l l e a t m y s e l f i f y o u c a n f i n d
 B u t d o n t j u d g e o n w h a t y o u s e,
 O h y o u m a y n o t t h i n k I, m p r e t t y,
 ”

子に置かれた奇妙なトンガリ帽子があった。メリーが訝しみながら
 注視していると、唐突にトンガリ帽子のシワが口のように開き、ヘン
 テコな詩を歌い始めた。

Those cunning folk use any means
To achieve their ends.
So put me on! Don't be afraid!
And don't get in a flap!
You're in safe hands
I have none
(though I have none)
For I'm a Thinking Cap!

「……ええ」

周囲の上級生の惜しめない拍手にメリーの困惑の聲は掻き消される。

そんな独特過ぎるセンスの歌い手は、自らを『組み分け帽子』と名乗った。

「そうか、あの帽子を被って、帽子に決めてもらうのか!」

そして後ろのウィーズリーの推理の通り、喝采が止んだ大講堂にマクゴナガルの指示が響き渡る。

「それでは私があなた方の名を一人ずつ呼びます。呼ばれた生徒は組み分けのため帽子を被り、この椅子に座ってください——アボット、ハンナ!」

「は、はいっ!」

心の準備を整える間もなく、短いブロンドの少女が『組み分け帽子』の許へ駆け寄った。緊張に赤らむ顔が隠れるほど深く被せられた帽子が小声で彼女に話しかけている。だが他の新生が焦れる前に彼女は解放された。

”HUFFLEPUFF!”

右手前の長テーブルから歓声が上がった。メリーはそちらへ満面の笑顔で走り去るアボット少女と、彼女を組み分けたあの『組み分け帽子』を交互に見る。

そして、ある疑問を抱いた。

(相手が帽子なのはともかく、面接にしては短すぎる。あんな一瞬で決めるなんて一体どういう基準で選んでるの?)

続いてマクゴナガルが二番目の生徒の名を呼んだ。スーザン・ボーンズなるその女子生徒もアボット同様、ハツフルパフ生のテーブルへ飛び込んでいく。

「——ブート、テリー！」

新たな生徒、少年が帽子に選ばれる。

” R A V E N C L A W ! ”

アボットやボーンズのとときと比較し些か静かな拍手が大講堂に木霊する。続いて同じ寮に組み分けられた少女マンデイ・ブラツクルハーストも、レイブンクロー生たちの歓迎を軽く流し席に座った。生徒たちは在校生も新入生も、お互い寮の特色通りによく組み分けられている。

「——ブラウン、ラベンダー！」

” G R Y F F I N D O R ! ”

メリーが避けたいグリフィンドールに組み分けられた少女も、寮風通りの勝気そうな笑顔が印象的な人物。

「——ブルストロード、ミリセント！」

” S L Y T H E R I N ! ”

家柄主義的なスリザリンに入った少女も、いかにも名家出身らしい気品ある子だ。

(この正確性、絶対面接だけじゃないわよね。最初から書類審査で決まってる、この喋る帽子はただの儀礼的な演出？ いいえ、神秘の最高学府を自称するここの教師陣がそんな方法で選ぶはずがないわ。ならやっぱり魔法？ だとしたらそれはどのような？ あの帽子は、一体何をして生徒たちを篩い分けてるの？)

メリーは『組み分け帽子』の得体の知れなさに眉を顰めながら自分の番を待ち続ける。

「——グレンジャー、ハーマイオニー！」

すると、メリーが注目するグレンジャーの名が呼ばれた。だが彼女が組み分けられた寮の名を聞いた時、「レイブンクロー」の宣言を予想していたメリーは驚いた。

” G R Y F F I N D O R ! ”

本人も意外だったのか僅かに首を傾げるグレンジャー。しかし寮生たちの大歓声に迎えられ、彼女の困惑も霧散した様子。

しかしメリーの疑問は増すばかり。

(グレンジャーさんは列車内で話した限りだと明らかにレイブンクローのはず。なのにどうして? もしかして本人も知らなかった素質を見出された? そんなこと、それこそ個人の深層心理でも覗かない限り——ツ、まさか)

そして、そんな大変な可能性に彼女が思い至った、その直後。

「——ハーン、メアリ……マエリベリー!」

母国出身の教師すら発音を間違える彼女の独特な名前が呼ばれ、メリーは壇上に呼び出されてしまった。

(……あれ? もしかして私、さっそく詰んだ?)

西暦1991年9月1日 夜

英吉利・蘇格蘭某所 スコットランド 『ホグワーツ魔法魔術学校』 大講堂

『……そうか、遂にこの日が来てしまったか』

「!」

シンと静まり返ったホグワーツ大講堂の教壇。『組み分け帽子』を被らされたメリーは、頭に流れ込んできた低い男性の声にピクリと肩を震わせた。

『一と四半世紀と言ったところだな。やれやれ、賭けはあの子の勝利か』

「……?」

『儘ならぬことだ、またアルバスへの秘密が増えてしまった』

不穏な独白。聞き逃せない内容。メリーは咄嗟に帽子へ問い返した。

「……………どういふことですか？ 『賭け』とは一体？ それに『秘密』って……………」

『おや、君は先祖……………家族から何も聞かされていないのかね？』

メリーは帽子の言葉に息を呑む。

先祖。

魔法界に——否、実家の隠し屋根裏部屋を見つけてから何度も聞くようになった意味深な単語。予想は付くが、果たしてそれがこの帽子の言う「秘密の賭け」とどう関係するのかメリーにはわからなかった。「……………私に家族なんていません、物心ついたときは遠縁の親族以外皆他界してました。貴方は私と、私の先祖のことを知っているのですか？」

『そうか、何と不憫な……………だが知らぬのであれば私の口から伝えるのは憚られる。先ほどの言葉は忘れてくれたまえ』

「ッ、そんな」

『君が既に全てを知っていたのであれば、それは』既に終わったことだ。だが私が今、僅かながら知るハーン家の全てを君に語るのであれば、それは”今の出来事”だ。君の未来は私の責任となり、故に私が語った全てを学校最高責任者であるアルバスに伝えなくてはならない。それは君の望みではないだろうか？』

憤るメリーを帽子が諭す。残念ながらこの場で語ってくれる気は一切ないらしい。

とはいえ、ホグワーツ関係者であるこの帽子が自分の先祖と面識があり、かつダンブルドアに秘密にしなくてはならない何らかの弱みがあることはわかった。謎は深まったものの、貴重な成果である。

後はこの難局を潜り抜けるだけだ。

『過ぎた出来事より今を考える事こそ生徒の特権。それでは君と君の血の過去は忘れ、今の君に相応しい未来を決めるとしよう』

「……………」

『さあ、心を開きたまえ。共に君の眠れる素晴らしい才能へ、魔導の光を当てようではないか』

かくして新入生マエリベリー・ハーンの組み分けの儀式が開始した。

「……マエリベリー、長いわね」

「あの凄い可愛い子、組み分け困難者^{ハットストロール}って言うヤツかな。10年に一、二人くらい現れるみたいだけど」

妖精のような美しい少女を望む教壇下の四つの長テーブル。その左後ろの一卓に座るハーマイオニーは、新たな友人の組み分け儀式を見守っていた。

彼女の声に答えるグリフィンドール男子監督生の五年生、パーシー・ウィーズリーも事の成り行きを興味深そうに眺めている。

「私、本当はあの子と一緒にレイブンクローに行きたかったの。でもグリフィンドールも優秀な生徒を欲しがってるってあの帽子に言われて、結局こっちに選ばれたわ」

「そういうええ君も結構時間がかかってたね」

ハーマイオニーは頷く。

「マエリベリーもとっても優秀で、ちょっと意外だったけど、みんなが怯えてたゴーストにも話しかけられるほど勇敢な子よ。絶対グリフィンドールに来るわ!」

「噂によると組み分け困難者^{ハットストロール}の多くはウチかスリザリンで迷われているらしいね。君がそこまで言うのならアイツらに取られる心配は無いかな。二人も優秀な生徒をゲットできる僕たちはとても幸運だ」

「ふふつ、ありがとう! マエリベリーもグリフィンドールに来たらきつと喜ぶわ」

パーシーの称賛に顔をほころばせたハーマイオニーは、友人を歓迎出来る瞬間を今か今かと待ち続ける。

だが、あるいはそうだったかもしれない未来は、彼女たちの前に照らされることはなかった。

『——ほう、あそこを選んだ理由を聞いてもいいかね?』

壇上で続くメリーの組み分けの儀式は五分を超えて尚終わらない。少しずつ大講堂のざわめきが大きくなる中、一人と一個は我関せずと内緒話を続けていた。

「希望は二択。どちらも興味があり、強いて言うなら友人が別の寮に入ったのでそちらへの私的な関心が薄れたからです」

『しかしだね、君は才に優れ、巧妙だ。英知を求め、目的を達するため最初から校則どころか法律すら無視するほどの意気込みでここにいる。君の素質が今の希望先で花開くことはないだろう』

「……伸ばしたくない素質もあるんです。それにお勧めのスリザリンは、私のようなマグル出身者を嫌っているのではありませんか?」

『いいや、少数だがスリザリンにもマグル界出身の子は所属している。外からはわかり辛いのが、あそこは君の想像より遥かに理性的で快適な家なのだよ』

暫しの応酬で、メリーはこの帽子の力の限界を臆気ながら分析できていた。彼はメリーが危惧していた記憶や思考を読み取っているのではなく、より深い、生徒の本質というべきものを感知する魔法具であった。当初はこのまま企みを暴かれ魔法学校から追放されることも覚悟していたが、メリーとしてはまさに九死に一生を得た思いである。

最大の危機を脱したメリーにとって今さら寮の組み分けなど些細なことだったが、彼女はどうせならと脅かされた分の意趣返しに盛大な我儘を垂れて帽子を困らせていた。

『案ずることはない。君はあそこに相応しい素質を全て持っている。年不相応なまでの臨機の才、いざと言う時の決断力、周囲を欺く狡猾さ、認められた者に対する深い愛情。そして過去を思い出すのであれば、然るべき血もそこに含まれるだろう』

「……」

『だが、そうだな。もし過去のしがらみが君を追わぬのであれば、私から言うべきことは何も無いのかもしれない。これは今の君の物語だ、マエリベリー・ハーンよ』

その甲斐あつてか、頑固なメリーに『考える帽子』が少しずつ折れ始める。

「私はただ目立ち過ぎず、波風立てずに勉学に励むことが出来る環境を望みます」

『ふむ、ならば君の智の素質を開花させるレイブンクローはどうかね？』

「私はこちらと適度な距離を保ちつつ、他人の世界を邪魔しない友好的な生徒たちが集う環境で学びたいのです。それに当てはまる寮を希望します」

そして長く不毛な議論の末、メリーは己の希望する寮への組み分けを勝ち取った。

『……生徒の素質を伸ばすのが学び舎の役目である。だがそれを望まぬというのであれば——致し方ない』

直後、大きく唱えられた一つの寮の名と共に、生徒たちの大歓声と落胆の溜息がホグワーツ大講堂に木霊した。

西暦1991年9月1日 夜

英吉利・スコットランド蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』ハツフルパフ寮

寮杯の砂時計が置かれた大階段塔の地下。城の厨房が設けられた廊下のつき当たりに、壁一面の大樽が積み上げられている。大人でも潜れるほど大きな底蓋が整列している光景は中々に壯観で、もし蓋を外し中に入ることが出来れば、それは実に良いかくれんぼスポットになることだろう。

ホグワーツ魔法魔術学校の寮の一つ、心優しく勤勉で忍耐強い生徒が入るとされるハツフルパフ寮への入り口はここにある。

「ヘル——、ガー——、ハツ、フル、パフ！」

「二つ目の列の真ん中の樽の底を二回、ハツフルパフ・リズムで……うん、覚えたわ」

「間違えると熱いビネガーがかけられるなんて、『清めの呪文』を早く覚えなきゃ」

「……その記憶力で入り口の場所とリズムを覚えればいいんじゃないかな」

同寮の生徒たちの会話を横耳に、メリーは慎重に扉の大樽を潜る。

そこにあつた部屋を一言で表すならば、「絵本に出てくる小動物の穴倉の家」だろう。天井の低い円形の洞窟部屋。壁にくり貫かれた丸窓からは優しい月光が射し込み、窓の外では芝やタンポポの葉がそよ風に揺れている。美しく磨かれた銅細工や、様々な薬草や魔法植物に彩られた心地よい室内は、中央の大きな暖炉の炎で仄かに温かい。

埋もれるほど分厚いキルト、沈むほど柔らかいソファ。一度入ったら抜け出せない、そんな快適で可愛いハツフルパフ寮談話室をメリーは一目で気に入った。

「素敵な空間だろう？　ウチの談話室は過去千年以上も他寮の人間に見られたことがない、ホグワーツで最も秘密にされている最高の隠れ家なんだ」

ガブリエル・トルーマンと名乗った男子寮監生が誇らしげに自寮の豆知識を紹介する。流石は神話の時代から続く魔法社会、歴史の重みが現世のそれとは桁が違う。

「ここが貴方たちがこれから七年過ごす寝室よ。窓がないから少し閉鎖的に思えるかもしれないけど、暖房完備で夜は足がポカポカして気持ちいいの」

続いて女子寮監生のベアトリス・ヘイウッドに連れられ二階にある女子寮へ案内される。壁に開いた幾つもの丸扉がそれぞれ寝室に繋がっており、一部屋に割り振られるのは四人。中の天蓋付きベッドの右端には小さなベッドスタンド、左には化粧台が置かれ、赤銅のラン

プに柔らかく照らされている。

寝台の横を見ると予め個人の荷物が運び込まれていた。メリーは自分のトランクケースを見つけ、横のベッドに腰掛ける。

「二人、二人、三人……あたしで四人つ。これで全員ね」

「ならさっそく自己紹介しましょ。まずは組み分けハットストーリー困難者の貴方！ たしか”ハーン”……だったかしら？」

「賛成！ その輝くキューティクルの秘密が気になってしようがなかったの！」

同室の少女たちと親しげに交流しながら、メリーは頭の奥で今日の濃密過ぎた一日を振り返った。

（——ゴーストとお話できたり、ご先祖さまが元ホグワーツ生らしいことがわかったり、幾つか情報は得られたけど……組み分け帽子さんには怪しまれてるでしょうね）

まさか入学式で脳内を覗かれるとは思わず、その時の衝撃を思い出し冷や汗をかくメリー。幸運にも秘密の現世逃亡計画を知られる最悪の事態は免れたようだが、腹に一物を抱えていることは気付かれたかもしれない。

（校長先生に秘密にすることが増えた、とか言ってた帽子さんの言葉を信じるしかないか……）

溜息が零れそうになるが、ルームメイトたちの手前で何とか堪える。

既にあの帽子から学校側に報告が行っているのなら考えるだけ無駄なこと。素知らぬ顔で授業を受けたほうが精神衛生上宜しい。

そんな凶々しさが自分にあるのかメリー自身にはわからなかったが。

（仕方ないわね……）

気持ちを切り替え、少女は覚悟を決める。実はメリーにはこの傷を浅いままに留める策があった。

”Occlumency”——【閉心術へいしんじゆつ】。

魔法界における最も有名な精神防衛呪文であり、他者の記憶や思考

を暴く” Legilimency”——【開心術】に抵抗できる唯一の手段だ。非常に危険かつ日常生活に支障が出る特殊な訓練が必要なため授業期間中は避けたかったが、現状を鑑みれば悠長なことは言っていられないだろう。

現時点ではホグワーツの教師陣からいきなり心を覗く呪文を仕掛けられる可能性は低いですが、企んでいることがことだけにメリーの警戒心は跳ね上がる。

(深夜の校内散策や、禁書の棚に忍び込むのは【閉心術】をマスターしてからにしましょう)

それまでは模範生らしい良い子ちゃんを演じる。そう今後の基本方針を定めたメリーは、ルームメイトたちのお喋りを切り上げ、ダブリンの蓮子へ宛てた手紙を書くべく羽ペンを取るのだった。

FILE. 06：焦燥と安堵（挿絵注意）

西暦1991年9月初週 午前

『ホグワーツ魔法魔術学校』 防衛術塔4階階段

入寮の歓迎会を終えた翌日から、早速ホグワーツ生の授業は始まった。

文化も技術も現世とは異なる魔法界は当然学問も独自の発展を遂げている。変身術や呪文術などの魔術の妙から、魔法生物を扱う薬草学に魔法生物飼育学、水薬ポーションの材料から調合まで幅広い分野を学ぶ魔法薬学、数字や呪術を用い未来を占う占い学、などがその代表だ。

これらとは別に、魔法史、古代ルーン文字、天文学、マグル学の授業はメリーも知る現世の学問と重なる内容が多く、それらは二つの相反する社会が同じ時空に存在するという奇妙で興味深い「現実」を示していた。

ハツフルパフ寮に我儘のゴリ押しで入ったメリーは、計画通り、模範的な優等生として寮を越えて認識されるようになっていた。特に異能を駆使した空間把握能力でホグワーツ城の各教室を速やかに発見できる彼女は、迷子になりがちな新入生から大変頼りにされていた。毎年何人も迷い遅刻し寮杯点を大幅に減らされるハツフルパフ寮にとっては素晴らしい貢献である。

今日もまた、同寮の全一年生をカルガモの雛のように引き連れ教室へ向かう彼女の姿が人目を集めていた。

「ホントにこの動く階段は面倒ですね。『感動も最初の内だけ』だって監督生のガブリエルが言っていましたけど、今はもう言い返せませんよ」

「レイブンクローの創始者が施した仕掛けだそうよ。新入生を虐めて何が楽しいのか、私にはさっぱりだわ」

「あの厭味ったらしいガリ勉連中の親玉なんだ。性格が悪くて当然だね」

先を進むメリーの背後を少年少女たちがワイワイと追い掛ける。

既に校内でも知らぬ者は少なくなり、ハッフルパフ寮以外の生徒たちも自然とこの便利な行列を活用していた。

木曜午前、本日最初の授業はグリフィンドールと合同の『闇の魔術に対する防衛術』。中央ホールから変身術塔の中庭を横ぎり、防衛術塔の4階3C教室へ向かう途中、三つの見覚えのある顔がメリー率いるハッフルパフ行列の最後尾に加わった。

「お、おはよう、Miss ハーン。今日の合同授業、よろしくね」

「久しぶりだな、マエリベリー！ それが有名なハッフルパフ行列だろ？ すぐにわかったよ！」

「私たちも一緒に行つていいかしら。ほんつとこの階段わかり辛くて」

彼らはハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリー、そして紅一点のハーマイオニー・グレンジャー。このように他の寮の生徒が加わるのは毎度のことだが、寮杯点に関わること故にそんな彼らを不快に思うハッフルパフ生も居る様子。

「おや？ 今日の姑息な無賃乗客くんは誰かと見てみれば、我らが英雄ポッター殿じゃないか。ウチの寮を利用して遅刻の減点を免れようだななんて、随分と緑色のローブが似合う顔になったな」

「……僕が、スリザリンだつて言いたいのか？」

「ふざけるな、ミス！ マエリベリーのおかげで遅刻せずに済んでるのはお前も同じだろ！ 彼女は僕たちの友達でもあるんだぞ！」

皮肉げなザカリアス・スマスに噛みつくハリーたち。騒ぎ過ぎると教師に睨まれるため、メリーはグレンジャーに問題児たちを黙らせるようお願いする。

「ちよつとハリー！ ロン！ 廊下では静かにしなさいつて先生に習わなかったのか？ 貴方たちが騒いでると関係ない私やマエリベリーまで叱られちゃうんだから！」

「僕は別に騒いでないよ……」

「お前もグリフィンドールなら僕たちに加勢しろよ、ハーマイオニー！ そのキーキーうるさい声があればスマスも少しは怯むだろうぜ」「何ですって!?!」

だがどうやら人選が悪かったらしい。動物園の猿のように争う彼らにメリーはルームメイトたちと呆れ返る。

「……ねえ、マエリベリー。お節介かもしれないけど、友達を選んだ方がいいわよ」

「グリフィンドールの生徒ってみんなあなのかしら」

「あそこは熱血って言うか、すぐ熱くなって怒りやすい短気な生徒が多いって聞くもの。ザカリアスみたいな人からすればからかい甲斐があるんでしょけど」

ひそひそと、彼らの剣幕に怯えるように身を寄せ合う少女たち。このあたりは実によく寮の個性が表れている。

数日共に過ごしてわかったが、ハツフルパフ生は基本的に温厚で忍耐強く、あまり気の強い子は少ない。よく似た文化の日本での生活が長く、また面倒な人間関係のトラブルを避けたいメリーにとっては実に理想的な環境だった。

もともと、こうして他の寮の生徒と衝突しては、その素晴らしい個性も無意味なのだが……

「——何を騒いでいる！ 教室の中に居ても聞こえているぞ！ グリフィンドールとハツフルパフに減点！」

『ええっ!?!』

悪意無き理不尽とはコミュニケーションの齟齬によって生まれる。入学当日から始まったメリーの賑やかな学校生活は、まるで意図せぬ迷惑なトラブルの連続であった。

西暦1991年9月初週 午前

『ホグワーツ魔法魔術学校』 防衛術塔4階3C教室

オクルメンツ
【閉心術】。

強力な精神干渉魔法【レジリメンツ開心術】に対する防衛手段で、他者に心を覗かれることを防ぐ『呪文術』の一つである。一般的な尋問呪文とは違い【閉心術】は極めて難易度が高く、その安全性や厳しい適正の問題からホグワーツの教育課程にも含まれていない。

【閉心術】の練度には大きく分けて三つの段階がある。

まずは初歩的な第一段階。頭を無にして何も考えないことで相手に暴かれる内容そのものを無くす方法。難易度は低いが思考そのものを放棄するため極めて受動的で、術の使用中はその他の攻撃に全くの無防備となってしまう。また強力な開心術師が行う「記憶の読み取り」に対しても抵抗できない。

第二段階は、自分の思考力を維持しつつ特定の記憶や思考にベールをかけるように覆い隠す方法。見られたくないものを隠すことができるが、何かを隠している事実は相手の開心術師に伝わってしまう。

そして第三段階。精神内に二重の層を形成し、表層に偽りの記憶や思考をダミーとして置き、深層に真の記憶を隠しながら自身の思考も維持する方法。この段階まで練達した閉心術師は術を使ったことから相手に気付かせず、逆に欺瞞情報を与え翻弄すらできてしまう。

呪文の向き不向きは個人の性格に由来することが多々あるが、この【閉心術】は特にその傾向が強く、冷静沈着、秘密主義的、あるいは何かしら歪んだ心を持つ者が特に優れた素質を持つと言われている。

そしてそれらは間違いなく、一部は本意だが、マエリベリー・ハーンの精神性と合致する。

だが少女がこの呪文の習得を躊躇していた理由は、その練習方法の厄介な副作用にあった。

(気持ち悪い、まるで脳と心がバラバラになったみたい……)

午前の一限、防衛術の授業。メリーは教室の魔除けのニンニク臭に顔を顰める生徒たちに紛れ、一人だけ【閉心術】練習の精神的苦痛と戦っていた。

実家の魔術工房にあった関連書籍『ニトロオブラナ』には、メリーの欲する高度な【閉心術】の習得方法について詳しく記されていた。だが「自身の本心と無関係なことを考える」という最初の簡単な言葉に惑わされた少女は、次第に難解で危険になっていく練習内容に戸惑いながらも、自身の優れた適正に引き摺られ術の深みにはまってしまう。

危険性は重々承知のつもりだった。だが焦りか、あるいは大学で精神学を専攻していた彼女ならではの慢心があったのか、メリーは感情や思考といった精神の領域に魔法的手段で介入することの恐ろしさを見誤っていた。

呪文の練習を初めてから未だ四日。周りには必死に隠しているものの、メリーは修行の影響で自身の心の制御が危うくなりつつあったのだ。

そして何日もルームメイトの様子がおかしいと、流石に異常に気付く者は現れる。

「……マエリベリー、凄く顔色が悪いけど大丈夫？」

隣に座る同寮のメーガン・ジョーンズが心配の声をかけてきた。気配り上手で大変好ましい少女だが、秘密の多いメリーとしては出来れば放っておいておしかった。

「……大丈夫よ。少し、その、先生のニンニクの臭いに胸焼けしてしまったのかも」

「やっぱり！ クイレルったら、生徒の迷惑も考えてほしいわ！」

咄嗟に口にした言い訳だが、存外周囲も同意しかできないものだったらしい。とはいえ世話になった身の上クイレルをフォローする。

「ま、まあ事情がありがたいのようですし、嗅覚麻痺呪文を学ばきゃけとでも割り切りましょう」

「」

「マエリベリーは大人ね……」

怯えるジョーンズの落ち込む声が微かにメリーの鼓膜を震わせる。罪悪感の棘が深く刺さった胸を押さえ、しかし何と反応するべきかわからず結局少女は聞かなかつたフリをした。

(私、いつからこんなに不愛想な人間に……)

不慣れた環境、危険な目標のせい、か、直面する数々の危機がそうさせるのか。削られる精神と一緒に何か人間として大切なモノが消えつつある。そんな胸騒ぎがメリーの胸中に更なる焦燥の種を植え付ける。

(どうしよう、このままじゃ……)

何か、何かいい手はないか。膨れ上がる苛立ちと不安に侵され、冷静な思考を失う少女。

するとふと見上げた先に、一人の男がいた。

クイリナス・クイレル。

メリーが最も親しくしているホグワーツ教師にして、例の憑き霊の件で一方的な同情心を覚えている人物。独特な話し方やその内容から生徒たちの失笑を買う哀れな新任教師は、味方のいない困窮した少女の目に本来以上に「近しい」存在として映っていた。

何一つ上手く行かない魔法学校生活の中でただ一人、こちらに多少なりとも協力的で、欲する“闇の魔術”の知識を有し、そして親しみ深い現世の常識を知る貴重な存在。追い詰められた幼い犯罪者が彼に縋るのも無理はなかった。

「…クイレル先生、お久しぶりです。先月は学用品の買い物にお付き合いました。ありがとうございます」

「ツひいっ……！ ハ、ハーン、でしたか。お、お久しぶりです……」

授業そのものの簡単な説明で終わった初回の“闇の魔術”に対する“防衛術”の講義。群がるポッターやジョーンズたちを追い払ったメリーは、一人になった教室でふらふらとクイレルの机へ向かい、声をかける。

禁術でも何でもいい。何か一つでも自身の計画に、異能の制御に役

立てる情報を得て心に余裕を作りたい。少女はすり減った精神を落ち着かせる成果を欲し、つい逸ってしまった。

「それでその、ご相談したいことがあるのですが、少しだけお時間をいただけないでしょうか…」

「え、ええ。構いませんが……ん？」

すると、いつも通りオドオドしていたクイレルが蒼白な彼女に何か訝しいもの感じたのか、メリーの目を注視し始めた。思わず後退りそうになるほどの圧迫感、そして同時に感じた脳内の不快な異物感に少女は動揺を隠せない。

そして彼女は気付く。自身の作戦が開始直後に裏目に出るほどの大失敗に終わったことを。

「Miss ハーン、その顔……まさか独学で【閉心術】の練習を？」
「…ッ！」

予想すらしていなかった問いかけにサアツ…と顔の血の気が引く。結界遊びで幾度も修羅場をくぐつていようと所詮は11歳の女の子。咄嗟に取り繕ったが、不運にもこのクイレルは誤魔化せる相手ではなかった。

「そつ、即刻止めたまえ！ 私も昔独学で何度も呪文に失敗し鏡でそんな濁った目をしていた自分を見た！ 第一、落ちこぼれのハツフルパフ生がそんな高度な術に手を出すなど…！」
「しっ…ぱいっ！」

「当然だろう、私の【開心術】に抗えん時点でその呪文はお前の精神を蝕むだけの毒だ！」

「…ッ!？」

豹変し捲し立てるクイレルの衝撃的な発言、魔法で心が読まれていたことにメリーは戦慄する。

生徒の身を案じる一方、逆にいとも容易く精神呪文をかけてくる教師たちへの恐怖、そして秘密の計画を見抜かれ全てを失う絶望が彼女の理性を叩き壊す。

メリーはその身を以て理解した。“組み分け帽子”に怪しまれたが最後、最早この学校に安息の地などどこにも無いのだと。負の螺旋

に陥った少女の心は底無し沼のようにどこまでも墜ちて行く。

だが、突然目の前に差し出された薬匙が少女の理性を浮上させた。「ツミ、未成年には早すぎる呪文ですし、おっ覚える必要もありません！ Miss ハーン、ひとまずこれを飲みなさい。や、”安らぎの水薬”です」

「…え んむうっ!？」

唇を開いた瞬間薬匙を突っ込まれ、得体の知れない液体の苦みに狂乱するメリー。だが教師の拘束から逃れようと身を振った直後、少女の身体から力が抜け落ちた。

「ッ、イヤッ！ 放し え、あ……」

「むっ!? いつも私の私用では量が多過ぎたか？ いかん、至急マダム・ポンフリーのところへ」

そんなクイレルの慌てる声を最後に、絶望に染まるメリーの意識は深い闇に吸い込まれていった。

西暦1991年9月初週 午後

英吉利・蘇格蘭某所 スコットランド 『ホグワーツ魔法魔術学校』 病室塔医務翼

ツンと鼻を突く刺激臭が微睡む少女の意識を呼び覚ます。ぼんやりとした頭で体を起こしたメリーは清潔なスペクトラグリーンのカーテンに周囲を覆われている光景を暫し見つめ、はたと我に返る。「ハーン、は……?」

「あつ、起きた！ その、気分は大丈夫？ 何かクイレルがやらかして君を気絶させたとかこつそり聞こえちやっただけど…」

思わず口から零れた困惑は、カーテンの奥の声で返された。布の隙間から差し込む陽光が、隣のベッドに横たわる一人の少年の姿を照らす。グリフィンドール寮の制服を着た男の子、記憶が正しければ、おそらく Hogworts 急行でポッターと共にいたあの影の薄い気弱な男の子だ。

「…Mr. ロングボトム？」

「えっ!? ぼ、僕のこと覚えてくれてたんだ…! あ、僕は飛行訓練の授業で、その、やっちゃって…」

ばあつと少年、ネビル・ロングボトムの表情が花開く。何ともグリフィンドールらしくない愛嬌のある笑顔だ。

「どうやら彼はクイレルの後の“飛行訓練”なる筈の授業で大怪我をしたらしい。腕が折れるほど危険な授業の内容が気になるが、生憎今のメリーの優先順位はそちらではない。」

「私、確か“闇の魔術に対する防衛術”の講義の後に、相談しに行ったクイレル先生に何かを無理やり飲まされて…」

「ええっ、そんな酷いことを!? アイツ最低だ、授業も退屈だしとても教師とは思えない…!」

混乱しながらも異様に落ち着いている自分に驚くメリー。隣で騒ぐロングボトムのクイレルに対する憤りを聞き流しひとまず現状を把握しようと辺りを見渡していると、奥から知らない女性の声が聞こえてきた。

「五月蠅いですよ、あなたたち。ここをどこだと思いかしら?」
『!』

二人して振り返ると、開かれたカーテンの隙間に白衣を着た優しげな老女が立っていた。組み分けの儀式のときに教壇に居なかつた先生だろうか、記憶を探っても該当する人物は思い浮かばない。

「お目覚めのようね、Miss ハーン、医務翼へようこそ。私はナーズのポピー・ポンフリーよ。…全くクイレル先生には困ったものかわ、一年生に成人男性用のスプーンを使うなんて」

「…成人、男性用？」

「貴女、危険な精神系の呪文を試して感情のコントロールが効かなくなってしまうんですって？ クイレル先生がおっしゃっていたわ。咄嗟に“安らぎの水薬”で落ち着かせようとしたら容量を誤って貴女を気絶させてしまったそうよ。ああ、呆れた」

“ポンフリー”と名乗った老女の話を聞くうちに、メリーのぼやけた意識が覚める。そして、真っ先に現れた感情は、深い後悔であった。自分は考え無しに何と危険な橋を渡ろうとしていたのか、と。

全くの突然にクイレルに魔法で心を覗かれたことは、少女に残った僅かばかりの油断を悉く打ち砕いた。男の反応を思い返すに、それほど深く記憶を探られたわけではないだろう。しかしああも容易く生徒に向けて【開心術】を行使されたとあっては、例の計画が知られるのも時間の問題である。

「あ、あ…」

八方塞がり。敵のあまりの隙の無さに、そして心配してくれる親友の想いに応えられない自分の無力が不甲斐なく、メリーの目頭に涙が滲む。

そんな彼女の俯く姿は、この世で最も庇護欲を擦る光景だと言われなくても納得するほど愛らしく、また哀れであった。

「はあ…Miss Hahn、あまり思い詰めちゃダメよ？」

「…え？」

そう優しく患者の背中を摩るポンフリーもまた、少女の美貌に魅入られた万人の内の一人。こんな可憐でか弱げな女の子が「魔法界を出し抜く算段を立てんと暗躍している」など当然発想すら浮かばない彼女は、何も知らずに目の前の傷付いた小さな犯罪者の心の慰撫に努めた。

「さつきまでお見舞いに来てらした寮監のスプラウト先生から聞いたわ。貴女、マグル出身で、しかも“Hatsutail”組み分け困難者だったそうね」

嫌な話題にメリーは体を強張らせる。だが彼女の見た目と殊勝な態度に騙されるポンフリーは、どうやら少女の想像とは異なる見解を持っているようであった。

そして、その見解は少女にとつての大いなる光明であり、魔法界にとつての暗雲と言える、完全なる勘違いであった。

「組み分け帽子は1000年も生きてるせいかとおつても頑固で、選んだ行先を変えることも、選んだ理由を他人に語ることもしないのよ。……ねえ、貴女。もしかして組み分け帽子に、望みとは違う寮に入れられたの？」

「ッ」

咄嗟に顔を跳ね上げ老女を見上げたメリーを責める者はいないだろう。ポンフリーの言葉は少女の暗い心情を逆転させる、それはまさにコペルニクスの転回であった。

今、彼女は何と言ったか。「『組み分け帽子』は選んだ理由を他人に語らない」、そう少女の耳に確かに聞こえた。

その意味を二度三度と考えるメリーの心中に、困惑、そして沸々と湧き上がる巨大な歓喜が渦巻き始める。

「賢く偉大な魔法具なのだけど、長い過去を振り返れば僅かながら過ちもあつたそうなの。職員会議でも“組み分け困難者 Hatstaller”の子には少しだけ気を配るようにしてるのだけどね、Mr. ポッターはともかく、貴女はどの先生も『非常に優秀だけど常に暗い顔をしている』つておっしゃられてて、特にスプラウト先生がとても心配してらしたわ。『本当は別の寮に行きたかつたんじゃないか』つて」

「そんなことが……ぼ、僕も本当はハッフルパフに行きたかつたのをあの帽子に無理やりグリフィンボールに入れられたけど、Miss ハーンも似たような目に遭つてたんだ…」

「Mr. ロングボトムもそうだったのね。残念だけど、この問題は親を子が選べないのと同じように諦めるしかないのです。ですが、たとえどの寮であってもここホグワーツでは皆あなたたちの大切な家族よ。Miss ハーンも、どうかそれを忘れないように」

ポンフリーが少年少女を優しく諭す。だが隣で神妙に頷くロングボトムに反し、メリーの脳に周囲の会話は一切届かない。今の少女の内心は、それどころではないのだから。

こんなとき、どんな顔をすれば良いのか。思わぬ驚天動地にメリー

は現実を受け入れることに精いっぱい。否、受け入れきれずに戸惑っているのだろうか。わからない、わからない。

ただ、嫌な気分ではない。

それだけが、混乱する彼女にわかった唯一のことであった。

「安らぎの水薬」の効果が抜けるまでまだ半日はかかるので、午後の授業の先生方には貴女の欠席を伝えてるわ。Mr. ロングボトムもまだ折れた腕の骨がくっついていないので、二人とも翌朝までここを出ることは許しません。いいですね？」

その後、少し言葉を重ねたポンフリーはベッドに横たわる子供たちに釘を刺し、事務室へと去って行った。

静まり返った医務翼で、メリーは繰り返し脳内で自問自答する。まるでそうしなければ今の情報を手放してしまいそうな気がして。

(夢…？ 私の妄想じゃない、わよね…？)

長い、長い沈黙。ただならぬ気配を漂わせるメリーに話しかけるのは憚られたのか、ロングボトムの口も閉じたまま。

如何ほどの時が過ぎ去ったか。小さな溜息が破った医務翼の張り詰めるような静寂は、少女の安堵の微笑と共に霧散した。

「……なーんだ、ふふっ」

「よ、よくわからないけど、元気になったみたいでよかったね…！」

明るさを取り戻した彼女の珍しい柔らかな雰囲気に見惚れ、少年は赤くなる顔を誤魔化すように声をかける。

そんな彼に返された少女の天使の笑顔は、この場の彼だけが独占し、そして一生心を奪い続ける、百億ガリオンの絶景であった。

「ええ、とつても…！」

首まで朱に染まったロングボトムを余所に、少女は自身のベッドに横たわる。

これほど温かく、落ち着いた気持ちで眠気を待てるのはいつ以来だろう。今なら、たとえどんな呪文であろうと成功する気がする。必ず目的を達成出来る気がする。たとえ根拠などなくとも、もう少しくら

いはこの心地よい全能感に浸っていても許されるはずだ。

明日、心配をかけた寮監のスプラウトやクイレル、そしてハツフルパフ女子寮のルームメイトたち丁寧(ていねい)に謝罪し感謝しよう。そう正直に思えるほど、メリーの心は羽根のように軽かった。

西暦1991年10月31日 夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』大講堂

『親愛なるメリーへ』

お元気ですか、そうでしようとも。届く手紙の字面から書き手のニヤニヤ気持ち悪い笑顔が浮かびます、楽しそうで何より。私もニヤニヤしてますが、どちらかというとメリーの空回りとあたふた一喜一憂している姿を想像しているからでしょうか。

まあメリーが私がいないとどれだけダメな子か分かった呆れ半分、こちらに送ってくれるホグワーツの料理や衣類やアメネティがどれも実に好みという相棒の素晴らしき配慮と重すぎる愛にドン引き半分と、最近の私は文字通りニート未満の引きこもり生活を送りながらもお陰様で大変刺激的な毎日を楽しんでいます。

ところで刺激的と言えば、アパートの電気水道ガスの使用歴が付いてそれが万一魔法界に伝わると不味いと全部切ってるのですが、私が今使っている屋根裏部屋の魔法具のトイレやシャワーの排便排水口から時々磯臭く生暖かい風が吹き出てきて、普通に怖いです。設計者

が衛生概念が希薄な130年前のメリーのご先祖様であることを考えると、このままでは乙女の矜持以外にもインスマスの深き者どもの襲撃など様々な危険が懸念されますので、Miss ハーンにおかれましては現状の責任を負いお得意の異能適正魔法でこちらの便器とホグワーツの女子トイレの排水管を接続する空間呪文をさつさと開発しやがれいただきたく申し上げます」

「食事前になんて手紙送って来るのよ、蓮子のバカ……！」

月日は流れ、ホグワーツ城下が霜に覆われる朝が多くなつた頃。子供たちが待ちに待った晩秋の伝統行事が行われる日がやってきた。

魔法とお菓子の祭典、ハロウィーンである。

朝食の合間に朝から教師陣が屋敷しもべ妖精たちと共に飾り付けの準備に奔走し、忙しくも楽しんでいる彼らの姿が生徒たちの期待感を煽っていた。

わくわく、そわそわ。そんな擬音が聞こえてきそうな生徒たちの興奮に教師たちも少なからず影響され、学校中が来たるお祭りに沸き立つ10月31日。

そして午後の授業が終わり、天井の夜空に妖しい雷鳴やジャック・オー・ランタンの灯りが輝く夜。ホグワーツ大講堂では眩いばかりのご馳走が、待ちぼうけの子供たちを出迎えていた。

「わあっ！ 見て見てこのパンプキンパイ、中にピュレがいっぱいよ……！」

「ドラムスティックなんてママ私の誕生日のときにも作ってくれないのに、こんなに沢山……！」

「もう僕、ホグワーツにずっと住み続けたいよ……！」

そんなハツフルパフの少年少女たちに同行を促され、届いたダブリンの居候、宇佐見蓮子からの手紙を懐に隠したメリーは、いつもとは一味違う大講堂への道のりを軽い足取りで歩いていた。20世紀現在の日本では影も形も無かった久しぶりの仮装祭りがその理由である。

初週のマダム・ポンフリーの言葉から、あの“考える帽子”が代々

組み分けの儀式の過程全てを教師陣に黙秘していると気付いたメリー。少女は警戒を緩め、本来の目標である教師の信頼篤い模範的優等生を演じられる心の余裕を持ち始めていた。

「意外。マエリベリーっていつもどこか冷めてるから、こういうの苦手かと思ってた」

「…お祭りは純粹に楽しんでこそでしょう?」

わくわくしながら次の美食が空の皿に現れる瞬間を待っていると、横からルームメイトのハンナ・アボットが茶化してきた。

あの悪友が寄こした久々の手紙のせいだろうか。自分でも「らしくない」と思っているメリーは咄嗟に開き直すことで羞恥を隠す。しかしその白い肌に差した朱は誤魔化せない。

目敏く見抜いたアボットが微笑みながら少女との距離を狭めようとする。

「ええ、もちろん! それにマエリベリーもそうやって楽しそうにしてたほうがもっと可愛いわよ?」

「か…かわ つていうか、私ってそんなに周りに冷たく見えるのかしら…?」

同級生の指摘にメリーは少しだけ不安になり窺うように聞き返した。これまで波風立てない公正公平な優等生を演じてきたつもりでいたが、思えば【閉心術】の練習中はよく能面のような顔になっていた気がする。

「え? ううん、最近はそうでもないけど…ただマエリベリーって何でも出来て、凄く綺麗でキラキラしてて、どこか不思議な感じがするって言うか」

「そうそう。出会ったばかりの頃は凄く怖かったし、今も難しい本ばかり読んで寮でもほとんどお話ししてくれないからみんな近寄り難いのよね」

「…Miss ジョーンズまで」

二人の会話に重なるように加わって来たのは、同じ第13号室のムードメーカー、メーガン・ジョーンズ。万人に分け隔てなく接することを心がけているメリーが、日頃の感謝も込めて特に親しくしよう

と意識している少女である。

「それよ、それ！」

「え？」

「その“Miss”とか“Mr”ってみんなのこと呼ぶの！ おまけに苗字でしか呼んでくれないし！」

「マエリベリーは『いつものクセ』だっけ言うけど、やっぱりちよつと冷たい感じがするわ。何か先生に名前呼ばれてるみたいでびっくりしちゃうのよ」

アボットは迫るように、ジョーンズは遠慮がちに、それぞれが不満を述べる。ちらりと周囲を横目で窺えば、近くに座るハツフルパフ生の多くが頷いていた。

こちらに関心を寄せてくる物好きなき子供たちに驚きながらも、メリーはようやく望む形になった【閉心術】の副次効果で自身の感情を容易く制御する。

そもそもダブリンに残った相棒の宇佐見蓮子との約束は、「お試しに一年間だけホグワーツに在学する」というもの。

現時点での進捗は微々たるもので、“異能”を制御する魔法の開発に至るには到底時間が足りないといふ今のメリーには諦めが付いていた。既に蓮子にも事情は伝えてあり、快い「了承」の二文字を受け取っている。あの拠点の水回りに関する愚痴は最早挨拶のようなものだ。

しかし、感情の持ち様は別の話。わざわざ大学を休学してまで、しかも仙人のように薄暗い屋根裏部屋に引きこもりながらも協力してくれる相棒を放置したまま七年もホグワーツに在学する気はないメリーは、余計な情を残さないように先生や生徒たちと必要以上に交流することを避けていた。

とは言え、流石にこれほど注目を集めてしまった状況で彼ら彼女らの期待を裏切ることには、寮生活が基本のホグワーツにおいて極めて好ましくない。イジメなどで無意味にストレスを溜める生活は遠慮したいメリーは、小さく息を吐き、それらしい言葉でお茶を濁すことにした。

「…わかったわ、善処します。でもあまり期待はしないでよ？」
『わあっ！』

どこまでも純粹で素直なハツフルパフ生たち。心を現世に残したまま、彼らの神聖な学び舎に紛れ込んだメリーは、そんな子供たちの無垢な笑顔を直視出来なかった。

少しだけ縮まった寮生たちとの距離を歓迎するべきか否か。メリーは戸惑いながらも新たな変化に適応すべく、盛り上がる生徒の輪に飛び込んだ。

幼くして大人と共に相対性精神学を学んでいた少女に、同年代の子供たちが楽しむ話題などわかるはずもない。それでも、そんな「日常」は、「非日常」しか知らない彼女にとっては確かに心躍る歓迎すべき時間であった。

だが。

「 トロールが…！ トロールが地下室に…っ！」

やはりマエリベリー・ハーンが生きる人生はいつだって、「非日常」こそが日常なのだ。

FILE. 07 : 図書室の隠し階段 (挿絵注意)

西暦1991年10月31日 深夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』ハツフルパフ女子寮

「…ねえ、マエリベリー。起きてる？」

「…もう三度目よ、Miss ボ……スーザン」

緊急事態宣言を下したダンブルドア校長の決定で中止となったハロウィーンパーティ。生徒たちは寮監生の引率で自寮へ戻らされ、隣のスーザン・ボーンズのように不安で眠れない夜を過ごしていた。

「ふっ、ふふふっ」

「…今度は何？」

「ふっ、だつて今マエリベリー初めてスーザンの名前呼んでくれたんだもの。…パーティで勇気を出してみた甲斐があつたわ」

左のベッドから聞こえたその声はメーガン・ジヨーンズのものであつた。場を和ます才においては右に出る者の無い彼女の言葉に、女子寮の緊張が得解される。クスクスと小さな笑い声が零れるメリーたちの寮室には、もう恐怖に震える生徒は一人もいなかった。

「はあ……じゃあメーガン、ハンナ、あともう一度スーザンも。これから名前で呼ぶことにするから、貴女たちはもう寝なさい」

『ホント!?!』

銅ランプの微かな灯の中、姦しい少女たちのはしやぎ声が木霊する。

そんなルームメイトたちの話に適当な相槌を打ちながら、メリーは先ほどの出来事を振り返っていた。

一言二言の息も絶え絶えの中、最低限の報告を果たし大講堂の中央で気絶した人物は、”闇の魔術に対する防衛術”の教師クイリナス・クイレルであつた。

学者タイプのひ弱な魔法使いだとは思っていたが、まさか危険生物

の中でも下位と書かれるトロールから命辛々逃げ出す程度の術者であつたとは思ひも寄らない。大講堂で監督生に連行される直前、倒れたクイレルと少し言葉を交わし無事を確認出来たものの、あの様子では今後が不安である。彼から『閲覧禁止の棚』の魔法書の貸し出し許可を貰わなくてはならないメリーは、明日からそれとなく気を配り護衛の真似でもするべきか、などと冗談染みた考えを浮かべた。

(それにしても、クイレル先生か……あの人意外とガード固いのよね。授業外にも私室へよく遊びに行ったりしてゐるのに中々禁書の閲覧許可をくれないし)

男の名が連想させる難儀な障害にメリーは思い悩む。事実、入学より一月経つて尚、少女は例の禁止書籍に触れることを一度も許されていなかった。

クイレルは予想以上に神経質かつ秘密主義で、自身の“闇の魔術”に対する知識を披露することに消極的な人物であつた。あの精神疾患持ちの変人教師なら頼み倒せば折れてくれると見込んでいたメリーも、最早何度目かもわからない己の見通しの甘さを自覚し溜息を吐く。

組み分けの儀式で心を覗かれた“考える帽子”の一件が杞憂で終わり、いつもの冷静さを取り戻したメリーであつたが、それと同時に限られた時間を奪うこの膠着した状況を早急に打開しなくてはならない焦りも覚えていた。

受動的になつてはしまつては本末転倒。やはり自発的に行動しなければ成果は得られない。少女はこれまでの学校生活を今一度振り返り、何とかあの禁書を読むことは出来ないものか、と思考を巡らせる。

すると突然、あることに思い至つた。

(あら……?)

辿り着いたのは、ホグワーツでの日々で最も新しい10月31日、つまり先ほどのあのトロール事件である。ダブルドア校長による非常事態宣言、寮へ戻つた生徒たち、そしてトロール退治に地下牢へ向かつた全教師陣。

これらの事実から少女が連想することは一つだけ。

今なら、5階の図書館周囲の監視は薄い。

こくり、とメリーの喉が鳴る。その脳は目まぐるしく回転し、利益と損失を天秤にかけ、次々に浮かぶリスクへの対処法を慎重に脳裏で再現し検討していく。

(最近見つけた隠し路だしまだ確認はしてないけど、多分アレを使えばこつそり図書室に行けるはず…)

不確定だが可能性は十分。しかし、危険を冒してでも挑戦するべきなのか。何かとトラブルに巻き込まれることの多い少女はどうしても二の足を踏んでしまう。

「……………」

少女は肺に溜まった熱を吐き出すように深呼吸する。幸い、緊張の解かれたルームメイトたちは皆この非常事態をスリルとして怯えつつも楽しんでおり、こちらに気付いた姿は見られない。

さて、此度の突発的な、またと無いチャンスを生かすか否か。メリーは暫しの葛藤、熟考の末 勇気を出し虎穴に挑む道を選んだ。

己はこの世界における異物。そして異物にとつて、世界の拒絶に抗う意思の強さこそが目的遂行に不可欠なのだから。

「…………不味いわ貴女たち、見回りのMiss ハイウツドの足音よ。興奮して寝れないのならこれでも受けてなさい」

『えっ?』

静かに、それでいて緊張を孕んだマエリベリーの声が少女たちの鼓膜を震わせる。先に寝たと思っていた彼女の言葉に驚くアボット、ボーンズ、ジョーンズの三人へ、一本の不格好な棒の先端が突き付けられた。

幼いながらも学校一美しいと名高いマエリベリー・ハーンが持つ、学校一歪で短いと噂される8インチのサクラの杖だ。

「[Dormi(眠れ)]」

小さく眩かれた一つの呪文の後、一同の目に青白い光が瞬き、直後少女たちは自身の意識を手放した。

くたりと力なくそれぞれのベッドに体を預けるルームメイトたちに現れた魔法の効果を確認し、メリーは三人を自然睡眠に見せかけるため優しく布団を被せる。これでメリーを邪魔する者はいない。

念のため、少女は鞆や衣類を自分自身に似たマネキンドールに変身させる。満足のいく身代わりを完成させたメリーは、続けて自身に【目くらまし術】の呪文をかけ透明になった。未だに持続時間は5分程度が限界のため、絶えず周囲の隙を見てかけ直し、万が一にはもう一つの手札である【縮小呪文】で物陰に隠れながら監視の目をやり過ぎす必要があるだろう。

(…突然巡ってきた貴重なチャンスだし、無理しない程度に大胆に行きましょう。…大丈夫、流石に前回みたいにいきなり頭を覗かれるみたいな回避不能の重大事故なんてそうそうないわよ、きつと…)

先月の組み分けの儀式の恐怖を思い出し、メリーは怖気付く自分へ言い聞かせるように心を鼓舞する。幾度かの深呼吸の末、覚悟を決めたメリーは最後に自分の目を「変身術」で猫の目に変え暗視を確保し、ナイトガウンのまま静かに部屋の扉を開けた。

「…いめんなやい」

眠らせた騒がしいルームメイトたちも、これで見回りの女子監督生ベアトリス・ヘイウッドに減点されずに済む。彼女たちには明日そう弁論しておこう。

小さく謝罪の言葉を残し、メリーは慎重に寮を後にした。

西暦1991年10月31日 深夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』地下1階厨房

ハツフルパフ寮談話室を出て左へと続く廊下に、10を超す食べ物
の静物画が飾られている。その内の一つ、最も談話室に近い正面の果
物籠の油絵には仕掛けが施されており、描かれている洋ナシを擦ると
小さな笑い声と共に絵画が緑のドアノブの扉へと変身する。

通り抜けた先にあるのは大講堂の真下にある巨大なホール、年中竈
の火が絶えない美食の園、ホグワーツ城厨房だ。

メリーは【目くらまし術】が体にかかる冷たい感覚を維持しつつ、
そつと寮の談話室出入口の樽をくぐり、地下1階の廊下へ出た。通路
を通り地下2階へ赴けばスリザリン寮と、問題のトロールが出没した
地下牢がある。が、そちらは現在教師陣が集まっており、好奇心に負
ければ一発で減点と説教の懲罰セットを受けるハメになるだろう。

少女が目指すは厨房、そしてその奥にある隠し階段である。

『知識こそが境界の切れ目を明確化する』とは彼女自身の言。

魔法に触れ、概念を理解したメリーは、魔法的手段によって秘匿さ
れている空間を感知し、その境界を異能の力で通り超えられるようにな
っていた。果たしてそれを「異能の進化」と呼ぶべきなのか、それ
とも元の力の応用の一つに過ぎないのかはわからないが、少女はこの
能力でホグワーツ城に無数に隠される秘密通路を幾つも確認してい
た。

今回使用する隠し階段は、厨房にお邪魔したときに空間系呪文の痕
跡が異能の感知に引っかかったことで偶然発見したものである。未
だ確認出来てはいないものの、メリーはこの螺旋階段が図書室に繋
がっていると密かに目星をつけていた。その理由はホグワーツ城の
構造とその歴史にある。

まず、辛うじて調べられた結果、階段は地下2階の地下牢から上層
の大講堂を経て天文塔の最上部まで続いていた。ここで注目すべき

は目当ての5階図書室が大講堂と天文台に挟まれていることで、つまり、構造上図書室の壁の中を上る隠し階段だからこそ、図書室そのものに入出入りする秘密の扉がある可能性が高いのだ。

また、建物とは人の動線に配慮して建てられるものである。この視点で「地下牢、厨房、天文台を垂直に繋ぎ、図書室の壁内を通る階段」の用途を考察すると、厨房への秘密通路に加え、「地下牢に寮があるスリザリン生が図書館へ忍び込むためのもの」という仮説を立てることが出来る。事実その仮説通りのことをやろうとしているメリーはそう推理し、そして期待していた。

だがハツフルパフ生が例の隠し階段を誰にも悟られずに利用することは難しい。階段が始まるのは真下の地下牢だが、厨房から進入する出入口はホールの右手前の角。そこには四六時中料理を準備し、目を光らせている勤勉な者たちがいる。

奉仕種族と呼ばれる小人たち、“屋敷しもべ妖精”だ。

この魔法生物たちとメリーの付き合いは深い。少女は彼らの存在を知った直後に厨房を訪れ、出会った妖精たちに特別に追加で一日三食の料理や甘味を用意してもらっていた。理由はもちろん、ダブリンの拠点である隠し屋根裏部屋に引き籠る相棒、宇佐見蓮子へ「転送呪文」で届けるため。

ああ、お嬢様！ そのような雑事は我々にお任せくださいませ！

一日三食、アフターヌーンティー付き。こちらでをご用意しましたマエリベリー・ハーン様の「呼び寄せ呪文」専用の一角に必ず、揃えて参ります！

我々ホグワーツの“屋敷しもべ妖精”は、お嬢様方の御為に！

当初、厨房の端でも借りて自分で作らせてもらえないかと訊いたメリーに対し、返って来た反応はどれもこのような忠実な従僕らしいもの。驚きつつ幾度か会話し理解した彼らは、従順で、友好的で、忍耐強い根っからの奉仕種族であった。蓮子のこともあり土下座したいほど感謝しているが、頭を下げると慌てられるので自重している。

(いつもは蓮子の食事でお世話になってるけど、こういうときは失礼

ながらお邪魔虫ね…)

そんな不思議な“屋敷しもべ妖精”たちは、意外にも主である人間より遥かに優れた魔力を持つ。有名な独自の空間転移魔法を筆頭に、魔女や魔法使いと、杖も呪文も必要としない彼らの魔法はまさに種族の壁と言うべき大きな差があった。

彼らを欺くことが最初の鬼門である。

異能で廊下の魔法の扉を透過し、メリーは厨房入り口の壁の陰からホールの“屋敷しもべ妖精”たちを確認する。深夜も近いと言うのに休むことなく働く彼らが今回はかりは疎ましい。

小さな溜息を残し、少女は自身にもう一つの魔法をかける。「目くらまし術」との併用は高い集中力を要するため、事前に【閉心術】で余計な感情を封印し、準備が整ったメリーは小声で呪文を唱えた。

「…Dimin^{ディ}uend^ミo^ヌ (縮め)」

呪文の効果は対象の縮小。ネズミ程度の大きさまで小人化したメリーは集中力が切れる前に急いで厨房ホールの壁に沿って走り、間近の物陰へ飛び込んだ。

(ハウスエルフたちは…よかった、気付いてなさそうね)

少女は目の前で自身の仕事に没頭する“屋敷しもべ妖精”たちの姿に胸を撫でおろす。卓越した魔力を持つ彼らも、別に魔力探知に秀でている訳ではない。事前に蓮子の手紙で彼らの生態は学んでいたが、どうやら想定外の危険はなさそうだ。

少しずつ、メリーは周囲の死角を縫うように目的の隠し階段を目指す。歩いて30歩前後の距離が、まるで大都市の屋外を進んでいるかのように長い。ようやく階段へ辿り着いたとき、少女はジョギング後より酷い疲労感に見舞われ思わず尻もちを突いた。

(っ、疲れた…って、あら？ 視界が狭まつ しまった…！)

時間切れだ。メリーの身を隠す【目くらまし術】と【縮小呪文】が解除され、元の11歳のメリーの姿が露呈する。

「おや、どなたですか？」

「…ッ！」

運悪く見られてしまったのか、少女の耳に擦れ声が届く。慌てて異

能で魔法の扉をすり抜けたメリーは、再度同じ呪文を重ね掛けし壁の隙間に隠れた。

リズムカルな足音の後、勢いよく秘密階段の扉が開かれたのは寸後のところであった。

「どうかしましたか？」

「ううむ…？ 金髪の小柄なお嬢様らしきお姿を見た気がしたのですが」

「隠し扉は例のリズムの暗号を解かなければ開きませんよ。それにこの先は寮監のスネイプ先生もご存知ない大昔の隠し階段です。見間違えでは？」

「…そうですね。最近は厨房によくマエリベリー・ハーン様がいらっしやるので、ふと幻覚を見てしまったのかもしれない」

「あの方は夜に校則を破って外出なさるようなお転婆ではないですよ。それより明日の仕込みの続きを終わらせなくては」

「おお、そうでした」

誰何した“屋敷しもべ妖精”が同僚の言葉を受け警戒を解く。丁寧に扉を閉じ離れて行く足音を聞きながら、メリーは大きく息を吐いた。どうやら日頃の行いのお陰で何とかやり過ごせたようだ。

(…こんなだから蓮子に「外見詐欺」だなんてからかわれるのね、私) どこかケチが付いた気分になった少女は頭を振り、「静穏呪文」を足にかけ、静かに隠し階段を上って行った。先にあるのは、果たして目当ての図書室へ入る隠し扉か、それとも期待外れなただの石壁か。

瞳に浮かぶ鮮やかな紫光が、期待と不安が渦巻く少女の心の内を表していた。

西暦1991年10月31日 深夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』5階図書室

大講堂のスリザリン寮テーブル付近の壁内を上ると、目的の5階図書室の壁と思しき箇所から境界の気配が漂ってきた。その意味を知るメリーの顔が安堵と歓喜に綻ぶ。

(よかった、やっぱりあったのね…)

辿り着いた気配の壁面には、魔法で空間が分かれた隠し扉があった。湧き上がる感情を抑え、少女は慎重に空間の境界をくぐる。非常に強固な隠蔽および防衛効果を発揮する空間分断魔法の扉だが、メリーにとっては普遍的な実物の扉のほうが異能で透過出来ない分、むしろ助かったと安堵するべきであろう。もっとも、そんな彼女だからこそ発見出来た隠し通路とも言えるが。

出た場所は5階図書室第6区画、通称『防衛術と初等呪術の棚』の一角であった。一年生はあまり縁のない書架で、それは同時に、図書室にある2つの『閲覧禁止の棚』の内の一つ、少女が焦がれる『上級防衛術の棚』の真横でもあった。

(…どうしよう、予想以上の幸運で逆に怖いくらい。というかここまで都合が良過ぎると、やっぱりあの階段は過去のスリザリン生が私みたいに密かに禁術を漁るために使ってたんじゃないかって疑いたくなるわね…)

仮説の説得力が増したことに内心胸を張った少女は、魔法で音を消し『上級防衛術の棚』を遮る扉を開け中へ滑り込んだ。

メリーの猫目の暗視に飛び込んできたのは、様々な異形の気配漂う不気味なチェインライブラリー。分厚い皮紙の書物、悪霊の邪気が漏れる巻物、中には有名な人皮の魔導書らしきものまである。これら危険物を Nastily Exhausting Wizarding Test " を受験する17歳前後の高校生に触れさせるホグワーツの狂気を改めて実感しつつも、既

に拠点の隠し屋根裏部屋で見慣れているメリーはその狂気に感謝しながら喜々として書架を漁り出した。

「ふーっ…」

どれほどの間没頭し続けていたのだろう。凝り固まった体が小気味良く解れる音を鳴らし、ふと顔を上げたメリーは窓から差し込む月光が随分と傾いていることに気が付いた。適した異能を持つ蓮子ほどではないが、相棒から多少の天文学を教わっている彼女は経過した時間に瞠目し、慌てて散らばった書籍を片付ける。

しばらくし、無音の中で自身の痕跡を消し終えた少女は、看護師ポンフリーとの会話以来の満面の笑みで『上級防衛術の棚』を後にした。（まだ四半分も目を通してないけど、とつても素敵よココ…！ 絶対またお邪魔しましよ）

悩みの種であったクイレルとポッターに憑く悪霊の魔術的除霊の手段から、結界と関わりがあると推測される「盾の呪文」の禁術指定された応用術など、ホグワーツ入学以来の素晴らしい成果にホクホク顔なメリー。

だが、些か緊張感に欠ける彼女が唱える隠密用の呪文は、その内心を暗示するかのようには制御が甘く、不完全であった。

故にか。

「そこで何をしておられる…！」

スキップでもしそうな足運びで秘密階段の隠し扉まで向うメリーを射抜いた男の怒声は、心臓を破裂させんばかりの驚愕となって彼女の幸福感を吹き飛ばした。

図書室の回廊の奥、月明りの影に溶け込むように一人の黒ずくめの男が立っている。べた付く長い黒髪に闇色のローブを着たその人物は、ホグワーツ生に「育ち過ぎた蝙蝠」と忌み嫌われる、“魔法薬学の教授であった。”

「セブルス・スネイプ…!？」

そして思わず男の名を叫ぼうと唇を開きかけた瞬間、寸前で少女の後ろから高い男声で同じ言葉が聞こえてきた。慌てて振り返り、発見したその人物の姿にメリーは瞠目する。

「校長は『地下室へ向かえ』と仰せのはずだ。違いますかな　クイリナス」

「…ッ！」

顔面蒼白でスネイプを凝視していたのは、あのクイリナス・クイレルであった。目を疑わんばかりの現実にはメリーは酷く混乱する。教師は全員トロール退治に地下牢へ向かったはず。しかし今、忍び込んだ深夜の図書館では、少女の最も縁のある教授二人が自分を挟むように対面しているのだ。この両者の不穏な関係を身を以て知っている彼女は、危うい【目くらまし】の制御を何とか取り戻し、抜き足差し足で物陰へ滑り込む。

（危なかった…！　どうしてあの二人がここにいるのよ、ホント私って間が悪いことばかり…っ）

逃げようにもスネイプが隠し階段への入り口近くに陣取っているため迂闊に近付けない。動くのが難しいメリーは仕方なく、慎重に私たちの言い争いを盗み見ることにした。

「ひっ…わ、私はただ図書室に忘れてしまった杖を取りに　」

「ほう、なるほど？　確かに杖が無ければトロールには勝てませんな。あんな豚畜生に怖気付いて逃げ帰るなどホグワーツ教師の恥と思っていたが、杞憂で何より」

「そ、そうですね。だからセブルス、そっその杖を仕舞ってください。君の闇の魔法は恐ろしくて敵わん…」

ヘドロのように絡みつくスネイプの声にクイレルだけでなく第三者のメリーまでも背筋を震わせる。

一月弱のホグワーツ生活において、メリーが関心を寄せていた教師は二人。それが目の前のクイレルと、スリザリン寮監セブルス・スネイプである。組み分け帽子から自身の悪巧みが漏れる心配はないと悟った少女は自重していた探索活動を再開させ、書物やゴーストたち

から幾つか目ぼしい情報を得ていたが、その一つがスネイプの興味深い経歴であった。

(相変わらずクイレル先生に攻撃的ね、あの人。私もクイレル先生に近しい人間ってことでたまに睨まれるのだけど、正直勘弁してほしいわ…)

彼はかつてあの闇の魔術師集団“DEATH EATER”の一人だと疑われており、ダンブルドア校長の証言で無罪を勝ち取った過去がある。また“闇の魔術に対する防衛術”の教授職に執着しているようで、事実クイレルに対する嫉妬からかよく彼に嫌がらせをしていた。

メリーにとってはクイレルに次いで利用価値の高いスネイプだが、不本意ながら少女は最近、この二人の仲の悪さに巻き込まれつつあった。

「これは失敬。……しかし訝しい、訝しいとは思わんかね。手薄になった禁じられた廊下付近を貴様がウロウロしている理由がただ『杖を忘れた』だけ、などと」

「ッ、きよ、教師として恥ずかしい限りです。は、はは…」

「そういえば先々月に校長から重要任務を受けていた我が校の森番が賊に襲われたが、あれと最後に言葉を交わした人物は校長とポッターを除けば、貴様と　貴様のお気に入りのハーンの二人だったそうだな。益々訝しいですなあ、クイレル教授」

「…」

両者の言い争いが終わるまで大人しく隠れているつもりであったが、唐突にスネイプの口から出てきた自身の名にメリーは思わずひゅつ、と息を吞んでしまった。

だが静まり返った図書室回廊では、些細な物音すら木霊する。

「ッ、誰だ！」

突然、少女の鼓膜をスネイプの大声が抉った。メリーは全身が飛び上がるほどの驚愕に襲われ咄嗟に唇を抑える。悲鳴を零さなかった

のは奇跡に近い。

だが状況は変わらず最悪のままだ。

「な、何です…?」

「…人の気配がした。そこを動くなクイリナス、すぐ戻る!」

「ひいつ…!」

何と言う地獄耳。揺らいだ【目くらし術】を必死に制御し、メリーは辺りを鋭い目で見渡す教師から距離を取り物陰へ更に潜る。少女の怯える瞳に映るのは、頭部に杖を押し当て頻りに辺りを探るような仕草をするスネイプの姿。そして男は何かを感知したのか、続けて杖を鼻に当て鼻孔を鳴らし始めた。

「…香りの新鮮な女物の洗髪剤。魔法の賊か　いや、就寝前の女子生徒か…!」

はっと気付いたときには後の祭り。おそらくは五感を強化する呪文の類か。犬並の嗅覚を得たスネイプがメリーの柔らかいシャンプーの匂いを辿り、少しずつ少女の隠れる本棚まで近付いてくる。

不味い、不味い不味い。こんなことなら自分の【目くらし術】を信頼しきつさと隠し扉まで忍び足で向かえばよかった。メリーは後悔と焦燥に臍を噛む。

(ああもうっ、こうなったら度胸で正面突破…!)

絶たれつつある退路。その僅かな道筋に少女は懸ける。狙うは男の杖腕の逆、左側を透明のまま駆け抜け背後の隠し扉まで走ることに届きさえすればあの秘密の螺旋階段との空間の境界を異能ですり抜けられる。起死回生の一手で逃げられるチャンスはこれっきりだ。

震える太ももを振り、無理やり覚悟を決めたメリーは転がるように物陰から飛び出した。

「チツ、そこか鼠め!」

威嚇ではない、正確な位置を把握した上での【失神呪文】が拳銃の弾丸のように容赦なくメリーへ殺到する。【目くらし術】に【静穏呪文】を重ね掛けして尚スネイプの強化された五感は騙せない。恐怖に叫びたくなる衝動を必死に抑え、少女は歯を食い縛りながら本棚の間を疾走する。

だが、呪文の衝撃で落下する数キロもの羊皮紙の書物に11歳の少女が耐えられるはずもない。巨大な本が頭上に現れたことを視界の端で捕らえたメリーは、咄嗟の反応で身を守ろうとしてしまった。

「あつー！」

そしてその意思是　異能の適正故か　一つの魔法としていとも容易く具現化する。

無言呪文を無数に繰り出すスナイプの視線の先。そこに突如として波打つ光の膜が現れ、落ちる魔導書を弾き飛ばしたのである。

「なっ!?」 複数呪文、しかも無詠唱の【盾の呪文】だと?」

学生の力量を遥かに超えた、高度な無言呪文を幾つも同時に維持する姿なき賊にスナイプの警戒心が跳ね上がる。迂闊に攻撃を放ち跳ね返される愚を避けたのか、それまでの連射爆音が嘘のように図書室は静まり返った。

「…ふん、生徒ではなく賊とはホグワーツも見くびられたものだ。だがそんな甘い【目くらまし術】で吾輩を欺けると思うな!」

短い空白。その緊迫した空気を切り裂くように呪文弾幕が再開され、一部が少女の頭上、本棚へ向かい飛んでいく。炸裂する魔力に無数の書物がなだれ落ち、堪らずメリーは真上に【盾の呪文】を展開した。

だが直後、少女は場慣れした魔法使いの恐ろしさを知ることになる。

「こゝも容易く隙を晒すとはな。さあ、その薄汚い姿を見せろ

【Homenum Revelio (人現れよ)!」

「…ッ!」

その声を聴いた瞬間、本の落盤で体勢を大きく崩したメリーの全身を途轍もない悪寒が走り抜けた。

(隠蔽解除の呪文!?!　しまっ　)

この系統の呪文は得意の【盾の呪文】では防げない。咄嗟に書架の後ろに隠れ込もうと立ち上がるが、襲い掛かる攻撃呪文や書物、砕け散る本棚の木片が邪魔をする。直面する袋小路に心臓が狂ったように早鐘を鳴らし、極限の緊張に引き伸ばされた時間の中、メリーの体

中を得体の知れないモノがゆつくりと侵していく。

そして視界の端に見えた対面の窓には、少しずつ露呈する絶体絶命な自分の姿が

そこから少女の意識は途切れている。

気付いたらメリーは女子寮の自室のベッドの横で、荒い息のまま茫然自失と立ち尽くしていた。

自分が何をしたのか、あの場はどうなったのか。無我夢中のことで何も覚えていない。

ただ、遠のく意識が最後に捉えた、無数の不気味な赤色だけが、何故か少女の脳裏に巣食い続けていた。

FILE・08・魔女見習いのクリスマス（挿絵注意）

西暦1991年11月1日 深夜

???

「…随分久しぶりね、ここも」

ぼんやりとした目を擦り、お気に入りの深紫のドレスの裾を正し立ち上がる。

眼前に広がる底なしの深淵。幼い女の子は今、どこか既視感を覚える漆黒の暗闇の中にいた。目覚める前の最後の記憶は、図書室で黒づくめの教師から逃げ帰り【催眠呪文】で就寝した瞬間だったはず。

つまり現在の自分がいる場所は、いつもの「夢の世界」だ。

そこで少女は頭を振る。

否、「いつもの」と形容するのは早計か。最近の彼女が日本で見ていた「夢」は、決まって複数の異界を同時に旅するものであった。幾つもの異なる場所、世界を一度に観測出来る理由は定かではない。だが、まるで分身や分霊のように多数の自分が存在し、多数の神秘を同じ夜に楽しめるこの新たな能力を、メリーは僅かに躊躇いつつも愛用していた。

しかし今回の「夢の世界」は一つ、この何も見えない奈落だけだ。それも、あの隠し屋根裏部屋の境界をくぐり、深緑のローブの老魔女と出会った日以来の、実に四カ月ぶりの異界の旅となる。魔法界での忙しい神秘との触れ合いのせいで今まで気にする余裕はなかったが、意識すれば珍しく長い「休息期間」であったことがわかる。かつては毎晩のように旅立っていたことを考えると、驚きを通り越し些か不安になるほどに。

「【Lumos（光よ）】……あら、ここでもちゃんと使えるのね」

視界を確保しようと唱えた杖無し呪文は、ホグワーツと寸分違わぬ効果で現れた。直前にあれほど激しい魔法戦に巻き込まれておきながら不可解なまでに落ち着いている今の自分に困惑しつつ、少女は灯

りを掲げ果てしない闇の中を彷徨い始める。

(変な世界。地面まで真っ暗だし、「光球呪文」も結局自分の姿を照らすだけみたい)

普通の童女なら震えて動けなくなるほど不気味な場所へ一人迷い込んでいる彼女の胸中に、恐怖という感情は欠片もない。あるのは久々に飛ばされた新たな「夢の世界」への好奇心と　あの絶体絶命の危機を逃れられた「奇跡」への純粋な疑問についてであった。

(それしても、あれは一体…)

少女の異能には本人さえもわからないことが山ほどある。むしろ理解し、活用出来ている力のほうが少ないと言えるだろう。だからこそ能力の特異性を客観的に見続けてきた親友が惧れ、多少の危険を承知で彼女に魔法を学びに行くよう説得したのだ。それが異能を制御する力になると信じて。

もし先ほどの「奇跡」が自身の新たに開花した異能の力であるならば、可能な限りその詳細を把握しなければならぬ。魔法を学び出す以前、少女は自身の能力を己の便利で奇妙なアイデンティティ程度にしか考えて来なかったが、あの海馬に焼き付いた光景に抱いたのは安堵でも興味でもない。

あれこそが蓮子に言われて初めて気付いた自分の力への疑問、不審、そして最後の一つ。

自分と言う存在が根底から変わってしまうかのような、根源的なきょうふ歓喜であったのだから。

「…ッ」

俯く幼い女の子は戸惑いながら自身の小さな両手を見つめる。とても人間のものとは思えない、不気味なまでに整った白磁の纖手だ。その美に言い知れぬ悪寒を感じ、少女は思わず目を閉じ自分の身体を意識内から排除してしまう。

するとぐらりと彼女の中で何か揺らいだ幻覚の後、希薄だった感情が乾いた心の奥底から泉の如く湧き始めた。それは先ほどの精神の平穏を大きく掻き混ぜる忌むべき氾濫であると同時に、何故か「決して失ってはならない」と固い強迫観念を覚える不快な湧水で

あつた。

だが満ち溢れた泉に心が浸った瞬間、少女は負の感情の濁流に翻弄されながらもどこか心地よい満足感を得る。まるでその乱れた様こそが、己の本来あるべき姿であることを、己自身が妄信しているかのように。

その正体は 人の心。

(どうして私はこんな大切なものを、さつきまで…)

全てはあの絶体絶命の状況が引き金となった、能力の異常が原因だ。押し潰されそうな不安に急かされ、戦く彼女は必死に脳裏の記憶を引き摺り出した。

思い返すだけでも恐ろしい。極度の緊張で視界が暗転する中、漆黒の深淵に浮かんだ蠢く無数の赤い珠と、その一つ一つから発せられた、背筋が凍るような「視線」。

あれは一体なんだったのか。

だが記憶の深層へ潜り込んでも、図書室で男の呪文から逃れた瞬間の感触が思い出せない。無我夢中な心理が引き起こした偶然故か、はたまた本能が二度と使わせまいと拒否しているからか。いずれにせよ、今の自分では触れることの叶わない超常のナニカであることだけが、少女に理解出来た全てであつた。

微かな、されど強烈な印象と、起きた結果のみが残った例の「奇跡」は結局何一つ判明することなく、少女は無意識にその小さな種子を自分の魂の奥底へと埋め込んだ。

「 芽吹かせるには、未だ邪魔が多すぎる」

「え？ どうしたの、マエリベ つえ、な、何かまた美人に磨きが…ってというか、雰囲気変わった？ 貴女お化粧なんかしてたっけ」

「…あえ？」

闇の中にぼんやりと佇む少女の耳に、誰かの声が届く。

はた我に返り、顔を上げた先にいたのは、制服に着替えたルームメ

イトのハンナ・アボットであった。そのままぼーっと周囲を見渡すと、黄色と黒のキルトカーテンが印象的な穴倉の寝室が目に入る。

「あ……」

見慣れたホグワーツ、ハッフルパフ女子寮第13号室。

どうやら此度の、マエリベリー・ハーンの『夢の世界』は短い旅で終わってしまったようだ。

西暦1991年11月1日 午前

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』南塔 『99教室』

「^{ノックス}それでは皆さん！ 杖の光を『反対呪文』で消しましょう

【Nox（闇よ）！】」

あの『閲覧禁止の棚』侵入作戦を何とか無事に成功させた翌朝。メリーはいつも通りの平静を装いながらルームメイトたちと朝食を食べ終え、毎度恒例のカルガモの母親気分と同級生たちを一限目の授業、『呪文学』の教室へと案内していた。

久々のグリフィンドールとの合同授業となった講義では、教師のフィリウス・フリットウィックが基本的な『発光呪文』を用い『反対呪文』について紹介している。

相変わらずグレンジャーは完璧に予習済み かと思いきや、どこか心ここにあらずと言った具合に呆けている。その隣を見ればポツ

ターとウィーズリーも同様。三人揃ってどうしたのかと気になるところではあるが、グレンジャーはともかく、あの赤点二人はこれ以上授業を聞き逃すと不味いではなからうか。メリーはそんな視線をグリフィンとドール三人組に送りつつ、「Lumos（光よ）」と呪文を唱え、「Nox（闇よ）」と続けて光球を消失させる。

「おおーっ、素晴らしい！ 皆さんごらんなさい、Miss ハーンの見事な『反対呪文』です！」

教師の賛辞を受けたメリーは、昨夜の校則違反の後ろめたさから優等生の演技に力を入れる。いつも合同授業ではグレンジャーに席を譲っているが、彼女が不調であればこちらが手を挙げて悪目立ちすることはないだろう。

そつと杖を教室の扉へ向け、二つの相反する呪文を唱える。一年生の『反対呪文』の授業であれば、いずれこちらも習うことになるのだから不自然な点はない。

「Allohomora（開け）……Colloportus（扉よくつつけ）」　こちらも『反対呪文』　同士だと教科書で学びましたわ、フリットウィック先生」

「こ、これはっ！　まさか後期の授業で習う呪文とその『反対呪文』まで完璧に覚えてらっしゃるとは」

知らない呪文の登場に教室が騒ぎ出し、特にハッフルパフ生たちの瞳が輝いている。彼らの期待を受けたのか、フリットウィックが満面の笑みで宣言した。

「完璧な予習と呪文。実に見事で、授業内容にも広がりを与えてくれる模範的な態度です！　ハッフルパフに5点！」

わあっ！と歓声が上がリ、同寮の生徒たちの好意的な視線が少女に集中する。

グレンジャーの活躍で隠れてしまっているが、メリーは時折このように優れた魔力や知識を授業中に披露し、数多くの寮杯点を稼いでいた。また一年生の大半が「道に迷い授業に遅刻する」と馬鹿にされるハッフルパフ生たちの道案内を行い、減点を回避させるなど、彼女の寮への貢献は実点以上に大きいものである。

少女は周囲の確固たる信頼を再確認し、小さく胸を撫で下ろす。このように年相応の優等生を演じ続ければ教師陣に疑われる心配はないだろう。新しくしたシャンプーのユーカリの香りを纏いながら、メリーは先ほどの大講堂での一幕に思いを馳せた。

『昨夜、トロール事件の背後で何者かが我が校の図書室へ忍び込んだ』

朝食時。

【閉心術】で感情を制御し、平時と変わらない時間に大講堂へ入ったメリーを迎えたのは、そんなスネイプの苛立たしげな言葉であった。『怖いわね、トロールに続いて侵入者だなんて。図書館の闇の魔導書が欲しかったのかしら』

『【姿くらし術】が封じられてるホグワーツから突然いなくなったのはハウスエルフの仕業じゃないの？ “デスイーター”の残党に仕えてるものも多いでしょうし』

『トロール事件も同じ犯人の仕業かもしれないな。絶対安全なホグワーツの防衛はハリポテだったのか…？』

名門ホグワーツに侵入し、しかも教師の追手を出し抜き忽然と姿を消した使い手。その正体を巡って噂好きの英国子女たちが思い思いに己の推理を語り出す。芳しい発酵バターの香りに包まれながら、メリーは何も知らない怯える無垢な女の子を淡々と演じていた。

無論、誰もが意気揚々と探偵ごっこに精を出せるほど恐れ知らずではない。恐怖に震えるルームメイトたちに配慮してか、メーガン・ジョーンズがさりげなく別の話題を引き出した。

『それよりマエリベリー！ 昨日のあれ、いきなりなんて酷いわよ！』
『あ……ごめんさい。監督生の足音が聞こえた気がしたから実力行使で眠らせたの』

一足早く席に着いた同室の彼女が責めているのは、やはり昨夜メリーが仕掛けた【催眠の呪文】のこと。既に想定済みの少女は冷静に、準備しておいた言い訳で謝罪する。ジョーンズも頬を膨らませては

いるが呪文による寝付きはそれなりに良かったらしく、残る不満も些細なものであった。

『ならついでに朝も起こしてくれればいいのに。寝心地が良くてつい寝坊しちゃったわ』

『メーガンのお寝坊さんはいつものことですよ。私はちゃんと起きれたわよ』

『これから眠れないときはマエリベリーに魔法をかけて貰おうかしら。最近物騒だし』

近くに座るルームメイトたちも次々と会話に参加する。この反応を見る限り、昨夜の外出は気付かれていないようだ。メリーは懸念事項の一つが減ったことにひとまず安堵した。

その後、しばらく横目で壇上の教師陣を窺ってみたが、こちらへ向けられる意味深な視線は一切なかった。恐れていた校長の様子も、食事を楽しみつつ時折何かを考え込むような素振りをする以外、特に不自然なものは見られない。

ただ昨夜図書室で争ったスネイプが隣のクイレルを睨み付けているのは、彼が賊の関係者だと状況証拠的に勘違いしているからだろうか。凶らずも校則違反の責任の一端を彼に押し付けてしまったメリーは、己の悪事のスケープゴートと化したクイレルへの申し訳なさで胸が痛かった。

とは言え、夜間外出が悟られる寸前であったメリーにとってはこれ以上ない幸運である。少女は己の無事を確信し、表向きは何も変わらないいつもの日常に溶け込んでいった。

「 それにしてもホグワーツの防衛って意外と隙だらけなんだな。ハウスエルフの【姿現し】を封じられないなら、今回みたいに悪い主人に仕えるアイツらに好き勝手されちゃうじゃないか」

朝食の舌が蕩けるクロワッサンの味まで回想しつつあったメリーは、ふと隣のウィーズリーの親しげな声に「呪文学」の講義室へと意識を引き戻される。彼の話し相手は親友のポッターに加え、何かとい

がみ合うことの多かったグレンジャー。何か三人の関係に進歩があったのだろうか、と少女は少しだけ気になった。

「魔法の賊だつてスネイプは考えてるみたいだけど、アイツの言うことが正しいなんてありえないよ。僕は信じないね」

「本で読んだわ。ハウスエルフは優れた魔力を持つてて、だからトロールを地下牢へ呼び込めたのかも。でもあれが全部図書室の監視を減らす策略だったとしたら、正直狡猾過ぎて怖いわ……」

「なあに、トロールなんてまた僕たちでやっつけなければいいのさ！ だからハウスエルフはハーマイオニーに任せるよ」

「…大きさと筋力以外全部格上じゃない！」
なるほど、とメリーは得心する。

大講堂に流れていた幾つかの噂の一つにグリフィンホール寮の寮杯点が大きく加算されていた理由に関するものがあつたが、おそらくそれはこの三人が巻き込まれ、その健闘を称えたものだったのだろう。スネイプとクイレルが人目を避け図書室へ行く余裕があつたのも、足手まといの子供たちが場を引つ掻き回し、二人への他の教師陣の関心が薄れたからかもしれない。

「そつ、そうだ、聞いてよMiss ハーン！ 僕たち三人で昨日のトロールを倒したんだ！」
「…え？」

勝手に立てた憶測に沿い密かに彼らへ理不尽な怒りを向けていると、張本人のポッターが赤い顔で例の一件を自慢してきた。内心をおくびにも出さず、メリーは上品に手を口に当て驚きの表情を張り付けた。

「まあ、そんなことが。ホグワーツ教師のクイレル先生も苦戦するほどの強敵なのに、三人とも勇敢なのね」

「僕が一番凄かったぜ！ 『Wingardium Leviosa（浮遊せよ）！』ってトロールの棍棒を奪って、思いつきり頭にぶつけて気絶させたんだ！』」

「な！ ぼ、僕だつてアイツの頭に乗って強烈な一撃を噛ましてやったんだ！ あの暴れよう、まるでドラゴンを宥めてる気分だったよ

！」

「はあ……貴方たち、美人の前だからって大げさに話し過ぎよ。マエリベリーが呆れてるわ」

気になる異性にいいところを見せたい心理は老若男女に差は在らず。身振り手振りで自身の英雄譚を披露する少年たちに彼らの望む感嘆の表情を見せると、多数の誇張に紛れ事の顛末の全てを教えるれた。

「Mr. ウィーズリーは代々グリフィンボールに選ばれる勇敢な一族とお聞きしてますし、Mr. ポッターもお噂はかねがね。お二人とも素晴らしい英雄精神ね。頼もしい騎士たちに守られるMiss グレンジャーも、同じ女として少し嫉妬してしまいますわ」

情報提供に感謝と皮肉を込めメリーが齒が浮くような称賛の言葉を口にする、驚くほど簡単に三人の心は一つになった。

「……ッ！ じゃ、じゃあもしMiss ハーンが危険な目にあつたら絶対駆けつけて見せるよ！ だ、だからその、期待してて！」

「まつ、まあグリフィンボール生としてはこれくらい出来ないかね！ でもマクゴナガルたちが来る前に倒せたのは、ちよつと嬉しかった

……かな？ あはは」

「ちよつと、私だって守られるだけじゃないわ！ 今度は私が二人もマエリベリーも守ってあげるんだから！」

あまりの効きの良さに内心驚きつつ、これではまるで人を誑かす悪女だとメリーは己を恥じた。精神年齢以上に心が純粹なポッターたちの好意は、いつも少女の罪悪感を膨れ上がらせる。他人のことを考える余裕などないと言うのに、メリーはもう少しだけ、なれることならこの子たちに素直になりたいと思ってしまう。

残念ながら、魔法や魔法界の情報を現世へ盗み出している時点で悪であることに変わりはないが。

「ねえ、マエリベリーは昨日の事件の犯人は誰だと思う？ 私はハウスエルフの仕業だと確信してるわ。だって彼らの魔法でしかホグワーツで【姿くらまし術】は使えないもの！」

「…そうかもしれないわね、人間の魔法使いで校内の転移移動が出来るのは校長先生くらいの術師でないといけませんし。…何事にも例外はあるけれど、ね」

「マエリベリーも僕やハーマイオニーみたいのスネイプに嫌がらせされてるんでしょ？ そうだ、もしかしたらアイツが自分で闇の魔法書を欲しがって、自分の悪事を誤魔化そうと『賊が出た！』なんて嘘をついてるかもしれない！」

「バカね、ハリー。教師なんだから私たちと違って闇の魔法書なんていつでも読めるに決まってるじゃない」

「…でもMr. ポッターのおっしゃることも一理あるわ。それにたとえ嘘ではなくても、見間違いや勘違いだってありうるし、物事は一人の主張ではなく多角的に見つめないと真実には近付けないものよ。あまり真つ向から人の意見を否定するのは良くありませんわ」

「あ…ありがとう、Miss ハーン…っ！」

「…マエリベリー、なんか貴女今日いつもと雰囲気違わない…？」

「そうかしら…：…気のせいではなくて？ Miss グレンジャー」

「そ、そう？」

奇しくも同じ夜に別の事件の当事者となっていた四人は、張り詰めた緊張を解すように他愛もない会話に花を咲かす。共に強敵との戦いを乗り越え新たな関係へと至ったグリフィンドール三人組。そんな彼らの一歩外に控えるメリーは自身に取って十分な友情を甘受しつつ、付かず離れずの丁度良い距離感を維持し続ける。

英雄少年は一年生にしてクイディッチ寮代表選手に選ばれ、寮監に新型箒を贈与されるなど学校から依怙贖いされてはいたが、その人間関係にまで目を光らせる教師は見当たらず、メリーもポッターら三人組と触れ合うことに少しずつ抵抗を捨てていった。

進展は実家の闇の魔法書の解読課題にもあった。ハロウィーン以後も何度か『閲覧禁止の棚』へ忍び込むことに成功したメリーは目ぼしい闇の魔法書を手当たり次第に読み漁り、逐一ダブリンの相棒へ得た情報を転送。着々と己の知識と魔力を高めていった。

亀の歩みながら、メリーの異能制御魔法開発計画はホグワーツ入学以後、確実に前進していた。

そして月日は流れ、待ちに待った二週間の大型休暇の初日 12月24日がやって来る。

西暦1991年12月24日 深夜

アイランド愛蘭土・都柏林某所 『旧ハーン診療所』

凍える雨が街頭の灯りに煌めくクリスマススイブのダブリン。散歩する恋人たちの姿も疎らなりフィ川の川岸を、濡れる鴉羽色のローブを翻し走る一人の小柄な姿があった。美しいイルミネーションに見向きもせず、ただひたすら目的地を指すその可憐な少女の頬には、真冬の外気でも奪えない高揚熱の朱が差している。

神秘の学び舎より故郷へと戻った魔女見習い、マエリベリー・ハーシだ。

彼女が通うホグワーツ魔法魔術学校はイギリスのパブリックスクールと同じ休暇制度を設けている。その三つの長期休暇の内の一つ、クリスマス休暇を利用し実家のダブリンへ飛行機で舞い戻ったメリーは、転びそうなほどの早足で拠点の『旧ハーン診療所』へ向かっていた。

理由は言わずもがな。ようやく辿り着いたあの先祖の隠し屋根裏部屋の階段上で、変わらぬ笑顔を浮かべこちらを歓迎している、モントーンスタイルの幼い日本人女性の存在だ。

「どーもー、お疲れさん。筆の遅いメリーが毎日のように手紙を寄越すなんて、そんなに私と離ればなれで寂しか　　ったあ!?!　殴った!

こいつ脚立登りながらグーパンしやがったわよ!」

「駅の9・／?番ホームとポッター君の件、忘れたとは言わせないわよ。あと私は蓮子が寄こした手紙を普通に返してやっただけですー。寂しがり屋はどっちよ、バーカ」

「うぐう……ってちよつと、前者はともかく後者のは身に覚えが無いんだけど」

「安心して、ただの逆恨みだから」

「なんて酷い!」

わざわざ地球を半周してまでメリーの計画に協力してくれているこの相棒の名は、宇佐見蓮子^{うさみれんこ}。以前は彼女と同じ大学で超統一物理学を専攻していた天才17歳児で、現在はここ『ハーン魔術工房』で闇の魔導書の解読を行っている魔法研究者である。最近になってようやく目ぼしい情報が手に入ったとの手紙を寄越しており、その成果はメリーも大いに期待するところ。

「いたた……にしてもメリー、しばらく見ないうちにまーた美人になったわね!　これはもう学年中の男子の性の目覚めに貢献してるんじゃないかしら、爛れてるう〜」

「爛れてないわよ、失礼ね。…でも私ってそんなに変わった?　ルームメイトの子たちやグレンジャーさんにも言われたけど全く自覚が無くて」

「そりやもう、いつものキラキラオーラが絶好調よ。……てかこうしてると人と話すことの重要性がよくわかるわ。二か月間一步も外出ずにまるで本物の魔女になった気分だったけど、ちゃんと口動かし慣れてないと顔の筋肉が攣って痛い……」

そう頬をムニムニ揉む蓮子の姿に、メリーははたと事情に気付き胸を痛める。

元々蓮子がこのような隠者の真似事をしている理由は、メリーが「組み分けの儀式」で脳内を覗かれたことが原因である。『考える帽子』の口から彼女たちの魔法界逃亡計画が露呈する危険を考慮し、ここダブリンの実家へ学校の監視が飛んだときに備えるべく、少女は協力者の蓮子に外出自粛を頼んでいた。

「……そうよね。ごめんなさい、無理させて。ずっと引きこもってて辛かったわよね……」

「……ん？ あつ、ええ、そうね。それはもう、とーっても苦痛だったわよ？ 主観的ブレーションを魔力の力で客観的ブレーションへ具現化するプロセスについての考察で発狂しかけたり、科学的に魔法を解明しようとして新しい新たな素粒子『魔素子』についての仮説を練ってたら物理学と神秘の巨大過ぎる隔たりに圧倒されたり、英国魔法界の治癒呪文を道教的視点で紐解いたアヤシイ研究書にメリーのご先祖様のズレっぷりを実感したり、魔法のトイレから侵入してくる深き子どもを撃退するハリウッド的な夢を見たり、ハウスエルフたちがくれる手が止まらない魔法のかかったケーキのせいで魔法工房の一角をヨガジムに改装しなきゃいけないかったり、もう苦痛過ぎて一日8時間しか寝れない大変な日々だったわ」

「なんで私このアホに謝ったのかしら」
しかしどうやら今の蓮子を見る限り心配は杞憂であったらしい。不自由な環境を全力で楽しんでいるたくましい相棒の様子に呆れるメリー。

実際、現在は組み分けの儀式での一件が杞憂で終わり外出を自粛する必要性が下がったため、好きに出歩いて貰っても構わないのだが。

「……んで、私はこの100坪の神秘の図書室生活を謳歌してたけど、メリーの進捗はいかが？」

しばらくぶりのじゃれ合いに満足したのか、一拍置いた蓮子が主題を持ち出した。切り替えの早さに少しだけ置いてけぼりにされた気分になりながらも、メリーは意識して気を引き締める。

「こっちは手紙に書いた以上のことはないけど、ホントに魔法界の魔

法は位相の異なる「あの世」でも通用する神秘だったわ。いつもは彷徨うことしか出来なかったのに、一番最近お邪魔したあそこでは習った魔法が使えたもの」

彼女がまず報告したのはハロウィーンの夜に訪れた、あの奈落の底のような「夢の世界」についてであった。

メリーは異能力者として、この世の真理について、ある自論を持っている。

簡潔に纏めると 人間は人それぞれが微妙に異なる世界に生きており、言語や物理法則などの共通する理を「橋」または「船」として介することで、自他が住むそれぞれの世界の境界を河のように越えて触れ合っている と言う大胆な発想だ。蓮子には「まるでウチのサークル顧問の物理学教授が語る薄膜世界メンブレーションワールドみたい」と感心されたが、メリーにとってはいつもの日常を己の常識で解釈しただけのことである。

そして自身の異能は、その「橋」を使わずに異界を渡り、「船」を使わずに向こう側の世界を見回る能力である、とメリーは考えていた。

あの「夢の世界」では魔法界と同様、魔法を使うことが出来た。少女はこの事実を踏まえ、「魔法界の魔法は神秘蔓延る異界へ繋がる」「橋」の一つである」という仮説を立てた。メリーの協力無しでは異界の観測が出来ない一般視点を持つ蓮子も「興味深い」と褒めてくれた自論である。

もつとも、蓮子の最大の関心は証明が困難なメリー説ではなく、メリーが魔法の存在を知覚してから「夢の世界」への強制転移現象が激減したことについてであったが。

「ふーん、じゃあホントにホグワーツでもほとんど「夢」を見なくなつたんだ。メリーの有り余る魔力に魔法っていう指向性が出来たからリソースがそちらに流れたのかしらね。：おおっ、一歩前進したんじゃない？ 『メリーの異能は魔力ベースである』って説は中々正鵠を射ってる気がするわ」

「…『異能は魔力を使う』ってのはちよつと早計じゃない？ 魔法と

違って、異能を使って疲れたことなんかないんだけど」

噛み合わない熱意の方向性に拗ねながら、メリーは仕方なく 最初に「絶対に異能の制御に役立つはずだから」と前置きし もう一つのほうの重要事項について蓮子に訊ねた。

精神とは物質世界を超越した形而上の自分。精神に作用し形而下の世界に影響を齎すその呪文は、まさしく異界の境界を超える力だと少女には思えたからである。

「そういえばあの【盾の呪文】の禁術指定応用についてここの魔法書から何かわかった？ 【悪魔の護り】ってやつ」

「確か『術者への忠誠の有無で相手を燃やし尽くす効果を発揮する攻勢防膜呪文』…だっけ？ それ今ここで使える？ 一度見ときたいわ」

あつげらかんと危険な呪文を使うように要請する蓮子にメリーは目を瞬かせる。

「え、別にいいけど…蓮子って私に忠誠誓ってるの？ まだ【清掃呪文】に自信ないから、もし貴女の質量全てが灰になっちゃったら掃除が大変なんだけど」

「部屋の掃除より私の命の心配して？ まあ忠誠かどうかは知らないけど協力ならちゃんと誓ってるし、それにメリーが私を害するワケないじゃん」

「…」親任頂き光栄ですわ。じゃあ、はい」

照れ隠し故か、少女はワザとらしく恐縮しつつ無造作に自分の周囲に件の魔法を展開した。杖も呪文も使わない、恐らく、この高度な闇の呪文が開発されて以来の快挙だが、リクエストした張本人は術者が起こした現象そのものに夢中であった。

何せこの呪文は普通の人間ならその平穏な生涯で決して見ることの無いであろう、黒い焰の円陣を生み出すのだから。

「うわ、何これこっわ！ ガッチガチの闇魔法じゃん！ ちよ、ちよつとメリーそれ使ったまま部屋の真ん中行って悪そうに笑ってみてよ！ もう完全に人間の美少女に化した凶悪な化物にしか見えな

って、熱っ?! 熱い！ なんか熱いわよ?! 私燃えてない?! ねえ

！」

「あら、発動後も術者の意思で威力の強弱を調整出来るのね。新発見への協力ありがとう、蓮子。はいお礼、【Vulnera Sanentur（傷よ、癒えよ）】」

極限まで弱めた威力をうっかり少しだけ引き上げてしまったメリーは、相棒の望み通りの悪そうな笑顔を浮かべ、端の焦げた蓮子の衣類と髪を直す高位の【治癒修復呪文】を唱えた。

「あちち……信頼を裏切られた気分だわ　って、ん？　お、無くなつてたブラウスの裾のボタンも直ってる。では働きに免じて先ほどの狼藉は不問といたしましょう」

「禁術書の書架にあった治癒呪文だから効果は抜群でしょ？　次回も安心して灰になっていいわよ」

「全く安心出来ないんだけど……」

親友との久々の再会で興奮しているのだろうか。どうも自重のタガが外れているように思えたメリーは、白い目を向けてくる蓮子へ謝罪し己を戒める。

幸い相棒は全く気にしていないらしく、平然と元の話題を会話に引き戻してくれた。

「で、残念だけどメリーが言ってたホグワーツの禁書『FOR THE GREATER GOOD』以外では、ここの魔導書にきつきの呪文は載ってなかったわ。そもそもこの本の筆者のイケオジ、第二次世界大戦の比較的最近の魔法使いじゃない。あの100歳越えのガンダルフ校長より四半世紀年上のメリーのご先祖様が知ってたら逆におかしいわよ。異能の力でタイムトラベル出来る私たちじゃあるまいし」

「それはそうだけど……でも基礎理論くらいはどっかにあるでしょ？　魔法使いたちが現世人の物理じゃなくて魔力の理に準じた技術を魔法として使ってるのは理解出来るけど、他人の特定の思考や感情に応じて効果を表すものまであるなんて、元精神学部生としては理屈が気になってしょうがなくて」

もつとも、こちらにも進展の無いハズレの課題であつたらしい。危険

を冒して手に入れた貴重な情報を活かせていない現状に、メリーは溜息を吐く。

だが続いて蓮子が何気なく口にした言葉は、少女の頭を一瞬で真っ白にするほどの衝撃であった。

「多分私たち、考え方が違うんじゃない？ 私は、魔法界の魔法は『主観的メンブレーションを触媒に、魔力を用いて客観的メンブレーションへ仮称『魔法メンブレーション』の現象を移送させる秘儀』だって考えてるわ」「…えっ？」

「だから喜怒哀楽みたいな感情の共通言語、つまり貴女の言う『自他の個人世界を繋げる『橋』』を持つ同じ人間や知的生命体相手なら、その『橋』を介して相手の精神にも他の魔法同様影響を与えることができるってこと。理屈さえわかかってしまえばメリーならさっきの【悪魔の護り】なんかより遥かにヤバイ結界呪文を作れ」

「えっ、ちよ、ちよつと待つて蓮子！」
「…って、何よいきなり。大声出しちゃって」

平然と流れた先ほどの聞き捨てならない発言を反芻し、ようやくその意味を理解したメリーは慌てて相棒の高説にストップをかけた。

「いや、今凄くさらつと言ったけど、それってつまり蓮子は魔法界の魔法が私の異能みたいに、特定の神秘の異界から物や現象を現世に持ち帰る力だって考えてるってこと…？」

「流石にメリーの規格外の力とは…：例えるなら化学の基礎になった錬金術と、現世では廃れた練丹術くらい発展性に差があるけど、確かに共通はしてるわね。まあ、すごく簡単に言うと、魔法界の魔法の本質はネットの Local Area Network L A N に似た原理を基にした神秘技術、ってことになるんじゃないかしら？ あと、その『特定の神秘の異界』も歴代の魔法使いたちの想像力、つまり主観的メンブレーションが合体した、マザーメンブレーションみたいなものだと思う。だから魔法使いたちは新しい呪文を開発出来るし、それを他人が習得することも出来る…って感じの持説です、はい」

まるで路上の石ころを拾うような気楽な声で、魔法の真理に深く切

り込んだ自論を語る相棒。そんな彼女にメリーはただ啞然と溜息を吐くことしか出来ない。

「……流石自称『プランク超えの天才』、頭のデカさのみなら学部随一だっただけのことはあるわね」

「え、やだ私ってそんなに顔大きい？」

「いや頭」

少女は異能の制御方法に大きく関わって来る魔法の基礎理論を組み立てた蓮子を称賛する。

もしこの理論が真実であれば、少女の異能制御の研究は大きく前進する。残る謎は異能そのものの原理の解明と、異能を制御する魔法の開発の二つ。後は後者さえ実現出来ればこのスパイ活動は終わりとなり、また蓮子と一緒に暮らせるようになるのだ。魔法界への情が少ない今なら心理的喪失は少なく済み、傷付く人間も最小限。最高の結末である。

だが、成した偉業に反し、意外にも当の提唱者は浮かれる魔女見習いほど楽観的ではなかった。

「別に少し考えれば誰だって思い付くことよ、魔法とメリーの異能に共通性があるのは貴女の空間転移系の呪文の才能で一目瞭然だったじゃない。まあ理論なんて立証出来なければただの落書きだから、それが出来る唯一の観測者の貴女がその目で例の仮称『魔法メンブレイン』の存在を確認してくれるまでこの説は妄想止まりだけど」

「…そう卑下することもないと思うけど」

「でも実際そうなのよ？ メリーには肝心の魔法の開発って言う最難関問題があるし、分身でもしてくれない限り理論立証なんて馬鹿みたい長時間拘束されるコトやってる暇はないでしょうね。設備『メリー』の使用許可が下りず延々と申請書を書き続ける日常の繰り返しでズルズル時間ばかりが過ぎ」

「誰が『設備メリー』よ、失礼ね。研究所の観測機器じゃないんだから」

「ごめんなさい、ちよっとトラウマ思い出しちゃって…」

どうやら蓮子は当時の心の傷が今の状況と被り、結果悲観的になっているらしい。メリー自身もゼミで似た経験があることに気付き、故

に現状が決して明るくはないことに合点が行った。

しばらく気まずい空気が流れ、先に調子を取り戻した蓮子が溜息と共に肩を竦めた。

「まあ私だって自分の人生があるんだから、目的の達成が期待出来ない神秘にここまで没頭したりしないわよ。時間は有限なもの、もし魔法界に可能性を感じられなければすぐに京都へ帰ってたわ。貴女は何も心配せずにホグワーツで子供たちと一緒に魔法を学びなさい」

「…私をおいて、先に帰ったりしないですよ？」

不穏なことを言う蓮子に、メリーは不安からつい縋るように尋ねてしまう。

そんな彼女のいじらしい発言にニヤリと目尻と口角をくっ付けた蓮子が、好機と言わんばかりに相棒をからかい始めた。

「当たり前じゃない。こんな面白いステキな異能持つてる子、おいで帰ったら人生9割くらい損しちゃうわ、もったいない」

「私は異能の付属物ですか。…ねえ、前々から気になってたんだけど、私たちホントに友達よね？ いつもいつも『メリー』ばかりで今まで一度もちゃんと名前と呼ばれたことないんだけど、私の本名覚えてくれてるわよね？」

「それこそ当り前よ。『パトリシア・メアリベル・ヘルン』でしょ、よろしくね」

『パトリシア』って誰よ!？」

憤慨するメリーに腹がよじれるほど大笑いし、気が済んだ蓮子は目の涙を拭きながら、言いそびれていたことを優しく口にした。

「ふふっ、冗談よ。……………お帰りなさい　マエリベリー」

「…ッ、バカっ！」

離ればなれとなり、早二月。

常に一緒であった『秘封？楽部』の二人の再会は、失った時間を取り戻すかのように騒がしく、そして温かいものであった。

「ただいま、蓮子」

FILE. 09：密会と困惑（挿絵注意）

西暦1992年1月8日 朝

英吉利・蘇格蘭某所『ホグワーツ魔法魔術学校』中庭

相棒との共同研究に没頭したクリスマスホリデーも終わり、魔法学校の新学期が始まる。飛行機と電車を乗り継ぎキングス・クロス駅のホグワーツ急行へ乗車したメリーは、徹夜明けで猛威を振るう睡眠欲に身を委ね、気付いたら隣にいたハーマイオニー・グレンジャーの目覚ましコールでホグズミード駅付近で起こされた。

「ハッピーニューイヤー、マエリベリー。…びっくりしたわ、貴女を探してたら窓際にシンデレラが眠ってたんだもの。お疲れなの？ あまり夜更かしは良くないわ。本で読んだんだけど、一日の睡眠時間が3時間を切ると大人になったときの脳の発達が」

「相変わらずねハーマイオニー、新年あけましておめでとう。贈り物の羽根ペン、ありがたく使わせて貰いますわ。あと起こしてくれたお礼も」

「いいのよ別に。それより私、あんなに沢山友達からプレゼント貰ったの初めてだったわ！ マエリベリーもステキなノートありがとう！」

イギリスの風習の一つにクリスマススのプレゼント交換がある。全く覚えの無かったメリーは軽い気持ちで目の前の少女含むグリフィンドール三人衆や寮のルームメイト、何かと心配してくれた寮監のスプラウト、そして打算込みでクイレルなど比較的親しい人物に贈っていたが、当日実家の診療所の閉じた暖炉に突然現れた百個近い包装箱の山に仰天し、慌てて蓮子と二人でお礼のカードを送り返すハメになった。その多くが男子生徒、一部が危険な香りのする女子生徒のギフトと知り相棒に大笑いされた記憶など、二度と思い出したくもないが。

下車ししばらく世間話を交わしたメリーは大講堂でグレンジャーと別れ、ルームメイトたちと久しぶりの再会を喜び合い、食後に流れ

るように就寝。その翌朝には早速授業が開始した。

「では皆さんの身体が忘れていないか、最初から確認しましょう。掛け声よおい」

UP！^上がれ

UP！^上がれ

午前最初の授業はスリザリンとの合同、教科は「飛行訓練」であった。以前医務室で一緒に入院したネビル・ロングボトムより聞いたこのレッスンの狂気に怯えていたのも今や昔。かつて「夢の世界」で見た妖怪たちのように空を自由に飛び回る箒飛行は中々に爽快で、普段は大人びているメリーも年相応にはしゃいでしまうほど。

難を挙げるなら、股に挟む箒と風に翻るスカートが気になることと、自身に箒飛行の才能が欠片も感じられないことくらいだろうか。「おい、見ろよあれ。二か月も授業受けててまだ城の中庭から出られないヤツがいるぞ」

「自慢のお姫さまは勉強ばかりで箒もご満足に扱えないみたいね。そのへっぴり腰はマグル独特の飛行方法かしら？　あまりに下品で見るに堪えないわ」

そんなメリーは類まれなる美貌と才能から穴熊寮の聖女として相応に注目されており、彼女の周囲には軽度の嫌がらせを仕掛けてくる他寮の生徒もいる。多くは気になる異性の関心を引こうとする初々しいリビドーに吞まれた少年たちであったが、特に才女の出自が気に食わないスリザリンとの合同授業では時折このように彼女を巡って双方の寮生同士が衝突することもあった。

「ふん！　血筋だけがご自慢のおたくらもようやくマエリベリーに敵うものが出来てよかったですねえ、思う存分自分たちのボロボロな自尊心を癒すといいわ」

「全くだよ。ちよつと嫌味を言われたくらいで感情的になるなんて、どうやらスリザリンのお貴族さま方は「Noble^{高貴}」の意味を別の言語のそれと勘違いしてるらしい」

「何ですって!?!」

「黙れアボット、スミス！　劣等生一族が何様の分際だ！」

言い争いながらも確と教師ロランダ・フーチの目を避ける工夫を怠らない彼らは正しくスリザリン。態度は大きいながらその実臆病な心を持つザカリアス・スミスは同様に老魔女の様子を横目で警戒しているが、根っからのハツフルパフ、ハンナ・アボットはそこまで気を回す余裕はない。

「喧しい！ 授業中に何を騒いでいるのです、Miss アボット！ 箒から降りて終鈴まで下で立ってなさい！」

「えっ、私だけえっ！」

案の定フーチの叱咤を受け、顔を怒りに赤らめながら箒を手放すアボット。友人を貶められ奮い立つ彼女は高潔だが、教師に叱られる姿以上に、周囲の喧噪に全く気付かず背後でフヨフヨと箒飛行にのめり込んでいる当の姫君との対比は何とも滑稽であった。

「ふう　　って、あら？ 皆さんどうなされたの？ スリザリンの生徒まで加えてお話なんて珍しいわね」

「…マエリベリーって噂じゃホントは別の寮に行くはずだったらしいけど、やっぱり噂は所詮噂だわ」

「完璧な人間なんていないさ、泳ぐ白鳥の例えみたいだね。フツ、まあウチの寮ではMiss　ハーンに例えたほうがわかりやすいかな？」

「…お二人とも何か私にご不満かしら？」

何やらバカにされた気分でもツとするメリー。この少女、前日まで実家で相棒の蓮子と共に魔法や異能の研究、検証など、【閉心術】による感情制御が無ければ発狂していたかもしれない多忙な日常を送っていたため、いつも以上に大胆に魔女の箒飛行でストレスを発散していた。当然張り合いの無い相手へ嫌味を言う者などおらず、スリザリン生たちも不満足そうな視線を送るがメリーはどこ吹く風。

新たな年が明けど変わらぬ、いつも通りのホグワーツの騒がしい日々が開始する。

だが、そんな「いつも通り」の日常に隠れた魔法界の闇は、確実にメリーら魔女魔法使い見習いたちの明るい未来に少しずつ、その巨大

な影を落としてつつあった。

西暦1992年3月初週末 日中

英吉利・蘇格蘭某所『ホグワーツ魔法魔術学校』クイディッチ場

魔法界が誇る伝統遊戯、〃クイディッチ〃。

西暦1050年の記録に残る最初の試合会場「クイールアディッチ湿地」の地名に由来し、おとぎ話の魔女や魔法使いたちのように自在に箒を操り空を駆け、数種の特種な球と得点輪を巡り競い合うチームスポーツである。非魔法族の現代社会におけるサッカーと同等の熱気があるこの競技は、各国の古代球技が時代と共に混ざり合い長い年月をかけ現在の形となった。例えばドラゴンが卵と巣を守る様子を真似たドイツの大昔の箒遊び〃Stichstock〃は現代クイディッチの選手ポジション〃Keeper〃の祖であるときれ、また今尚スポーツとして楽しめる箒テニス〃Swivenhoe〃や、幼児の箒鬼ごっこ〃Shuntbumps〃などのイギリスの伝統遊戯の影響も見て取れる。

その人気は絶大であり、世界的には西からアメリカ、東は日本まで実に45ヶ国もの国家代表チームが国際クイディッチ連盟に加盟している。毎年幾つもの国際大会が開催され、4年ごとに開かれる競技界最高の祭典「クイディッチワールドカップ」は毎度新聞の一面を独占する白熱っぷりで有名だ。

当然その人気は魔法界の最高学府を謳うホグワーツ魔法魔術学校においても例外ではない。寮同士の競い合いの集大成とも言えるべき年間合計18試合の「ホグワーツ寮別対抗戦」は毎回学校中を巻き込む大騒ぎとなり、ライバル寮の生徒同士の暴行非行はもちろん、寮監の教師たちの間にも険呑な空気が漂うほど。まさに寮の威信を挙げた総力戦である。

そして月日が流れた二学期の半ば頃、季節外れの冷たい雨が降り注ぐ3月初週の土曜日。週末のホグワーツクイディッチ場では今、史上初の一年生選手を迎えたグリフィン・ドール対ハッフルパフ寮代表チームの試合が行われようとしていた。

「あのムカつくスリザリンの七連覇を阻止出来る唯一のチームとの試合なんて悩ましいわね。ウチが負けて欲しくないけど、勝つて足を引く張るのもしたくないし…」

「二年生なのに頑張ってるハリーもいるから、少し彼を応援したい気持ちもあるかも」

「おまけに審判があのスネイクだからね。スリザリンとグリフィン・ドールの嫌い合いのおこぼれって言うか、望んでもない審判員で勝利しても全く嬉しくないよ」

試合当日、魔法の研究に一段落が付いたメリーは相棒の宇佐見蓮子へ送る土産話のネタを求め、同寮の生徒たちと共に試合会場まで足を運んでいた。黄色と黒の旗がたなびくハッフルパフ観客席で姦しくしているハンナ・アボットらに促され、少女はピッチの中央円へ向かう黒ずくめ男、“魔法薬学”教授セブルス・スネイクの姿を目に留める。

相変わらずの仏頂面の奥に見え隠れする暗い喜色は、これから行おうとしている不公平な試合審判の企みからだろうか。10月末のハロウィーン以後何かと男の動向が気になっていたメリーは、遠目からでもその顔色を読み取れるほどスネイク限定の観察眼を磨き上げていた。

「そういえばMiss Hahnはスネイク先生に虐められても平然としてますけど、あの人に対して何か思うところとかはないんですか

？」

「…えっ？ い、いいえMr. フレッチリー。どうして？」

「いえ、あんな目に遭ったのにまだクイレルと仲が良かったり、あの魔法史の授業を熱心に聞いていたり、貴女は好みの先生や授業が独特ですから正直色々心配で…」

「…そこは勉強熱心で忍耐強いとおっしゃってくださいる？」

興味深そうにスネイプの様子を見つめていたからだろうか。後ろの観客から急かされ偶然隣に座った少年ジャスティン・フィンチⅡフレッチリーが周囲を代表するように尋ねてきた。彼はイギリスの非魔法族の上流階級出身の、スリザリン生や同寮のアーニー・マクミランら純血魔法族とは別ベクトルのお坊ちゃまで、良くも悪くもハッフルパフ生らしい純粋な生徒だ。同じ現世の価値観を共有出来る相手でもあり、その礼儀正しく紳士的な態度が好ましい、メリーの数少ない親しい異性の一人である。

もつとも、そのせいで彼女にお熱なポッター以下全一年生男子から時々仇を見るような目で見られているのだが、人の敵意に鈍感な彼は学年の半ばになる今も未だ周囲の嫉妬に気付かない。

「ファンタジーな魔法生物や魔法のポジション、魔法使いたちの歴史が現世人としてはとても興味深い。神秘への好奇心の前には教師の人間性など些細な事ですわ」

「学内不人気教師ランキングトップ3ですよ…？ 同じマグル出身ですし気持ちはわかりますけど、薬で気絶させられた相手との付き合いを『些細な事』と言うのは限度があると思うんですが…」

「…何度も言うけれど、あれは私のためを思った結果起きた事故だったとクイレル先生も」

「ちよつと二人ともマフラー振って！ 始まるわよ！」

前席に座るアボットの声にハッと前へ向き直り、試合に集中する少年少女。

まるで鳥のように空中を縦横無尽に飛び回る選手たちは、箒飛行に憧れる老若男女全てを魅了する。側のマクミランやザカリアス・スミスと共に大はしやぎしているフレッチリーの横顔は育ちの良い彼ら

しからぬ、年相応なもの。滅多にない同年代の男の子と肩が触れ合うこの状況に内心密かに動揺していたメリーだが、こうして見れば相手は皆まだまだやんちゃな子供だ。元大学生という高い精神年齢を持ちながらこの手の事に一切の免疫が無い未熟な自分を恥じつつ、少女は隣の少年たちから意識を逸らし、貴重な魔法界のスポーツ観戦を楽しんだ。

だが勝負とは何が起きるかわからないもの。特にクイディッチのように特定の条件を果たせば試合が強制終了する類の競技では、今回のように試合開始直後に決着がつくこともある。

「はあ… 大活躍のハリーには悪いですが、僕は選手のワンプレーで試合が決まるこのルールはあまり好きになれませんよ」

「現世の球技と違って球場にボールが複数あるのも注意が散漫して、観客に不親切ね。立体的なダイナミックさが見ていて楽しい反面、肝心のルールが残念なのはスポーツとしてどうなのかしら…」

「…マグル出身の二人に気に入って貰えなくて残念だけど、確かに今日のゲームはクイディッチの悪いところが出た試合だったな。まあグリフィンドールの連中は真逆の意見みたいだけどね」

ホイッスルから僅か5分で試合終了の唯一条件である黄金の高速球、*Snitch* を相手選手のポッターが確保したことで試合はあつげなく終了。あまりに突然の展開からか冷めた意見を述べるメリーとフレッチリーに、純血魔法族にして大のクイディッチファンであるアーニー・マクミランが苦笑しながらも同意した。周囲の観客もどこか不完全燃焼な顔で会場を去っていく。喜んでいるのはライバル席と、グリフィンドール鼻負な教師陣だけだ。

メリーは今日の試合の感想を楽しみにしていた相棒の蓮子にどう報告したものかと苦い顔をしつつ、項垂れるハッフルパフ生たちの後に続き席を立った。

(…あら?)

退屈そうにしているフレッチリーと、彼にクイディッチの魅力を必死に布教しようとしているアボットとマクミラン、という愉快な一団から少し距離を置きながら寮へと戻るメリー。そんな彼女の視界の

端にふと、見慣れたターバン男の後ろ姿が映った。

足を止め男の行方を目で追っていると、続いて同じく見慣れた黒づくめ男が少女の前を横切った。セブルス・スネイプである。

因縁の二人の奇妙な行動。メリーの脳裏に、思い出したくもない去年のハロウィーンの記憶が蘇る。

トロール騒ぎを治めるべく出払ったはずのスネイプに遭遇した深夜の図書室での出来事。少女を賊と間違え怒涛の魔法戦を仕掛けてきた彼は、クイレルを追って4階までやって来たと言う。

では何故クイレルはあのととき一人で図書回廊に居たのだろう。意図的に無視し続けていた疑問が再度呼び起こされるも、メリーは繰り返される彼の不可解な行動の真意にかつてない胸騒ぎを覚え、今一度思考を放棄した。

(…見なかったことにしましょう)

触らぬ神に祟りなし、と少女は去り行く教師たちから目を逸らす。結界巡りで数々の危機を潜り抜けたメリーも、流石に前回の深夜の図書室での一件には肝を冷やしていた。彼女の野望は常に危険と隣り合わせだが、避けられる危険にまで首を突っ込むような破滅願望は持ち合わせていない。

全く、どうして自分の周りにはこう常に騒がしいのだろう。そう頭を振り、溜息と共に天を向く少女。

その紫の瞳が見上げた先に、箒で空を駆ける見慣れたライバル寮のクイディッチ選手の小柄な姿が映り込んだ。

「…Mr. ポッター？」

あまりに意外過ぎる光景を見たメリーは思わず箒の人影の名を呟いた。ハリー・ポッター、先ほどの試合で彼のチームへ最も素晴らしき貢献を果たしたエースのシーカーである。遠のく少年を見つめ続けるメリーはその背が向かう方角に嫌な既視感を覚え、ハッと息を呑んだ。

(ちよ、ちよつと…！ そっちはあの二人が消えた “禁じられた森” じゃない)

慌てて周囲を見渡せど、危険へ突っ込むポッターを止めてくれそう

な大人たちは見当たらない。無論彼の下まで飛べる技術も道具も無い。メリーは助けを呼ぼうと先を進む生徒たちの団体へ近付こうとし、そこで思い止まった。

（そもそも何でポッター君は校則を破ってまであの森へ…？ まさかさっきのスネイプ先生のアヤシイ動きが気になったとか、そんな子供っぱ）

立ち止まった少女は思考を巡らせ、確信する。そうに違いない、と。ポッターとスネイプの不仲は有名で、メリーも時折彼とその友人たちから聞かされる魔法薬学教師の黒い噂は覚えていた。常にあの「育ち過ぎた蝙蝠」の弱みを握ってやろうと目を光らせている反骨心豊かな少年が、ふとした偶然に憎い男の不審な振る舞いを目撃したとき、彼の取る行動は決まっている。

そんなポッターを今ここで呼び止めれば、彼の口から語られる話の真偽確認にポッター・鼻肩の生徒たちが面白がってスネイプの下へ殺到するかもしれない。そしてそれはスネイプの追い掛けるクイレルを利用しているメリーにとって、甚だ不都合なことであった。

（生徒たちがスネイプ先生を尾行したら、当然彼が追うクイレル先生のアヤシイ行動も知られてしまう…）

クイリナス・クイレルという教師は現在、ホグワーツ内で僅かながら危うい立場にある。その原因の一つが、新学期直後に新生生のメリーことマエリベリー・ハーンを誤った水薬の使用法で気絶させてしまったこと。不運にも少女の飛びぬけた容姿による高い知名度が仇となり、彼の周囲には「可憐な少女を眠らせ暴行を加えようとした」、「新生生に新薬の人体実験を行おうとした」などの悪質な噂が飛び交うようになっていた。特にハツフル・パフ生たちが表すクイレルへの嫌悪は尋常ではなく、クリスマス休暇に子供の語った彼の悪評を真剣に取った保護者たちが、校長ダンブルドアも動きかねないほどの突き上げを学校のポストへ叩き込んでいる。

奇しくも犬猿の仲たる悪名高きスリザリン寮監セブルス・スネイプと似たような状況にあるのだが、クイレルは彼とは異なり何らかの後ろ暗い目的をもって暗躍しているように見える。それが何なのかは

メリーの知ったことでも、興味の対象でもない。だがこれ以上あのターバン教師の汚点が知られてしまうと本当にホグワーツを追放されてしまう。メリーは、現代社会の常識を知り、闇の魔術に造詣が深く、校内の誰よりも親しい関係にあると自負している貴重な協力者を失いかねないので。
よって。

「はあ…… 子供が大人のイザコザに首突っ込んだらダメよ、ポッター君」

手折れんばかりの華奢な足が少女を運んだ先は、ルームメイトたちと共に目指した女子寮ではなく、魑魅魍魎が蠢く魔の森。

危険に飛び込む友人を制止させる善意。利用価値のある教師の悪行を隠蔽する打算。自分のこれまでの行為を棚に上げ、少年へ理不尽な悪態を吐くメリーは、躊躇うべきわかりきった危険にやむを得ず自ら飛び込んだ。

西暦1992年3月初週末 夕暮

英吉利・蘇格蘭某所『ホグワーツ魔法魔術学校』 “禁じられた森”

神秘とは、人が未知なる大自然に抱く畏怖の具象である。そんな魔法の本質を体現しているのか、神秘の最高学府を自称するホグワーツ魔法魔術学校では 小学生から高校生までの子供たちが生活する

環境ながら 即死もあり得る超級の危険区域が多数存在する。

そして、暗躍するクイレルたちと向こう見ずなポッターを追い掛けるメリーが足を踏み入れたこの地もその一つ。人を喰らう凶悪な魔法生物が巢食う魔法界有数の危険地帯、
Forbidden Forest^{禁森}だ。

(うわあ…… もうあの「夢の世界」で見た恐ろしい森と変わらない妖怪の世界じゃない、ここ)

行く手を阻む捻じれた木の根や垂れ下がる猿麻薯に内心悪態を吐きながら、少女は辺りに広がる不気味な樹海を溜息と共に見渡した。無風の森で騒めく木の葉、霧が視界を遮る泥濘んだ地面、悪臭に淀んだ冷気、唸る獣のような霜の軋めき。その全てが幼いメリーの精神を蝕む恐怖の因子。

だが少女の顔に怯えはない。結界遊びで似たような環境を彷徨い慣れている彼女は、悪路に何度と躓きながらも着実に目当ての男たちの後ろを追従する。時折見かける巨大な蜘蛛や半人半馬の異形の姿に目を輝かせるメリーの好奇心は、飛び級天才児の言葉では説明出来ないほど、まるで恐怖という感情そのものをどこかへ忘れて来たかのように狂氣的であった。

(つて、いけない。まずはポッター君を探さないと……)

いつもの冷静な自分に思考を切り替えた少女は、休暇中に覚えた【追跡呪文】を駆使し目当ての人物の下へ忍び寄る。

その少年は、何故か木々の隙間の藪に頭から突っ込んだまま逆さに釣り下がっていた。

「…Mr. ポッター、そんな恰好で何をしてらっしゃるの?」

「うわっ!? M、Miss ハ」

「シッ、叫ばないで」

驚いて声を張り上げる少年の口を手で押さえ、落ち着かせる。しかし驚愕、困惑に続いて紅潮するポッターの内心を察し、メリーはサツと手を引っ込めお年頃の男の子から距離を取った。

「ど、どうして君が……」

「あなたがスネイプ先生の後を付けるように空を飛んでいるのが見え
たからよ。ほら、危険だから早く帰りましょう。クイディッチのヒー
ローが不在ではグリフィンボール寮のパーティー熱も冷めてしま
うのではなくて？」

「あ……」

余計なものを目撃される前に穩便にここから離れさせようと述べ
た言葉だが、それなりの効果はあったらしい。しかしメリーの説得
は、彼の僅かな葛藤のみに止まり失敗した。

「で、でもスネイプの怪しい動きも見過ごせないよ……！ あいつが賢
者の石を狙ってるのはMiss Hoonも知ってるよね。新学期に
入ってようやく尻尾を見せたから、今度こそマクゴナガルを動かすだ
けの証拠を押さえてやる……！」

「……ああ、ハーマイオニーが何度もおっしやつてたアレね」

小声で興奮気味に宣言するポッターへ少女は白い目を向ける。

彼の言う「賢者の石」とは、永遠の命を授ける秘薬の根幹的材料の
ことを指す。高名な錬金術師ニコラス・フラメルただ一人が生成に成
功した究極の魔法物質であり、その管理は当代最高の魔法使いアルバ
ス・ダンブルドア校長が行っているらしい。

ポッター、ワイズリー、グレンジャーのグリフィンボール三人組
はクリスマス休暇以前からスネイプがこの賢者の石を狙っていると
メリーに力説し続けていた。その度に少女は「またバカの探偵ごっこ
が始まった」と聞き流しており、故に今回も同じくさっさと話をすり
替えようと彼を急かす。

「証拠を押さえるのも結構ですが、*“禁じられた森”*への侵入は50
点以上の減点なのよ？ 私はそれ以上を自分で稼いでいるから受け
ても全く構わないけれど、あなたはいかが？」

「うっ……」

説得二回目、どうやらこちらはかなり少年の心を揺さぶっているよ
うだ。メリーは確かな手応えに心中で頷きポッターの手を引いた。

「はあ…… 全く、考え無しなんだから。ほら立ちなさい、Mr. ポッ
ター。一日で試合の英雄から寮杯の戦犯へ転がり落ちたくなければ、

急いでこの場から離れ」

それはまさに二人が腰を浮かそうとした瞬間であつた。霜を踏み締める鳴くような音と共に二人の人影が現れ、少年少女の隠れる藪の目の前で言い争いを始めたのだ。

メリーは悪化した状況に臍を噛む。ポッターに見られなくなかつた、クイレルの暗躍現場だ。

「セ、セブルス…？ な、何故このような場所で話などと…」

「知れたことを。生徒に聞かれては不味いのはお互い様ではないかね？ …賢者の石」の存在は我らだけの秘密であるが故に、な」

顔をしかめるメリー、戸惑うポッター、二人揃つて驚愕する会話内容だ。だが少女の予想に反し、どうやらスネイプはクイレルを尾行していたのではなく、彼との待ち合わせにこの場まで足を運んだらしい。

(どういうこと…？ この二人の関係って、授業の教授職の因縁だけじゃないのかしら…)

男たちの間に漂うのは、どこか以前の図書室のときの突き刺すような敵意とは違う、別の陰呑な雰囲気。例えるならスパイの密会のような緊張感か。敵対しているはずの両者の意外過ぎる間柄にメリーは瞠目しつつも頭を抱える。クイレルに裏があるのは薄々気付いていたものの、まさかあのハロウィーンの出来事以後、天敵のスネイプと結託していたとは。

困惑する少女を余所に、教師たちの密談は続く。

「そ、そのような恐れ多い」

「下らん妄言は止めたまえよ、クイレル。問題はハグリッドの猛獣であろう？ そろそろ如何潜り抜けるか、貴様の『主』の知恵を授かれた頃合いだと思つたのでな」

「…ッ！」

また隣のポッターが息を呑む。それなりに大きな音であつたが、流石のスネイプの地獄耳も屋外ではなりを潜めるらしく、二人の気配は未だ悟られていないようだ。出来ればこれ以上余計で危険な話を聞

いてしまう前に逃げ出したいが、正義感溢れる英雄少年は、想い人の
続けるような無言の意思表示にさえびくともしない。

「グリーンゴッツでの引き渡し時に貴様とハグリッドが遭遇したまでは
校長の掌の上のことだが、まさかヤツが極秘任務の内容を同僚とは
言え部外者に漏らす大馬鹿者であったとは、流石の狸爺でも見通せな
かったようだ。もつとも貴様が杜撰な襲撃などしたせいで、石の警備
が厳しくなったのは自業自得と言わざるを得んがね」

「き、君はさつきから、いつ一体何を言つて…？ わっ私にはまるで意
味が――」

「否、否、否。貴様は吾輩の言わんとしていることを全て、完璧に理解
しているとも」

顔面蒼白で小心者の風体のクイレルへ、黒ずくめ教師が更なる言葉
の追い打ちをかける。親しいメリーはターバン教師の二重人格なら
ぬ猫被りに気付いているためスネイプの言葉に頷けるが、何も知らな
いポッターはその限りではない。逃げようと袖を引っ張る少女と、好
奇心を押さえられない少年の静かな攻防は、男たちの密談が終わるま
で続いた。

「ふん。精々その下らん見戯が暴かれぬよう用心しておくのだな。…
貴様が真に捧ぐべき忠誠の在りかが何処にあるのかは、いずれまた問
うでしょう」

そう言い残し、スネイプが森を去る。メリーは取り残されたクイレ
ルが一人の場で本性を露わにする前に撤退すべく、全力を振り絞り
ポッターを現場から引き剥がした。

離れずに付いて来つつも文句を言うポッターを無視し、【消音呪文】
と【目くらまし術】でクイレルから離れるメリー。その心には強い焦
燥と後悔の念が渦巻いている。

明らかに聞いてはならなかった、犯罪色の濃い密談。しかしクイレ
ルが何らかの目的を持って暗躍していることを既に知る少女にとつ
ては想定済みの内容だ。

メリーの苦悩は、彼の密会現場に第三者のポッターがいたことであ
る。

だが、さてどうクイレルの悪行を誤魔化すべきかと眉間に皺を寄せ
る彼女の内心をよそに、典型的な熱血馬鹿のポッターは最初から全
くの見当違いな結論に至っていた。グリフィンドール生

「それにしてもスネイプめ、関係ないクイレルを巻き込もうとするなんてとんでもなく悪いヤツだ……！」

「……はい？」

困惑するメリーに少年は自身の憤りを言葉にする。

「Miss ハーンも聞いたよね？ あいつはクイレルを脅して自分の代わりに賢者の石を盗みに行かせようとしてるんだ！ クイレルの『下らん見戯』がどうか言ってたし、ハグリッドのフラッフィーのことだって……もしかしたらフラッフィー以外にも沢山の番犬や仕掛けが石を守ってて、クイレルも闇の魔術を遠ざける呪文を使ってスネイプの侵入を邪魔してるのかもしれない……！」

「……なる、ほど？」

捲し立てるポッターに少女は首を捻るばかり。おそらくスネイプが悪者であるという強固な先入観に視野が狭まり、自分の推理の証明に繋がる一部の言葉しか頭に入らなかったのだろう。

子供らしい呆れるほどに短絡的な思考だが、今回ばかりはメリーにとつてこの上なく都合が良かった。

「不味いよ、どうしよう……クイレルがスネイプに屈してしまったら、石はあいつのものになってしまう！」

「……ではクイレル先生がスネイプ先生の魔の手にかからないよう、氏を支えて差し上げればよろしいのではなくて？」

「ハッ！ そうだよ、僕たちがクイレルを助ければいいじゃないか！ 流石Miss ハーン！ なんて君があんな変人と仲がいいのか今までわからなかったけど、最初からクイレルがいい人だって知ってたからなんだね！」

「えっ？ ええ、ええ。ありがとう、お褒めいただき恐縮ですわ」

迷走する魔法界の英雄殿の頭の出来を心配しつつ、少女は小さく安堵の溜息を零した。

懸念していたポッターのクイレルに対する不信が真逆のものとな

り余裕と冷静さを取り戻したメリー。そして、いよいよ無視出来ない領域へ踏み込んでしまった彼女は、今度はあのターバン教師の謎に頭を悩ませる。

賢者の石、あるじ「主」、ハグリッドへの襲撃、そして「捧ぐべき忠誠の在りか」……

特に不穏に感じた言葉を羅列し、それらが導く男の闇を垣間見る。彼の体に巣食う異物の正体について、相棒の蓮子と考えた推測や憶測の数々が、少しずつその確たる姿を形成し始めていた。

(杞憂で済めばいいのだけど、私に限ってそんな平和的な願いは叶わないのよね……)

少女が溜息混じりの祈りと共に見上げた、春が近づく三月のスコットランドの夕焼けは、芽吹きの子季節に水を差す不気味な黒雲に覆われていた。

FILE. 10: 悪女たちの皮算用 (挿絵注意)

西暦1992年3月中旬 昼

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』 3階研究室

「 故に、私は人間の脳にはその者のゴーストが生み出す固有の小世界が存在していると考え、我々魔法使いたちは鍛えられた魔法的想像力で霊魂世界と物質世界の境を曖昧にすることで、己のゴーストが固有の小世界で創造した現象を現実^{メンブレンワールド}に具現化しているのではないかと考えているのだ。これはハーンの言うマグル界の『薄膜世界』の考えから着想を得た自論だが……君はどう考える? 」

「そうですね……霊魂を持つ固有の精神世界の集合体が『霊魂世界』であること、そして神秘を現実^{メンブレンワールド}に持ち込むのではなくその境界を取り払うという発想は盲点でした。やはり先生のお考えは大変勉強になります」

春の陽気が温かいホグワーツ城三階階段横の一角。昼休みの『闇の魔術』に対する防衛術教授の研究室では、不気味なアジア趣味の仮面で飾り隠された内壁を背に、強い光を瞳に灯した若い男が小柄な少女と議論を交わしていた。

男の名はクイリナス・クイレル。『闇の魔術』に対する防衛術の授業を教えるホグワーツ教師だ。

クイレルに「ハーン」と呼ばれた小柄な少女、メリーは相手の高説に耳を傾けつつ、小心者の演技を捨て去った彼の本性をその優等生の笑顔の裏で慎重に観察していた。

当初、メリーはこの男のことを「気弱だが自己承認欲求が高い人物」と認識しており、本人の書いた魔法書や論文を絶賛することで彼を懐柔しようと考えていた。そしてその認識は決して誤りではなく、事実繰り返し述べた背中がむず痒くなるほどの称賛の言葉の甲斐あつてか、ようやく学年以上の深い『闇の魔術』に関する知識や、『閲覧禁止の棚』の書物の幾つかの貸し出し許可を貰うことに成功していた。

だが親しくなるにつれ、少女は彼の評価を、一度学術的探求心が芽生えたと驚くほど大胆な行動を起こし鋭い自論を組み立てる優秀な学者だと改めていた。

クイレルはマグル学　つまり現代社会の知識を豊富に有しており、魔法界の閉鎖的な社会を生きる者には無い、極めて柔軟な発想力を持つ人間であった。

そのためか、彼の唱える“闇の魔術”に関する理論は、シャーマニズム的な感覚論が多い魔法界の学問の中では群を抜いてわかり易かった。実際クイレルの論文を送った相棒の蓮子も、おかげでダブリンの拠点で行っている魔法書の解読が捗っていると嬉しそうな報告を寄越している。

生粋の理系である彼女が感心するほど論理的な魔法書を書くことが出来る魔法族は、おそらく、現世の体系化された学問にも造詣が深いこの男だけであろう。

彼が纏う吸血鬼避けのニンニク臭を自身の嗅覚に対する【錯乱呪文】で誤魔化し、教室を後にするときに【消臭呪文】を髪や衣類にかける必要があることを除けば、クイリナス・クイレルとの魔法議論はメリーにとってホグワーツで最も為になる時間であった。

だが、彼との“闇の魔術”議論が増えるに連れ、メリーはこの男に抱いている違和感を強めていた。

「呪文が物質世界に影響を及ぼすとき、魔法として具現化する効果は術者の精神に大きく左右される。もし魔法の原理をより詳しく解明出来れば、我ら魔法族は更なる力を得られるのだがな」

「…ですが先生のおっしゃる通り、これはやはり靈魂に関する魔法を今以上に発展させなくては仮説を証明することは難しいでしょうね。

“闇の魔術”の研究が魔法省に禁止されているのは、魔法の行使に非人道的な手段を用いる必要があるからですか？」

「と、言うよりそれらの手段を用いる魔法を“闇の魔術”と呼ぶのだ。だが非魔法族の生まれの君ならわかるのではないかね？　彼らマグルの科学は数多の犠牲の上に発展したのだ。確かにかつての連中は『神への生贄』や『聖戦』などといった意味不明な迷信を信じ、無意味

な血を流す愚かな者たちだった。だが今、社会性や利便性、そして何より武力は彼らの世界のほうが勝っているではないか」

「…ええ、まあ。マグル界は魔法界とは比較にならない富や人口を抱える社会ですので、それらを非友好的な相手から護るために技術を軍事に注力するのは自然の摂理ではないでしょうか」

「その通りだ。だからこそ我ら魔法族はマグルに対抗すべく自衛の手段を磨かねばならん。しかし今の魔法省は魔法の研究のために個人工房を統合支援することもなく、大いなる発展が望める『闇の魔術』の研究を行えば犯罪者扱いする。人間の根源的な渴望は力。武力なのだ。善悪など力あるものが弱者に押し付ける法に過ぎん。彼らは進歩ではなく変化を恐れ、それを成す力そのものを恐れているのだ。これを怠慢と呼ばずして何と言う。私は連中に何度もそう意見してやっているというのに、どいつもこいつもかつての無能な同期らと同じように私をバカにしおって…！ 何も知らぬ愚か者共が…っ！」

「せ、先生、落ち着いて…」

このようにクイレルは熱が入ると別人のように変貌する。特に彼の「力」に対する執着は強く、何か不穏なものを感じるほどに危険であった。そしてそれ以外にも、精神学に明るい元大学生の天才少女は言葉を交わすうち、彼が時折見せる明らかな精神障害の症状を目ざとく捉えていた。

分裂症、不安障害、解離性同一性障害。どれも現代社会では治療可能な症状である。ましてここは記憶消去や改竄の呪文が存在する魔法界、治療の当ては最高医療機関『聖マンガ魔法疾患傷害病院』以外にも数多くあるはずなのだ。

だが心に何かしらの重度の異常を抱えている人間は、一般的に他人からその事実を突き付けられることを過度に嫌悪する傾向がある。ただの一生徒であるメリーに「先生に精神障害の疑いがあります！」などと言えるわけがない。最悪これまで築いてきた、極めて重要な信頼関係が粉々になってしまう。

そして、肝心な問題がもう一つ。

(間違いない……先生に憑いてる悪霊の力が増し始めてる……)

メリーはちらりと男の後頭部へ目を向ける。分厚いターバンに覆い隠されているが、異界の境界を司る少女の目はその秘された姿を見逃さない。

この世には無数の境界が存在する。それは国境であつたり、価値観であつたり、ときに世界そのものであつたりもする。そして、数多ある境界の中で最も強く反発するものが、異なる世界同士の境界である。

本来、霊魂とは冥界や地獄などの異界に住まう存在だ。境界を越え、現世の住人に何かしらの影響を与えられるほど力の強いモノは、境界を視認することが出来るメリーの目に極めて強大な存在として映る。

しかしここ最近、寄生虫のように朧気だったはずの悪霊の存在感が、宿主の魂を圧迫するほど巨大化し始めたのだ。

明らかに危険な兆候である。

(これ、多分先生自身も気付いてるわよね……)

メリーはこれまで幾度かクイレルにそれとなく、異なる霊魂に憑依されることの恐ろしさを伝えようと機会を窺っていた。だが少女はこの男に宿る強い名誉欲の裏に隠れた狂気の焰を見るたびに、喉まで込み上げた言葉の全てを呑み込んできた。

劣等感に呑まれた者が非行に走るのは人の常。もしこの悪霊の正体が、己の承認欲求を満たすためにクイレル本人が望んだ何らかの秘法の結果であるならば、メリーがその存在を暴くことは最悪手に他ならない。

(妖怪や魔物になっても人は失うものしかないのに、何で自分から人間を止めようとするのよ……)

クイレルの論理的な思考はこの閉鎖的な魔法社会の強烈なブレイクスルーになれるほど、極めて大きな価値がある。彼は魔法界にとつて、失われてはならない素晴らしい人材なのだ。そのことを繰り返して伝え、思い直すよう促してはみたが、侵食が進む後頭部の悪霊の姿を

見る限り、どうやら最早何を言っても徒労に終わってしまうだろう。何も出来ない己の不甲斐なさから目を逸らそうと男の姿を視界から外したメリーは、教わった貴重な知識に対する礼を返し、渋々クイレルの研究室を後にした。

西暦1992年3月中旬 夕暮

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』5階図書室

「で、どうだった？ クイレルと協力出来そう？」

午後の授業も終わり、約束の時間に図書室へ向かったメリーを三人の少年少女が興奮気味に迎えていた。いつもの愉快的グリフィンドール三人組である。

先日「禁じられた森」でスネイプの密談を目撃したポッターの勘違いを真に受けたウィーズリーとグレンジャーは、早速クイレルとの共同戦線を張ろうと子供らしい杜撰な計画を練っていた。その一環として親しいメリーに彼の説得を依頼しており、この集まりはその結果報告のため設けられたものである。

「それとなく石について仄めかしてはみたけれど、残念ながらあまり良い反応は無かったわ」

「そんな……」

期待外れの言葉に三人は肩を落とす。

もつとも、頼みのメリー自身に全くその意欲がないため結果は推して知るべし。彼女にとって大事なものはクイレルとの魔法議論と、ここ

最近行っている彼の悪化し続ける容体の確認であり、子供の探偵ごっこではない。まして本人にとつて不都合な密談の現場を見ていたことを暴露するなど阿呆の所業である。

「物事には順序があるのよ、お三方。そう真正面から例のアレについて切り出せるワケがないでしょう」

「そうだけど……僕たちにはもう時間がないんだ！ クイレルは臆病だし、次にまたスネイプに脅されたら今度こそヤツの言いなりになってしまうかもしれない！」

「ねえ、マエリベリー。貴女ホントにあいつを説得したの？ 何だか全く残念そうじゃないっていうか、やる気を感じないんだけど」

「……不満でしたらハーマイオニーも先生に相談なさってはいかが？

別に石の話に限らず、一生徒として先生を慕う素振りをお見せすれば可愛い教え子のために踏み止まってくださるのではないかしら」

「あのニンニクの臭いをどうにかする呪文を覚えたら考えるわ」

担当者のメリーに不満を述べるも、やはりあのクイレルが相手だからか、勇敢なグリフィンドール三人組も直接接触するには二の足を踏んでいる様子。彼の本性を知らぬ者が、あのどもり口調を聞き続けるのは辛いだろう。メリーの説得が当てにならないと判断した男子二人が次の手を考えるべく、互いに頭を突き合わせる。

「問題のスネイプだけど、あいつつて結局どれくらい強いのかな？

トロール騒ぎで先生たちが全員で対処に向かうくらいだから、あのノロマを倒した僕たちだって勝ち目はあると思うんだけど」

「ふんつ、あんな嫌味男なんて僕の浮遊呪文で一発さ！ 今度フラツフィーやクイレルに手を出そうとしてるのを見かけたら、容赦しないもんね！」

勇ましく鼻の孔を開張させる少年たちとは対照的に、年不相応にマセた少女二名は眉間を押さえつつ静かに彼らから距離を取った。

「…ねえ、私もうバカに説教するの疲れちゃった。『いい子にしないと嫌いになるわよ』ってマエリベリーが注意したら、貴女にベタ惚れなああ二人はちゃんと言うこと聞いてくれる気がするの。代わりにお願いしていい？」

「流石に元デスイーターの疑いがあるスネイプ先生に勝ると本気で考える小学生を恋愛対象として見ることは不可能なので、事後報告のような形になるけれどいいかしら」

「それはそれで救いがないわね、あの二人……」

友人の男の子たちに辛辣な評価を下すメリーとグレンジャー。しばしの間見つめ合いの後、二人はどちらともなく溜息を吐き、可哀想な生き物を見る目で横の少年たちを論そうとした。

「ハリー、ロン。貴方たちスネイプをトロールと同格だと思ってるみたいだけど、同格なのはスネイプ先生じゃなくて貴方たちの頭だわ。【武装解除の呪文】すら使えない私たちが戦いを挑んでも一瞬で負けるに決まってるでしょ」

が、肝心のグレンジャーが言葉を選ばず挑発的になってしまい、見事いつもの三バカの言い争いが開始する。

「何だ?! そんなことやってみないとわからないじゃないか!」

「それがわかったときにはみんな仲良く棺の中よ。私はまだ死にたくないわ!」

「マエリベリーの説得が上手くいけばクイレルも一緒に戦ってくれるかもしれないだろ! 僕たち四人にあいつも加われば絶対に勝てるさ!」

「ちよつと! 『僕たち四人』って勝手に私とマエリベリーを自殺志願者に加えないで!」

「どうしてさ! 僕たち友達じゃないか!」

「友達だからってバカと一緒に心中なんて真つ平御免よ!」

そうギャンギャン叫ぶ猿の輪に、ふと静かな女性の声が紛れ込ん

だ。
「一緒に心中は嫌でも、私の説教は一緒に受けなさいね、お嬢さん? 図書室では、し・ず・か・に」

『!?!』

司書のイルマ・ピンスの叱咤を仲良く受けるグリフィンドール三人組から視線を逸らし、メリーは一人彼らの話について考察する。

クイレルは学生時代は完全な理論型のレイブンクロー生で、どちら

かと言えば呪文より座学で評価される学者に近い人物であつたらしい。実際にホグワーツの教員でスネイプを上回る魔力を持っているのは、校長以外だと決闘の達人で知られるフリットウィックか、「次期校長」と謳われる大魔女マクゴナガルくらいだろう。多少力を隠しているのだろうが、メリーにはクイレルがスネイプに魔法戦で勝てると思えなかった。

(あの憑き霊のことを考えるに、クイレル先生の目当ては多分賢者の石なんだろうけど……スネイプ先生はそれに協力しているというよりは、むしろ逆にクイレル先生の上位者のように見えるのよね。そしてスネイプ先生は元デスイーター……)

スネイプ　と結託していると思しきクイレル　が賢者の石を狙っている可能性は、先の「禁じられた森」での密談の内容を見るに、非常に高い。魔法界には人の記憶を取り出して視ることが出来る魔法があるため、もし教師陣に心当たりがあるのならば既に動いているはずだ。校長やマクゴナガルがポッターの話を否定したのは、おそらく子供たちを危険から遠ざけるため。ならば今ポッターたちが行っている行動は本当に命に係わることなのかもしれない。

(この子たちが拘る「クイレル先生との共闘」は、私が咄嗟にあの密談の印象を誤魔化すために出した言葉だし……煽った身としては最低限の落とし前は付けないといけないわね)

無謀な探偵ごっこに意気込む少年少女の危険に少なからず責任を感じているメリーは、凶らずも大変な事態に巻き込まれてしまったと戦慄していた。

見え透いたトラブルには慣れているものの、此度の一件は生死に関わる。自身の目的にも大きな影響が出る事件であることからメリーは己の限界を瞬時に見極め、無茶を自重し然るべき人物の協力を仰ぐことに決める。

メリーが現在所属する組織はホグワーツ以外にもう一つある。

『秘封？・楽部』

そしてそこには、幾つもの冒険を共に潜り抜けてきた、宇佐見蓮子

という心強い相棒がいた。

西暦1992年3月下旬 夜

アイランド
ダブリン
愛蘭土・都柏林某所 『旧ハーン診療所』

学年末試験を前にした貴重な長期休暇、春休みのイースターホリデー。クリスマス休暇以来となる相棒の宇佐見蓮子との再会を喜び合った『秘封?楽部』の二人は、早速各々の進捗状況の報告を交わしていた。中でも賢者の石を巡る子供たちの火遊び、そしてクイレルの霊魂状態の二つは急を有する議題であり、これまで他人のことは後回しにすべきと一貫した姿勢を維持していた幼い日本人少女も頬に汗を垂らしていた。

「…不味いわね。一応除霊はホグワーツの禁術書庫にあったやつのお応用で出来そうだけど……そもそも除霊していいの？ メリーの手紙になんか本人に拒まれそうって書いてあったわよね」

「多分クイレル先生は自分から進んであの状態になってるのよ。理由は本人の性格からして何となく想像がつくけれど…」

「学生時代にイジメを受け、ホグワーツ就職以後も不人気な“マグル学”の教授職を回され、生徒たちからバカにされる毎日。今年に入って“闇の魔術に対する防衛術”の授業を担当するも、その裏に“闇の魔術”そのものへの傾倒が見て取れる、力に焦がれた自己承認欲の強い小心者……ね」

クイレルと交わした幾度の議論や世間話からメリーが推理した彼の過去を口に出し、「まあロクな理由じゃないでしょうね」と蓮子は顔

を歪ませる。魔法界の常識や昨今の情勢に関する情報収集を担当していた彼女には、相棒が学校生活で見聞きした出来事全てを繋ぎ合わせる嫌な啓蒙が下りていた。

「スネイプ先生との密談で出た話から推測出来る最悪のパターンは、やっぱりクイレル先生の『真に忠誠を捧ぐべき』とやらが、アレだった場合よね」

「…やっぱりお互い同じ結論に行き着くわよね」

かの英雄少年ハリー・ポッターとの薄くない交流。親身に行っている教師クイレルには額傷の少年に憑く悪霊と同じ気配。そして永遠の命を授ける賢者の石を巡り結託する元信奉者デスイーター疑惑のある別の教師スネイプ。周囲にこれだけの条件が揃ったメリーの運命が、彼女を放っておくはずもない。

かくして、聡い少女たちは小声で揃い、同じ男の名を口にした。

『闇の帝王』、ヴォルデモート。

史上最強の闇の魔法使いと恐れられていた、近代魔法界の悪の象徴である。恐怖とカリスマで魔法族を従わせた独裁者として広く知られているが、その思想や生い立ちが魔法省による情報統制と市井の自主的な黙秘により多くが謎に包まれている。非魔法族を忌み嫌い民族浄化を企んでいた、純血主義者の帝国を作り上げようとしていた、実はホグワーツの卒業生でスリザリン寮に所属していた、などが噂としてメリーら子供たちの耳に届く限界であった。

だがヴォルデモートに關し、万人が声高々に語り継ぐ事実が一つだけ存在する。彼を滅ぼした救世の赤子にしてメリーの同級生、『生き残った男の子』ハリー・ポッターの英雄譚だ。

「まあこうなると、自ら闇の帝王サマの怒りを買ってるポッター君はたとえメリーの言葉が無くともクイレル先生に近付き、目を付けられ、命を狙われるでしょうね。英雄君にとっては迷惑過ぎる有名税みたいなものよ、メリーが気に病むことは何もないわ」

「ねえ、それって私に彼を見捨てるって言ってるの…?」

「バカねメリー。見捨てるも何も、そもそもポッター君のことなんて

どうでもよくなるくらい　　貴女自身が危険な立場にあるのよ？」

「……あっ」

そこでメリーはたと気付く。クイレルに憑依している悪霊の正体がヴォルデモートであった場合、おそらくこれまでの付き合いで闇の帝王に自身のことを知られている可能性が高いのだ。

「クイレル先生から見たメリーは、一年生ながら高度な呪文の【閉心術】に手を出す学年最優秀の才女にして、『闇の魔術』に理解と興味を示すマグル出身者よ？　もし相手が噂通りの純血主義者の親玉だった場合、将来の脅威の芽を摘み取ろうと襲い掛かってくるかもしれないんだから……！」

「ちよ、ちよつと！　そんな怖いこと言わないでよー！」

「……まあ『闇の帝王』なんて呼ばれるくらいだし、流星に11歳の女の子をいきなり殺すような器の小さいヤツじゃないと思うけど……最悪の場合はそうなるわね」

「ああもう、クイレル先生に近付いたのが完全に裏目に出ちやったじゃない……」

さも当たり前のように最悪を前提にする蓮子の言葉を否定出来ず、メリーはがくりと項垂れる。自分を取り巻く出来事のこれまでの傾向からして、恐らく今回も大変なトラブルに直面するのだろう。己の運命を呪う少女の言葉は震えていた。

そんなメリーの気休めに、蓮子がもう一つの可能性を口にした。「で、もう一つあってね、こっちは楽観的な考えになるけど　もし療養中のヴォルデモートが暇してて、貴女の血筋を洗って元スリザリンス生だったらしいご先祖様にまで辿り着いたら、先祖返りの優秀な魔法族として逆に仲間になろうと迫って来ることもありうるわ。メリーって宿主のクイレル先生に唯一人親しく接してる生徒みたいだし、先生の好感度が転じて帝王サマの好感度になってたりしたら……ちよつと可愛いかも」

「それもなんかイヤ……」

苦い顔で拒絶の意を示す親友をしばらく見つめていた蓮子だが、突然「あ、いいコト思い付いた」と頭上に電球を灯した。

こういうときの彼女は常人には思い付かない天才的な閃きに至ることが多い。胸騒ぎを覚えつつも気になってしまったメリーは、相棒の知恵に期待を寄せる。

「もし帝王サマから仲間に誘われたら、逆に彼を私たちの『魔法界裏切り作戦』に利用するってのはどうかしら」

「…はい？」

焦れるような間の後に語られた蓮子の案。その内容に理解が追いつかず、メリーは思わず首を傾げる。

「つまり蘇るヴォルデモートを今の魔法省に代わる後ろ盾として利用して、魔法省の煩わしい『魔法界を去る者は記憶消去』の法律から逃れるってこと。具体的には犯罪者として完全に開き直ってメリーが帝王サマの配下のデスイーターになるのよ」

「…えっ、ちょっと待って、私がデスイーターになるの!? 何をバカな」

何をバカなことを。そうメリーは慌てて言い返そうとし、ふと気付く。

蓮子の案は狂気の沙汰だが、決して不可能ではない。全てはクイレルに憑く悪霊の正体が死した筈のヴォルデモートであり、尚且つ当人がメリーに好意的であるという極めてレアケースが前提にある。しかし、もし闇の帝王を最後まで欺き通すことが出来れば、少女が得られる利益はホグワーツに通い続けるより遥かに大きなものとなるだろう。

「実際デスイーターの環境は魅力的だわ。メリーの異能の制御方法として期待出来る時空間系魔法は全て彼らが得意とする。『闇の魔術』ばかりなもの。正直同僚たちの持つ知識や魔法書に教えを乞うほうが、ホグワーツの授業に出るより遥かにためになると思うけど」

「それは…」

彼女の言葉には一理ある。現在のメリーの魔力と学力は並の“O.W.L”受験生を遥かに凌駕し、異能の適正呪文に至っては人間の限

界を超越した汎用性と威力を發揮出来るほどに上達していた。如何に常識の異なる社会とはいえ〃O・W・L〃受験対象者は16歳。極めて専門的な相対性精神学を大学で学びながらサークル活動にも精を出せる優秀なメリーにとって、高校受験レベルの試験問題など兎戯に等しかった。

最終学年、魔法界の大学受験に該当する〃N・E・W・T〃レベルの実践的な魔術は興味深いが、先生から学ぶには5年も通常教科を受けないければならず、こちらは割に合わない。魔法学校で日夜楽しい神秘的学問の追求に明け暮れた結果、メリーは一年目の半ばにして既に『閲覧禁止の棚』以外にホグワーツで学ぶことが無くなりつつあったのだ。

そんな相棒の状況を察した蓮子が死喰い人の社会に興味を抱くのは、実際にホグワーツの温かさを知らない、メリー以外の親しい知人がいない彼女だからこそその合理的損得勘定故だろうか。

「元々魔法界を裏切つて京都に魔法の知識を持ち帰るつもりなんだから、今更イイ子ぶつて『犯罪者集団はイヤ』なんて躊躇うのもおかしい話よ」

「…マグル出身者はダームストラングに通えないから、確かにヴォルデモートの下に身を寄せるのは理にかなつてるけど…」

「それに今のメリーには、一瞬で魔法界での立場も人間関係も全てポイして日本まで逃げ帰れる、追跡不可能な規格外の空間転移呪文があるじゃない。新参者の一年生ならともかく、まさかデスイーターになるほどずぶずぶに魔法界に染まったマグル出身者が今更マグル界に戻るだなんて、魔法族としての高いプライドを持つ魔法界の人たちが考えるワケないもの。絶対上手くいくわ…い！」

捲し立てる蓮子の熱気に充てられるメリーは、この一連の流れに妙な既視感を覚えていた。

それは半年前の同じ場所。ここで今の、新たな『秘封？楽部』の方針が決まったときの論争だ。

（危険という意味では、ホグワーツ入学を進められたときも同じように反対したけど、蓋を開けたらこれまで二人で何とかやってこれた

…)

悪霊憑きのクイレルとポッターとの出会い、「組み分け帽子」の攻防、ハロウィーンのスネイプとの魔法戦。クイレルに魔法薬で気絶させられたときもあった。魔の森でアヤシイ教師たちの暗躍を目撃したこともあった。

決して平穏な日常ではなかったが、幸運、努力、何より相棒と共に働かせた知恵でそれら危機を潜り抜けて来た自負がメリーにはあった。

そして、今の少女には、魔法という力がある。持ち前の異能が支えるそれらは彼女だけが持つ無敵の呪文。かつてのように「夢の世界」で合成獣や妖怪たちに襲われ逃げるだけだった無力なメリーはもういないのだ。

らしくない闘争心が沸々と湧き上がる。

今の自分ならば、これしきの修羅場、潜ってみせねば己の最強の異能が廃る。

蓮子が道を示し、メリーが期待に応える。異能の進化と共に変わっていくあった関係だが、やはり我ら秘封？楽部は斯くあるべし。

しかし。

「やっぱりデスイーターはダメよ」

「……あの子たちに情が湧いちゃった？」

提案を否定するメリーに、孤独な親友が問う。その言葉にあるのは二人きりだった小さな世界が広がった相棒への祝福か、はたまた取り残された身が抱く羨望、嫉妬、寂寥か。

だが あなたの親友を舐めないで。メリーはそう瞳に力を籠め、複雑な思いを胸中に隠しているであろう蓮子を真正面から見返した。「魔法界を裏切るのは現世の生活を情理両方で捨てられない以上仕方ないけど、慕ってくれる友達と敵対するのは私たちの命がホントに危なくなっただけ。損得勘定で簡単に人とのつながりを捨てたら、私、本物の化物になっちゃうわ」

「ッ」

少女の言葉に蓮子が息を呑む。それは全ての答えであり、彼女ら『秘封?楽部』の出した共通の結論であった。

最優先はお互いの命。だがその次点にくる優先順位は、やはり、メリーの薄れつつある人間性を守ることなのだから。

「……ごめんなさい、無神経な提案だったわ」

「あら殊勝。らしくないわね、冷静で冷酷な合理主義者は議論に必要な不可欠よ?」

「…その理屈で言うとは意外とゲスなメリーは同じく会議に必要な、温厚な人情派としては力不足ね」

「なにおう? ふふっ」

「ふふふっ」

何はともあれ。自分がデスイーターになるなど、全ては天文学的な「もしも」に限った話だ。考慮することさえ無意味かもしれないが、己の悪運をある意味信頼している少女は、最も低く大変な可能性にこそ己の未来を見出す。

「もしも」への備えは、絶対に己を裏切らない。

「まあ長々と語ってて何だけど、余程帝王サマが酔狂じゃなければ十中八九敵対するほうの状況になるでしょうね。手堅い対策としては、赤ちゃん時代に彼を倒したポッター君や、最強と名高いダンブルドア校長と親しくしておくのがいいかしら」

「…クイレル先生はどうするの? それにポッター君のやんちゃも心配だし、第一その二人って私たちの野望を隠すために避けるべき相手じゃない」

「もう十分学校の信頼はゲットしたでしょ。まずはポッター君の『賢者の石防衛活動』に形だけでも協力して親睦を深めなさい。校長先生は念のためもう少し【閉心術】が上達したら接触する感じで。クイレル先生は……もしものための、帝王サマとのパイプ役として静観がベ

ストね」

「何重スパイなのよ、私…」

一年生とは思えない、来たるストレスフルな日々を想像しメリーは乾いた笑みを浮かべる。闇の帝王と敵対する道も、面従腹背の道も、等しく修羅。その両方に備える蝙蝠生活など筆舌にし難いほどの茨の道だ。

いずれにせよ、大切なのは自分と蓮子の命である。リターンが期待出来る危険は挑むに値するが、限度を超える危険を甘受するくらいなら、最終手段たる魔法界そのものからの逃亡も視野に入れておかななくてはならない。

最悪の場合、休み明けの三学期がアボットラルームメイトやポッターたちとホグワーツで過ごせる最後の時間になる。その覚悟を胸に、メリーは初めて出来た蓮子以外の友人を惜しむ心を大切にしつつも、己の運命を受け入れる決心を終えた。

FILE. 11: “禁じられた森” (挿絵注意)

西暦1992年4月末 夕暮

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』 図書室

二週間に亘る復活祭の休暇も終わり、春のホグワーツは学年末試験の準備一色となった。特に五年生と七年生が行う統一試験は将来の就職に大きく影響することから生徒たちの目も血走っている。

そんな殺伐とした上級生が占領する図書室禁書書架『上級防衛術の棚』付近の読書机に、場違いなまでに幼い少年少女たちが座っていた。言わずと知れた穴熊寮の聖女マエリベリー・ハーンと、英雄ハリー・ポッター率いる愉快なグリフィンドールの仲間たちである。

危険な闇の魔法書を囲みながら冷や汗を垂らす彼ら彼女らの目的は、宿敵スリザリン寮監セブルス・スネイプ教授から究極の魔法物質“賢者の石”を守ることだ。

「『許されざる呪文』……こ、こんな恐ろしいものをあいつは使ってくるの?」

「……やはりスネイプ先生に対抗するには、こう言った禁術の知識が必要ね。危うく無知で命を落とすところでしたわ」

『…ッ』

獅子寮三人組の紅一点グレンジャーの言葉をメリーが緊張した声で追従し、残りのポッターとウィーズリー男子陣が“闇の魔術”の恐ろしさに唾を呑む。その顔に最早以前ののような樂觀はない。彼らは自分たちが相対しようと思気込む相手が、埒外の恐怖であることを認めざるを得なかった。

ポッターら幼い一年生が今、本来不適切である“闇の魔術”の載る書物に目を通すことが許されている理由は、この禁書を持ち出した少女マエリベリーの人脈にある。『閲覧禁止の棚』の一つである『上級防衛術の棚』の管理者は代々“闇の魔術”に対する防衛術”の教授職に就く教師が兼任し、彼女は現教授クイリナス・クイレルとたまたま親しかった。そんな少女の名義を借りることで、一同は眼前に開かれた禁

術書『THE BLACK CODEX』を閲覧出来ていた。

さて、あたかも正義の英雄ハリー・ポッターの要望で危険な『闇の魔術』に関する書籍を仕方なく借りているかのように見えるメリーだが、実のところ、これは計算高い彼女が斯くあるべく仕向けた錯覚である。

真実は真逆。メリーにとってこの集まりの裏の目的は、『賢者の石』防衛活動』を自分が『闇の魔術』へ傾倒していると疑われた際の大義名分として利用すること。自身の物騒な図書貸し出し履歴をどうにか誤魔化したかったメリーにとって、ポッターたちの活動は渡りに船であったと言える。

「それにしても本当に助かったよ、Miss ハーン。君がいなければ、僕はまたあの『閲覧禁止の柵』に忍び込まなくちゃいけなかった」

「…何事も協力すれば自分の限界以上のことが出来るもの、お互い力を合わせて行きましょう。賢者の石を悪しき者の手に渡してはいけませんわ」

「その通り…！ ダンブルドアがボケてる以上、石を守れるのは僕たちだけさ！」

「ホント、先生たちが当てにならなくて困っちゃうわ」

改めて士気を高める三人組の輪の中に混じるメリーだが、その心に友人たちのような正義感など皆無。

先日ダブリンが本拠『秘封？楽部』での話し合いで、メリーは想定される『闇の帝王』復活に備え正義と悪の両陣営と同時に繋がりをもつ必要性を認めた。彼女がこの活動に関わった表の目的は、正義陣営 ハリー・ポッターとの関係強化。つまりヴォルデモートの脅威に備え、名高い戦力『生き残った男の子』の庇護下に入るためという、完全なる独善的思考に基づく行動であった。

それは確かに騎士道精神溢れるグリフィンボール三人組から見れば不純な動機になるだろう。だが彼らとの共闘に向ける少女の熱意は決して偽物ではなかった。

（大丈夫。ちゃんと人としてこの子たちを大切に思ってるから…）

まるで誰かに、あるいは自分自身に言い訳するように、メリーは脳裏でそう呟く。明確な目的をもって魔法学校にやって来た彼女が利
異能制御魔法の開発　を優先するのは必然であるが、これは本
来、あくまで本当の望みを得るための手段に過ぎない。

メリーは言葉を感情で飾り立てる。手段と目的を取り違い、究極命
題である己の「人」を捨ててしまったら本末転倒なのだから。

「あのさ、ところで話変わるんだけど……Miss　ハーンって
ドラゴンに関する法律とか詳しくないかな？」

「あっ！　そうだよ、その話もあったんだ！　聞いてくれよマエリベ
リー、実は　」

互いの覚悟を確認し終えた一同。その中で、あまりよくない方向へ
思考が傾きつつあったメリーは、放り込まれた新たな問題にこれ幸い
と意識を向ける。

そのウィーズリーが語った話は、人間性が廃れつつあるメリーの心
を潤す、大変興味深いものであった。

「つまりハグリッド先生が購入したドラゴンの卵の処分をどうす
るべきかで悩んでいる、ということかしら？」

「処分じゃないよ！　ハグリッドがあんなに大切にしているから、何と
かしてあげたいんだ」

「…なるほど」

ファンタジーの代名詞たるドラゴン。異能を制御出来た暁には魔
法生物の生態研究にも手を伸ばしてみたいと密かに夢抱いていた『秘
封？楽部』の二人にとって、これは是非とも活かしたい機会である。

それがポッターとの仲を深められるのであれば一石二鳥。

少しして4人は目当ての書籍を机に集め、ドラゴンの研究や法律に
ついて調べ始めた。

「やっぱりドラゴンの卵を持つのも売るのも違法なんだわ。あの
能天気なハグリッドが怪しむほどだし、例の商人は余程胡散臭いヤツ
だったのね」

「…確かにこの本を読む限り真つ当な手段で手に入れたものだとはいえ難いわ」

「そう！ 絶対そいつ悪いヤツよ！ さっさと見つけて返すべきなのに、ハグリッドも接待のお酒なんかで簡単に騙されちゃって…！」

親しい森番の不甲斐なさに憤慨する熱血優等生少女。グレンジャーの言葉を聞き、メリーは少しだけこの一連の出来事に関して気になることがあった。

「…ねえ、ハーマイオニー。ハグリッド先生の服装を見る限り、そんな危険で高価な卵を買い取れる方のようにには思えないのだけど、その商人と先生の取引はどのようなものだったかわかるかしら」

「え？ いいえ、お金じゃないそうよ。確かハグリッドが飼ってる珍しい猛獣の飼い馴らし方について教えて欲しかったみたいで、その対価に卵をくれたそう。って、えっ…？」

うわあ、とメリーは一気に噴出した話のきな臭さに軽い眩暈を覚えた。そんな彼女の反応から同じ結論に至った三人組も顔を青くしている。

ドラゴンの卵を入手出来る広い人脈の持ち主すら持て余す希少生物、それもハグリッドが飼育する猛獣について、少年少女は一つだけ心当たりがあった。

“賢者の石”の番犬である三頭犬、ケルベロス。

「ま、不味いよ…！ あの卵を売ったヤツって、絶対にスネイクだ！」「フラツフィーを宥めてあの隠し扉を通り抜ける方法を聞き出したんだわ！ なんて狡猾な…！」

「早めに気付けてよかったよ！ ありがとうMiss ハーン、僕たちこのことをハグリッドに教えてくる！」

足早にドタバタと図書室を飛び出すグリフィンードル三人組。以前のようにまた一人残されたメリーは、静かに此度のドラゴン問題についての情報を整理する。

違法な卵。怪しい商談。そしてその対価にハグリッドの猛獣に関する飼育方法。そこに先月のスネイクとクイレルの密談の内容を加

えれば、ポッターたちの言う通り全てが一つの線で繋がってしまう。
(あのプライド高い二人がハグリッド先生にお酒で接待するとか想像
出来ないんだけど……まあ上位のデスイーターのスネイプ先生、もし
くはヴォルデモートの悪霊に脅されて渋々クイレル先生が従ったと
考えるのが妥当かしら)

仮にこの考察が正しければ、既に用済みとなったハグリッドの側は
身の危険という意味では 比較的安全だ。口封じをするつも
りなら既に彼は殺されているか記憶を弄られているはずであり、また
ダイアゴン横丁で感じたあの巨人先生の為人は「面倒見が良い善人」。
ポッターに特別な思い入れがある鼻肩教師の一人なら、有事の際には
身を挺して英雄少年とその親友たちを守ってくれるだろう。

急を要するためひとまず解散したが、クイレルやスネイプと鉢合わ
せる危険がないのなら、頃合いを見てあの子たちにハグリッドを紹
介してもらいたい。ドラゴンとの出会いが惜しいメリーはささやか
な楽しみを夢想し、ポッターに借りさせられたことになっている残さ
れた禁書 “THE BLACK CODEX” の残りを読み進めた。

そしてその数日後。

「マエリベリー、どうしよう ノーベルタがマルフォイにみつかつ
ちやった…」

うかうかしているうちに全てが終わっていたどころか、新たな厄介
ごとを引き連れて戻ってきたと知ったメリーの心は、虚しさと呆れで
いっぱいであった。

西暦1992年5月25日 夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』ハッフルパフ寮談話室

試験を控えた前週。今までの遅れを取り戻すかのように加速する授業の進行は若く未熟な頭脳を置き去りに、多くの子供たちが頭を抱えながら日夜詰め込み業務に追われていた。

だが、今年のハッフルパフ寮に例年恒例の悲壮感は見当たらない。特にかねてより定期的に勉強会を開き、互いの弱点を克服してきた一年生の表情は、ある意味不謹慎なまでに明るかった。

「ねえねえ、みんな！ さつき廊下で聞いたんだけど、バカやったハリーたちの罰って今夜らしいわよ」

談話室の一角に陣取る二十人ほどの一年生。彼らの面倒を見ていた勉強会の主催者メリーの下に、用事で遅れたルームメイトのハンナ・アボットが現れた。ちようど休憩を挟もうとしていた一団に滑り込んだ彼女は以前から気になっていた疑問を口にする。

「夜間外出の減点らしいけど、三人合わせて150点は流石に厳しすぎると思わない？ もしかしたらスリザリンで広がってるあの噂が正しかったりするのかしら」

「噂って何？」

「あれよ、ハリーたちがドラゴンを匿ってたって話」

『ドラゴン!?!』

あまりに突拍子もない話に場が素っ頓狂な合唱を上げる。ポッターの規格外つぷりは周知の事実ながら、まさか校内で危険度XXXXの化物と密かに戯れていたとは誰一人として想像すら及ばなかった。

「相変わらずふざけたヤツだよ、我が魔法界の英雄殿は。そしてそんな犯罪者を退学にさせないホグワーツはもつとふざけてるけどね」

「ドラゴンなんて解き放つたら最悪死人が出るじゃない……！ 学校を何だと思ってるのよ、あいつらー！」

ザカリアス・スミスとスーザン・ボーンズの正論に、我が強く喧しいグリフィンドールが気に食わない一部のハッフルパフ生が口々に賛同する。

「でもドラゴンと触れ合えるだなんて羨ましいわね。叶うことなら私も間近で見てみたかったわ」

「僕も生で見たことはないな。そう思うと惜しかったかも」

もつとも談話室のほとんどは見慣れた有名人より珍しい魔法生物のほうに関心を寄せている。最強の名を欲しいままにしている怪獣は、やはり子供たちに大人気。

「流石にドラゴンは校長先生が許さないかと。……それより減点はともかく、危険な『禁じられた森』での懲罰は少しやりすぎじゃないでしょうか。ハリーが無事だといいいんですけど……」

そんな中、話に一步踏み込もうとする一人の少年がいた。ポッター信奉者の秀才お坊ちやま、ジャステイン・フィンチⅡフレッチリー。

至ってマトモな人格者である彼は憧れの人が置かれた現状を酷く憂慮していた。以前メリーが見た『禁じられた森』では多くの危険な魔法生物が跳梁跋扈しており、認識阻害の魔法が使えない子供たちが対策なしに生き残れる環境ではなかった。そんなフレッチリーの心配は、メリー自身も抱いていたところ。

（助けに行きたいのはわかるけど、実際に行く意味があるのは彼じゃなくて……私、よね）

彼がグレンジャー同様如何に優秀であろうと、所詮はただの子供。規格外のメリーのように特殊な異能を持たないフレッチリーが一人ポッターの助けに森へ向かってても、無駄に命を危うくするだけだ。

心配から今にも現場に急行しそうな彼の身を案じ、メリーは強引に話を終わらせる。

「はいはい、おしゃべりもそこまで。時間も迫ってますしそろそろ休憩はおしまいにしましょう。わからないところがあつたら私かMr.フレッチリーへお願いね」

『ほーいー』

和氣藹々とした空気を損なうことなく勉強会は再開され、メリーは他の勉強中の生徒たちの質問に丁寧に答えていく。

劣等生寮などと見下されることの多いハツフルパフだが、実はその認識は大きな間違い。本来ここに集まる子供たちは温厚で協調性が高く、忍耐強い者たちばかり。明確な目的意識を持つ優秀な人物に率いられたときの彼ら彼女らはその長所を存分に発揮し、見間違えるような優等生へと変身する。メリーのカルガモ教室行進や勉強会の恩恵を存分に受けたことで、今年の寮杯発表では大講堂の穴熊黄黒旗の下に目を見張る数字が刻まれていることだろう。

そして、それはメリー自身の評価にもつながっている。

(校舎から離れたポッター君は先生方の監視から外れてるはずだし、クイレル先生の最近の悪変化を考えると……もしものために今夜は私が代わりに護衛したほうがいいでしょうね)

忍び込み用の呪文も上達しており、仮に見つかりそうになった場合も今ならこれまでの信頼で相手の気のせいだと押し切れる。

当初の予定通り、教師陣に警戒されることなく主席が確保出来る立ち位置に付けた少女は、ひとまず安堵し張り詰めていた警戒心を弱めることにした。

深夜。

寝静まったハツフルパフ男子寮08号室に一つ、動く人影があった。寝返りを繰り返すその寝間着姿の少年は、一本の杖を大事そうに握り締めている。

少年　ジャステインは迷っていた。

非魔法族である彼は、魔法族の英雄であるハリー・ポッターに強い憧れを抱いている。同い年の男の子が世界を救う偉業を成したのだ、意識しないほうがおかしい。憧れの神秘の社会に単身飛び込んだ少年は、英雄でありながら自分と同じ世界で生き、自分の偉業をひけらかさない彼のことが好ましく、いつか友達になりたいと願っていた。

そして共通の友人であるハーンを通じ、その気持ちは日々増し続けている。

ジャステインの迷いは一つ、そんな憧れの人物の危険を静観するべきか否かである。

勉強は得意でも魔法の才は平凡な彼は、自分一人の行動に状況を変ええる力などないことくらいわかっている。ハーンのように上級生が習う呪文にまで手を出せる天才ならいざ知れず、家庭環境の面で他の生徒たちに後れを取っているマグル出身の一年生が出しやばっても足手まといになるだけだ、と。

だが、果たしてそれでいいのだろうか。ジャステインは強く臍を噛む。もし自分がハリーなら、おそらく迷うことなく友の助けになろうと相手の下へ駆けつけるはずだ。

では、それを成す原動力は何か。自分とハリー、両者の違いは何だというのか。

魔法の腕ではない。自分は「変身術」、呪文学」共に彼より上の成績を収めている。

育ちの違いでもない。自分が通っていた名門小学校でも、平気で校則を破る問題児は少なからずいた。

おそらく、自分と彼の違いは「勇気」なのだ。細かい屁理屈で己の行動を縛ることなく、大切な誰かのために後先考えずに突き進む勇氣。たとえ蛮勇と嘲笑われようと、その行動こそがハリーをハリー足らしめている理由なのだろう。

彼のようにになりたい。

こんなことを考えるのは馬鹿げている。それでもジャステインは、人を助けようとする意志を持ちながら、それを自分の保身や平穩のために捨て去るのは格好悪いと思った。ならば、あとは足を踏み出すだけだ。

長い葛藤の闇を抜け、少年は静かにベッドを降りる。ルームメイトたちを起こさぬよう、抜き足差し足で部屋の扉まで近付いた。ドアノブを捻る手が微かに震えている。しかし幼いジャステインの胸に燃える小さな勇氣は、それを回すに十分な力であった。

忍び歩きで男子寮から談話室への扉をくぐると、もう後には引けない。これまでの自分の模範的生徒としての人生に後ろ髪を引かれながら、少年は深呼吸と共にドアを解放した。

そこでジャステインは、思わず目を疑うものを見る。

「Mr. フレッチリー…?」

天窓から差し込む月光に照らされたハツフルパフ寮談話室。その女子寮の扉の前に、童話のお姫様のような純白のナイトガウンを纏った妖精が佇んでいた。

新雪の如き白い肌を青褪めさせ、信じられないものを見たような顔をする超が付くほどの優等生。ハツフルパフの才媛と呼ばれる学年全生徒の憧れ　マエリベリー・ハーンがそこにいた。

西暦1992年5月26日　深夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』 禁じられた森

「あ、あの……本当に入るおつもりなの?」

「う……Miss　ハーンこそ、怖いならついて来なくてもいいんですよ……?　ぼ、僕は一人でもハリーを助けに行きますっ!」

深夜の“禁じられた森”を二人の小さな影が音もなく突き進む。

その片割れ、メリーにとつてはいつもの夜間外出だが、今夜はここに場違いなお邪魔虫がいた。

少女の同僚、ジャステイン・フィンチⅡフレッチリーである。

例のドラゴンの卵を隠蔽しようとした罪、そして門限破りの校則違反が運悪く他寮生に見つかり、それぞれ50点の減点と危険な「禁じられた森」の夜間調査懲罰を強制されたグリフィン・ドール三人組。メリーは対ヴォルデモート戦力として大きな価値がある英雄少年を陰ながら護衛すべく、毎度の如くルームメイトたちが寝静まった隙に外出しようとしていた。そこで同じことを考え、談話室でばったり出会ってしまったのがこのフレッチリーであった。

(中々寝てくれないハンナたちに時間が取られたせいで焦ったのが不味かった。まさか談話室で誰かに遭遇するなんて、最初から自分に【目くらまし術】をかけておくんだった…)

堂々とした校則違反の現場を見られたメリーは即座にはしたくない寝間着姿から魔法で着替え、フレッチリーへの弁明に全神経を集中させた。幸い根っからの優等生である彼はこちら以上に自分自身の校則違反を気にしており、人の事情に構っていられる心理状態ではなかった。そこを巧に付き、あたかもこれが初めての悪戯的試みであるかのように振舞い、信じ込ませることに成功。おかげで少年は一切疑うことなく、か弱い見た目の女の子を守る勇敢な騎士の如くこうして気丈に「禁じられた森」を行軍している。

「そ、それにしてもまさかMiss ハーンがこれほど友達想いだったとは意外でした。今までお話してて何となく距離を感じてたので、貴女の新たな美德を知る切っ掛けになったハリーに感謝したいくらいですよ」

暗い森を歩く相方を心配しているのだろうか。少年の明るい気遣いにメリーは気持ちを入れ替え言葉で返す。

「…さて、ホントは最初から平然と夜に出歩く悪い女の子だったのかもしれないわよ？ 優等生だと思っていたMr. フレッチリーも、実は裏ではあんなことやこんなことを…？ ふふっ」

「勘弁してください…もし今日の僕の行動が両親に知られたら、こ

れから助けに行こうとしてるハリー以上の懲罰が待ってるんですから……」

「私も先生に怒られるのは避けたいので、これで一蓮托生ね。お互い問題児デビュー同士、仲良くしましょう?」

「…何故でしょう、状況は同じなのに僕だけ一方的に立場が低くなってる気が……」

軽口を叩き合い、暗闇で互いを励ます少年少女。時折悪路で紳士的に手を差し伸べられるなど、人生初の淑女扱いに戸惑いながら、メリーはフレッチリーの背後で不安に耐える無力な少女の演技を続けていた。

そして森の奥へと進むことしばらく。

「ッ、隠れて……! 誰かこっちに走って来るわ」

密かに唱えていた【人間感知の呪文】の効果範囲に反応があり、メリーは前を歩くフレッチリーの腕を引き木陰に引きずり込んだ。目を白黒させる少年に目線で接近者の位置を伝え、二人でその正体を視界に収める。

絶叫しながら疾走する例の感知反応は、少々意外な知り合いのものだった。

「あれは……スリザリン生のMr. マルフオイ?」

「あんなに将来が心配になる頭皮の持ち主は彼以外に居ませんよ。ミイラ取りがミイラになって一緒に罰則を受けたそうですが、確かにあの見事な逃げっぷりは気になりますね」

「何かあったのかしら……」

「……これは急いだほうがいいかもしれません。行きましょう、Miss ハーン!」

「え、ええ……!」

演技中のメリーは派手に動かさず陰の支援に徹し、必然的にフレッチリーの指示に従う形で先の渦中に飛び込むこととなる。そして【静穏呪文】で互いの足音を誤魔化しながら走りぬいた先で、少年少女は眼前に現れた光景に驚愕した。

腰が抜け這いながら後退るハリー・ポッターに、両腕を広げる闇色の人影が今にも襲い掛からんとする危機的瞬間に。

『!?!』

初めて目にする明確な死の危険に圧倒され、幼いフレッチリーは息も出来ない。そしてメリーもまた、目の前の黒いローブの人物から漂う最早馴染みとなった 巨大な穢れの気配に思わず硬化してしまった。

(ツあの邪気…… やっぱり全ては私たちの予想通りの)

相棒の蓮子と共に想定していた最悪なシナリオ通りの展開からメリーの反応が僅かに遅れる。その隙に謎の人影は背後の木の幹まで追い詰められたポッターへ、自身の短い杖を翳していた。

不味い。

シヨックから立ち直ったメリーは全ての雑念を即座に放棄し、「盾の呪文」を両者の間に展開しようと無意識に己の異能に働きかける。だが運良くその特別な魔法が発動する直前、彼女の魔法的感知に新たな反応が引つかかった。

「ッ、ハリー！ 逃げてくだ」

「待ってMr. フレッチリー、あそこを……！」

我に返り悲鳴のような叫び声を上げようとしたフレッチリーを制止。メリーは飛び出しそうになっていた彼を無理やり押し倒し、藪の中に伏せる。

すると「感知呪文」の反応通り、一人、否一頭の異形の怪物が木々の隙間から飛び出し、ローブの人影へ突進した。恐るべき威力の蹄は、鈍い音を立てながら相手を遠くへ蹴り飛ばす。怯んだ謎の人影は反撃しようと杖を光らせるが、異形はすかさず見事な立馬姿勢クールベットで威嚇。数合の魔法と肉体武器による牽制が続き、人影が分が悪いと悟ったのか静かに後退る。そしてそのまま闇に溶け込むように逃げ去った。

危機が去った後。異形の怪物は座り込むポッターへ近付き、何やら言葉を交わし始める。すると恐る恐る少年が異形の背に跨ぎ乗り、両者は疾風の如く魔の森の奥へ消えて行った。

「な、何だったんですかあれ…?」

一部始終を唾然と見つめていたフレッチリーが隣の相方へ震える声で尋ねる。以前、かの異形を同じ「禁じられた森」で目撃していたメリーは確信を持ちつつ、それを隠しながら一般常識として知られる知識のみを披露した。

「…人の上半身に馬の身体、おそらく『ケンタウロス』と呼ばれる種族だわ」

「ッ、ケンタウロス！ あれがああの星座のモデルの…!」

「本の知識ではあまり人間に好意的な種族ではないと書かれていたけれど、英雄と称えられるMr.ポッターは特別なのかしら」

助太刀はともかく、馬のように背に人を乗せることを酷く嫌悪する彼らが自身の誇りを捨てるなど尋常ではない。やはりあの額傷の眼鏡少年は人間以外の種族にとっても救世主であったのだろう。「魔法界の英雄」の本質を見た気がしたメリーは素直に感心していた。

が、横で喧しく騒ぐフレッチリーの興奮にその熱も冷める。

「…すごい。すごいです…! やっぱハリーはヒーローなんですよ! ケンタウロスの背に乗って森の闇を切り裂くあの姿! ああ、かっこいい…:僕もあんな男になりたい…」

なるほど、この気持ちに女の子が同年代の異性を「男の子だなあ」と呆れて形容するときを抱くものか。そう新たな気付きを得たメリーは愉快な友人の姿にクスクスと笑みを零し、茶化すように一言だけ注意した。

「…羨望も結構ですが、出来れば知性まで憧れるのは勘弁してくださいる?」

「それは両親に殺されかねないので謙虚に自重します」

「賢明ですわ」

ポッターに助太刀するという目的自体は果たせなかったが、英雄の

新たな伝説に立ち会えた事実はフレッチリーの徒労感を拭い去って余りある程の幸せだったらしい。一時的に例の黒いローブの襲撃者の存在が頭から抜け落ちているのはご愛敬と言うものだろう。

だが場を和ます相槌の笑顔に隠されたメリーの関心は、当然、その襲撃者の正体にこそあった。

(本格的に動き出したと見るべきかしら…)

少女は予想が現実になったことを認め、今一度覚悟を改める。

目敏い彼女は、ポッターが襲われた場の端に横たわる一頭の大型動物の死骸を捉えていた。白い馬のような、されどケンタウロスとは大きく異なる神秘の魔法生物。あの頭部から突き出るランスのような一角は、現世では純潔の象徴にして、その血肉は永遠の命を与えると伝わる神聖な獣 ユニコーンの特徴だ。

いつまでもポッターの幻影に首つたけなフレッチリーを放置し、メリーは獣の死骸に近付いて死因を確認する。魔法的な死ではなく、わざわざ物理的に傷付けられた上での失血死だ。ポッターの腕力では到底実行不可能な殺し方。ならば犯人は現場にいたもう一人。

メリーの優れた推理力が当時の状況を脳裏で録画のように再現し、一つまた一つと謎を解き明かす。

(癒しや不死性に関する逸話を幾つも持つユニコーンの血液、か…：それでもあの悪霊が復活するには至らなかつたみたいだけど)

先ほどの戦闘で感じた邪気の微妙な力の変化から察するに、やはり本命は「賢者の石」なのだろう。少女は冷静に相手の次なる行動を予測する。

ハロウィーンのとロール騒ぎ。週末のクイディッチ試合。

例の謎の人影 クィレルが動いていたのはいずれも他の教師陣の監視が薄くなったときであった。今回の一件も、このユニコーンに用があったと考えれば彼の行動の辻褄は合う。ポッターとの遭遇は偶然か、もしくは懲罰の林間調査で学校の庇護から外れたところを狙ったのだろう。あのケンタウロスが来なければ彼は殺されていたのだと思うと、おそらくは計画的なものか。

いずれにせよ、教師であるクィレルがホグワーツの監視体制を熟知

していることは確かだ。

(…なら次にあの二人が動きそうな日は)

クイレル、そしてその上位者と思しきスネイプが双方共に「賢者の石」の確保に動ける機会は残り僅か。一つはグリフィンボールとレイブンクローによる今年度最後のクイディッチ寮対抗戦、5月27日。次に学年末試験準備日の6月2日。だが前者は全ての教師がホグワーツ城を離れるわけではなく、また後者も教師である以上目の前に迫る期日を無視出来ず、自由な時間は少ない。

故に最も可能性が高いのは、残された最後の機会。

学年末試験後の一斉採点、6月4日である。

近代最強の闇魔法使い、「闇の帝王」の信奉者。

邪法魔術の宣道者、「異端児ハーン」の末裔。

時代を超え、かつて魔法界を混沌の坩堝へ変貌させた二人の巨悪の先兵が、古代魔法の牙城の最奥にて相まみえる。

未だ名も無き異界の主より宿命づけられた厄日は、刻一刻と迫っていた。

FILE. 12:マエリベリー・ハーンと賢者の石(挿
絵注意)

西暦1992年6月3日 午前

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』 3階72号教室

カリカリ、と無数の万年筆がインクを羊皮紙に刻み込む音がルネサンス様の講堂に木霊する。

筆記用具を操る渋い顔の少年少女らは、ホグワーツ魔法魔術学校の学年末試験を受験する一年生。「昼食前の子守歌」と形容されるカスバート・ビンズ教授の『魔法史』授業の試験を甘く見ていた一同は、揃いも揃って一秒でも早くこの無意味な記入地獄から解放されたいがっていた。

「ふう…」

常の教科書朗読授業とは一風変わり口頭のみで語られた数少ない講義「ガスパード・シングルトン作の自動攪拌鍋」に関する出題に大苦戦する他寮生の横で、メリーは余った時間を使った三度目の確認作業を終える。初めて手に取る万年筆に戸惑ったのも遙か昔。古風な羽根ペンを座に置いた彼女はチラリと眼前の砂時計を一瞥し、小さく息を吐いた。

あの魔の森でのハリー・ポッター襲撃事件から一週間と少し。予想されたクイレルら闇の魔法使い陣営の動きは以後音沙汰なく、ハツフルパフ生の試験対策やポッターたちの無謀な『「賢者の石」防衛活動』に忙殺されたメリーは、本命の一斉採点6月4日を控えた最後の猶予を惜しむように過ごしていた。

(結局、ヴォルデモートが私をどう見ているのかはわからず仕舞いね) 少女の悩みの種である善悪の陣営選択問題の解決には、あの悪霊こと「闇の帝王」の復活が必要不可欠。否、厳密には「復活した帝王の寵愛の有無」と言うべきであろう。

己の人間性を重視しこのままホグワーツに付くか、はたまた異能を制御する術として期待出来る禁術の権威ヴォルデモートに味方するか。双方共に選択肢として十分な魅力がある反面、結論を下すには危険な賭けに臨む岩のような慎重さが必要となる。特に後者はより本格的な面従腹背の生活を送る日々となり、果たして自分にその求められる高度な振る舞いが可能か、耐え切れる心の強さがあるかは、メリー自身にもわからなかった。

(もうクイレル先生が石を奪う現場にこちらから乱入して、直接相手の反応を見るしかないのかしら…)

最終手段は取りたくない聡明な少女。ここ一年弱の研鑽により、メリーは既存の魔法呪文を用いることで 極めて限定的ながら自身の「異能」を任意で使えるようになっていた。今の彼女に取れる手段は数多く、境界の狭間を利用した規格外の【遠視の呪文】でクイレルとスネイプの行動を悟られることなく監視することも出来る。渦中に飛び込むか否かは、状況を見極めてから判断するべきだろう。

だが君子危うきに近寄らずとは言うものの、そのせいで後手に回らざるを得ないとあつては本末転倒である。今まで慎重になり過ぎたせいで情報収集と分析が間に合わず、土壇場の行き当たりばったりな行動しか取れないのが現状だ。

(魔法界とヴォルデモートのどちらかへ、私の都合で好きに恩を売れる絶好の機会ですもの。今回ばかりは出し惜しみ無しの持てる全てで見極めてやる…！)

メリーは溜息を堪え、覚悟を決める。可能な限り多くの展開を想定し、マニュアルのように積みあがった脳裏の対策帳、準備した幾つかの「道具」、そして彼女だけの異能と魔法。これらが必ずかの巨悪の思惑を超える力となるはずだ。

運命の分水嶺へ挑む少女の顔は、試験を終えた生徒とは思えないほど勇ましく張り詰めたものであった。

西暦1992年6月4日 夜
???

メリーがその報告をダブリンの相棒、宇佐見蓮子から受けたのは、全校生徒が寝静まる深夜23時であった。

標的二番に動き在り。

メリーの異能の力を付与した『秘封？楽部』の秘密兵器、通称「異界観測の手鏡」。

以前京都の酒場『OLD ADAM』での霊能者交流会で披露したものに魔法的補助を加えた遠視の魔法具で、少女はかねてより蓮子に拠点の隠し屋根裏部屋からスネイプとクイレルを含む幾名かの学校関係者の監視を頼んでいた。「私も何かやってみたい！」と好奇心から今回の作戦における仕事を欲した彼女であったが、6人もの対象を「異界観測の手鏡」で夜通し同時に監視し続ける高い労働意欲は称賛に値する。

ダイアゴン横丁で購入した、簡易的な色彩信号を送受信する小さな水晶玉の魔法具から連絡を受け取ったメリーは、能力を使って自身の「夢の世界」へと入り込む。現在のメリーに扱える幾つかの異能的技術の一つ、「結界渡り」だ。

少女が入り込んだのは、この世の裏側とも言える異界 境界の狭間。

ホグワーツから直接ここを訪れるのはあの謎の転移現象が起きたハロウィーンの夜以来となる。同じ底なしの闇の世界に降り立ったメリーは、次に目の前の暗黒の空間へ触れ、そこに【遠見の呪文】を唱えた。

「…【Ostendo、
Quirinus Quirell】（見 せ よ）

そして、まるで寝起きの重い瞼が開くかのような独特の感覚の後、メリーの眼前に人の目のような扁桃形の隙間が現れる。その奥には見慣れたゴシック様の回廊と、一人のターバン男が佇んでいる光景が映っていた。

作戦遂行に関わる重要な6人の学校関係者、標的二番 クイリナス・クイレレル。

最重要監視対象を映すメリーの異能の力が、まるで監視カメラのように一方的な視覚を実現させる。「異界の目」と当人が呼称する異能と魔法の融合による観測技術だ。

（流石の校長先生の防衛魔法も異界からの監視は防げないでしょう）

どこか得意げに心中でそう呟くメリーの表情は明るい。実家の魔術工房での研究や、親友の提唱した魔法理論の立証実験の副産物として生まれた己の新たな力に少女は強い自信を持っていた。

異界とは何か。

それは宛ら縄に吊るされ河の清流に身を委ねる、友禅流しの染め布のようなものである。一定の間隔で整列するその無数の染め布は、互いの隙間を通る流水によって分かれたれ、決して重なることはない。

メリーの異能は、布の生地を描かれた染模様を、川水を越えて隣合う別の染め布へ移すようなものであると本人は考えていた。

だが、蓮子の唱えた魔法理論の立証に挑むべく能力を意識的に使おうと励み続けた彼女は、意図せず己の異能の新たな解釈を発想する。

この力は、染め布の模様を「川水を越えて別の布に移す」などという小規模なものではなく、整列する染め布の間隔を調整し、決して重ならない布同士を重ね合わせる。つまり「境界の狭間の距離間隔を操る能力」なのではないか。そう少女自身は想到した。

この閃きが彼女の異能に劇的な変化を齎し、メリーの力は新たな段階へと至った。普遍的な「遠見の呪文」が変化し、今回の「異界の目」として発動するのがその最たる例だ。

自身の呪文の一部が、明らかに異能の影響が見て取れる、全く異なる現象として表れ始めたのである。

〔盾の呪文〕や〔呼び寄せ呪文〕は元からおかしかったけど、〃結界渡り〃みたいな異能の力を使う感覚で呪文を使ったときはまるで別物のように強力な魔法になったりするのよね。本当はその逆を望んでるのに…）

異能の深淵に近づくにつれ、使う呪文に現れる異能の影響は増し続けていく。果たしてこれが異能の「制御」なのか、それとも真逆の化物に近づく「深化」なのかは『秘封？楽部』の二人にはわからなかったが、新たに目覚めた力は今回のような差し迫った状況における切り札としては実に頼りがいのあるものだった。

「…あら？」

ふと、メリーは拠点の相棒から届いた新たな報告に反応し思わず声を零す。境界の狭間での行動は外界人に知覚されないとはいえ、監視者としてはあまりに迂闊。口を押え、再度蓮子の手鏡の景色を別の〃異界の目〃で投影する。

表れた光景は、コソコソと廊下を移動する半透明の小さな人影が三つ、クイレルの下へ近付いている場面。

自慢の「透明マント」を纏ったハリー・ポッターとその友人たち、グレンジャーとウィーズリーだ。

間が良いのか悪いのか、このまま進めば半刻後には先を行くクイレルと接触する可能性が高い。ポッターが今日の死喰い人たちの計画に気付けるとはとも思えないため、此度の噛み合わせもおそらく彼の生まれた稀有な星の導きなのだろう。似たような人生を送って来たメリーは、同胞の少年の苦勞を察しつつ、これから実現するであろう運命的な会合を楽しげに期待する。

（…予想外ですけど、予想通りでもあるわね。でもこうして動いてくれた以上、今日こそ名高い「魔法界の英雄」の実力を見せてくれるのかしら？）

上位者目線な思考で眼下の二つの〃異界の目〃を見下ろす少女。

強大な異能の力を操り調子に乗っているのか、この異空間内にいるときの自分はどこか理性のタガが緩み態度が大きくなっているように思える。良くない傾向だ、とメリーは頭を振って意識を正し、元の自分を取り戻す。

間もなくし、クイレルが四階の「禁じられた回廊」に設けられた一室の扉の前に立った。おそらくこれが石の保管室か。「異界の目」を操り近くへ寄ると、男は「A-l-o-h-o-m-o-r-a（開け）」の詠唱と共に鍵穴へ少女も良く知る初級呪文をかけていた。

（…何やってるんですか先生。一年の呪文で開錠出来る金庫室なんてあるワケ）

だが呆れるメリーの考えに反し、硬い鉄の扉はガチャリと開き容易く盗人を通してしまった。加え、瞠目し固まる少女を余所に状況は目まぐるしく進行する。

保管室らしき部屋で待ち構えていたのは、一頭の巨大な犬。三つの頭を持つその猛獣こそハグリッドが用意した番犬、ケルベロスの「ブラッファイ」だろう。

しかしやはりと言うべきか、クイレルの手には小さな管楽器が握られていた。吹かれた笛の音と共に巨獣の鋭い眼光が暗みトロンと睨が落ちる。これでハグリッドに接触した怪しい商人の正体がこのターバン教師で確定した。

男は番犬の寝息を確認したのち素早く背後の扉を呪文で施錠する。そして猛獣の足下の隠し扉を開き迷わず階下へ飛び降りた。

続いて現れたのは新たな番人。メリーの寮監ポモーナ・スプラウトの「薬草学」の授業で応用編として紹介された「悪魔の罟」と呼ばれる蠢く蔓状の生き物であった。当然、一年生の授業で撃退呪文を紹介されるほど扱いやすい魔法生物に苦戦するホグワーツ教師ではなく、術者に安全かつ隠密性の高い【冷たい炎の呪文】で簡単に対処される。

グロテスクな食人植物を退けた先には、更に深層へと続く扉があった。繰り返される子供騙しに眉をひそめるメリーの目の前で、クイレルは顔色一つ変えずに奥へと進んでいく。

（…何なの、この全教科を纏めた学年末実技試験みたいな幼稚なセ

キュリティは。こんな的一年生でも頑張れば奥に辿り着け　　って、え…?)

三つ目の部屋の空飛ぶ鍵を「呼び寄せ呪文」で手元に召喚するクィレルから目を放し、メリーははたと頭上に浮かんだ推理の確証を得ようと後方のポッターたちの様子を窺う。そこには例のグリフィンドール三人組が手と手を取り合いながら、魔法と知恵と勇気で立ち塞がる障害を乗り越える勇者的な姿が映っていた。

そう、まるで開発者に用意されたダンジョンを踏破しようとする挑む携帯ゲームソフトの主人公のような。

(まさか、そんな…でもだとしたらこの「賢者の石」を巡る全てが、本当にスネイプ先生の言う「校長の掌の上」との言葉の通りなのかしら…?)

メリーの閃きが明確な形となって脳裏に想起される。

「賢者の石」を守るに甚だ不適切なhogwarts一年生レベルの貧弱な防衛設備。辿り着いた最下層と思しき広間の大鏡の謎解きに足踏みする侵入者クィレル。犯人を追う英雄ポッターの顔に浮かぶ緊迫した、されどどこか誇らしげな表情。

そして、少女がその推理の正否を確信した直後。

「…」

メリーの目に、蓮子との通信魔法具が浮かべた嫌な光色が飛び込んできた。

青い光　ダンブルドア校長が外出先からhogwartsに帰還したことを指す色彩信号だ。

メリーは再々度、相棒の手鏡の光景を側に写し、緊張からこくりと喉を鳴らす。

近代最高の魔法使いと名高いhogwarts校校長は今回の作戦における重要警戒対象の一人で、『秘封?楽部』は老人の行動を常にメリーの異能と魔法で監視していた。ダンブルドアはここ数日野暮用で学校を離れており、ならばこそ彼の動きが状況を大きく左右すると予想していたが、どうやら現状を見る限りクィレルの侵入もポッターの雄姿も全てあの偉人の計画通りである可能性が高い。

こうなると、今からポッターたちと合流するのは悪手だ。あのグリフィンドール生らと共に今夜の夜間外出を計画していたのであればともかく、この場であるの三人の前に現れ仲間に参加するのはあまりにも不自然。メリーが介入することは間違いなく彼の計画上のイレギュラーで、もし愚かにも存在を晒せば以後確実に目を付けられてしまう。ダンブルドアの抜かりの無さを警戒し、少女は直接的な接触は控えることにした。

(さて、ではどう動くべきか…)

現段階では校長率いるホグワーツ陣営が、クイレルの死喰い人陣営の遙か上を行っている。ここから挽回するのはメリーが共犯者と睨むもう一人の死喰い人候補セブルス・スネイプの働きに期待する他ないが、あちらは監視中の蓮子曰く今も目立った行動は見当たらない。善悪どちらの勢力も未だ切り札を残している以上、こちらから安易に仕掛けるのは難しい。だが。

「決めた。臆せば後手に回るし、ここでより高く買ってくれる相手に恩を売っておきましょう」

動けぬのはあくまで、普通の人間であった場合の話である。

そして、人の居るべき場所ではない異界の狭間の玉座に腰を下ろしたスキマの主は「人間にとっての普通」からかけ離れた、凶悪な力を有していた。

西暦1992年6月4日 夜

英吉利・蘇格蘭某所 『ホグワーツ魔法魔術学校』4階

『 頑張つて、ハリー……スネイプの野望を食い止められるのは、例のあの人』を倒した貴方だけなんだから……!』

『…うん、わかっている。ハーマイオニーも気を付けて。君がダンブルドアにこのことを知らせてくれたら僕たちの勝ちだ……!』

幸運を祈ってる。

その言葉を最後に、ここまで共に戦ってきた掛け替えのない親友の最後の片割れが水薬のパズルの間を去っていく。紫炎の壁の奥へと消えた彼女の後ろ姿を見つめ続ける少年 ハリー・ポッターは大きな深呼吸で勇気を汲み上げ、最後の間へと続く黒炎の中へ勇ましく飛び込んだ。

辿り着いた部屋は、まるで地下神殿のような空間であった。アゴラの階段が下層へと導き、その周囲に整列する幾多の石柱が厳かな視覚的旋律を奏でている。辺りを覆う湿った冷気のせいか、それとも薄暗い墳墓の如き広間の恐ろしい雰囲気呑まれたか。震える体を覚束ない歩みで部屋の奥へと運んだハリーの目に、信じられない人物が映り込んだ。

「 あなたは……! 」

「…そう、私だ。お前とここで出会えるかどうかは定かではなかったがね、ハリー・ポッター」

少年は兼ねてより悪名高いスリザリン寮監、セブルス・スネイプを追つてここまでやつて来た。親友のロンはもちろん、学年一二を争う天才ハーマイオニーとマエリベリーも彼が悪人で間違いないと太鼓判を押している。故にハリーは微塵の迷いなく、あの忌々しい蝙蝠人間を成敗しようと意気込んでいた。

だが蓋を開けた先にあつた真実は、これまで味方だと皆が思ってい

た全くの別人　　“闇の魔術に対する防衛術”教授、クイリナス・クイレルであった。

「う、嘘だ！　だ、だって犯人はスネイプのはずじゃ　」

「…セブルス？　ああ、奴はいかにも怪しげに見えるだろう？　欺瞞に満ち、育ち切った蝙蝠のように私の周囲を羽ばたく敬愛すべき隠れ蓑。彼の陰に隠れば、一体誰が…こっこんな、しつ舌足らずな、くっクイレル教授を、怪しむと言うのかね？」

最早無能を演じる必要もない。そう暗に口にするクイレルが見せた本性は、無垢なポッターの常識を吹き飛ばす驚天動地の真実であった。

自分が箒から振り落とされそうになったクイデイッチの試合でのスネイプの暗躍は何だったのか。クリスマス前から引き摺っていた右足は石を狙ってフラッファイに撃退された証ではないのか。トロールの襲撃も、同夜の図書室の賊も、全てあの男が仕組んだ出来事ではなかったのか。

困惑のまま吹き上がる疑問を捲し立てるハリー。だがそれらに返されたクイレルの冷めた言葉は、どれも彼が諸悪の根源であることを少年に突き付ける。

ふと頭に浮かぶのは、己の初恋の少女の儂げな微笑み。自分のせいで先生が学校に居辛くなっていることを憂う彼女の伏せられた顔は可憐で美しく、そして胸が潰れるほどに痛ましかった。

「…Miss　ハーンは、マエリベリーはあんなにお前が学校中から嫌われてることを心配して…お前が本当はいい人だって信じてたんだぞ…！」

「ふむ…」

「お前の書いた本はどれもマグル生まれの人にもわかりやすいものだって…『クイレル先生の魔法理論はどれもとても参考になるものばかりですのに』って、彼女はいつも悲しそうな顔でお前の味方をしようとしてたんだ！」

気になる異性の動向に興味が引かれるのは人の性。ハリーはその類まれなる行動力から、寮の異なる想い人の噂に大変明るかった。当

然、有名なマエリベリーとクイレルの複雑な関係についても知っている。しかし慎ましい彼女の話は自他に対し過度な謙讓尊敬の色眼鏡を通して語られるため、ハリーは全てを背負い込もうとする謙虚な少女に惹かれる一方、そんなマエリベリーに高く評価されているクイレルに小さな嫉妬と苛立ちを覚えていた。無論彼が真の盗人と明らかになった今は、真実を知った少女の涙を想像するだけで、何れの感情も度し難い純然たる憤怒と化している。

そんな感情的なハリーを、奇妙にもクイレルは場違いなまでに悪意のない、憐憫の表情で見つめていた。

「…なるほど。恋は盲目とも言いが、ここまで瞳の曇らされた若者を見る…最早滑稽を通り越し哀れだな」

「何だと!？」

クイレルの失笑が地下神殿に木霊する。羞恥から今まで必死に隠してきたはずの想いを憎き裏切り者に悟られたことに加え、思いそのものを啜われた屈辱からハリーは相手に怒声を叩き付ける。

だが、まるで理解が足りない息子を論す父親のような口調で語られたクイレルの言葉は、事実幼い少年が理解するには幾度もの反芻が必要な突拍子もないものであった。

「お前はあの小娘のことを根本的に誤解している。子供とは思えぬほど極めて巧妙に隠しているが、あれは自分が周囲からどう見られているか、どうすれば自分の本性を隠すことが出来るか、それを良く理解している狡猾な人間だ」

背筋が凍えるほど不気味な微笑を浮かべる石の盗人。ハリーは男のあまりの狂言に思わず喘ぐような声を零す。

「こう……かつ？ マエリベリーが…？」

「そう、お前が懸想する学年最優秀生の少女は実に狡猾な生徒なのだよ、ポッター。あれが私を庇おうとするのは決して善意でも良心の呵責からでもなく、私に利用価値があるからだ。あの美しい容姿と聖女のような振る舞い、優れた授業態度が全て擬態であったとしても私は驚かんよ」

小さく零れたクイレルの「もっとも初回授業後のあの

【Legilimens】開術がなければ見抜けなかったやもしれんがな」の眩きは、ハリーの耳をすり抜ける。

「何故私があの子に何冊もの闇の魔導書の貸し出し許可を与えたと思っている。無論面倒なセブルスの目を私から彼女へ向けさせる意図もあつたが、それでもこの私が無暗に知識をばら撒く愚を犯すはずが無からう?」

「…何が言いたい、クイレル」

少年にとって男が語るマエリベリーの人物評価は俄かに信じ難いものであり、実際、聞くに値しないものに思えた。何故ならクイレルが続けて述べた自論は、あの謙虚で心優しい少女を侮辱するに余りある内容だったからだ。

「…見込みがあつたからだよ、ポッター。非常に優れた闇の魔法使いとなる素質が、代々のスリザリン生が霞むほどの、真のスリザリンである　マエリベリー・ハーンにはな」

「ふざけるなっ!!」

ハリーはかつてないほど激昂する。ロンに諭され、マルフォイに絡まれ、スネイプに虐められる獅子寮の英雄少年にとって、その単語は禁句であつた。

「マエリベリーがスリザリンだつて?　何の冗談だそれは!　さつきから黙って聞いていれば彼女のことを知った風に…!　僕の好つ、とつ友達をバカにすると許さないぞ!」

「わかるとも、私と彼女はよく似ている。あれの本質は明らかにハッフルパフではない。組み分けの儀式が難航したのは本人がレイブンクローに入りたがったから、などと愚かな教師共は錯乱しているが、節穴にもほどがある。奴が『組み分け困難者Hatstail』になつたのは、闇の魔術を学ぶに当たり最も怪しまれないハッフルパフを希望したからだ」

「黙れよ、この極悪犯罪者め!　賢者の石を奪ってヴォルデモートに捧げようとする薄汚い手下と、僕のマエリベリーの一体どこが似ているって言うんだ!」

もはや男の口が紡ぐ言葉の全てが戯言にしか聞こえない。あの

忌々しい寮の名が出た瞬間、ハリーはそれまでのクイレルの発言全てを頭から捨て去り、初恋の少女の名誉を守るべく杖を抜いた。

『無駄話もそこまでだ』

突如、ハリーの耳元に背筋が凍るような謎の低い声が響いた。

地獄の底から這いあがったかの如きその声が鼓膜を震わせた瞬間、少年の額に浮かぶ傷が強い痛みを訴えた。記憶ではなく、遙か過去の幼い自分の心に焼き付いている、恐ろしい声。魔法界の英雄ハリー・ポッターは、理性ではなく本能でその男の正体に辿り着く。

ヴォルデモート。

疼く傷の痛みには耐えながら、ハリーはかの死したはずの巨悪の姿を探し視線を周囲に巡らせる。その中央に立つ、神聖なる学び舎に唾棄すべき異物を招き入れた大罪人は、まるで臣下の礼を取る従僕のように虚空の前に跪いていた。

『…小僧を殺し……ホグワーツを脱出せよ』

「はっ、主よ……速やかに」

唖れた声が木霊し、命を賜ったクイレルは深く平伏する。そして即座に杖を抜き幾つかの聞き慣れない呪文を唱え始めた。

次々と宙へ放たれ消えて行く謎の魔法の正体がわからず困惑と恐怖に混乱するハリー。だが先ほど例の声がクイレルに下した指示を思い出した少年は、その内容に組まれた最悪の事実思い至る。

「…『脱出』って　　つま、まさか……」

ハリーの驚愕にクイレルが笑みを零す。それは、絶対にあり得てはならないことが起きている現実を突き付ける立場となった、男の優越心の現れであった。

「ふん、ダンブルドアも随分と老耄した。少し手間取ったが　　まさか石が自ら鏡から転がり出てくるような欠陥品を金庫に選ぶとはな」
「そんな……」

絶望がハリーを襲う。幾つもの試練を乗り越えここまで辿り着いた英雄も、心のどこかでホグワーツの教師陣への甘えがあった。特に

“みぞの鏡”や透明マントなどの件でダンブルドアには、魔法界最高の名に相応しい人物として畏怖し、同時に信頼していた。その校長が準備した防衛が破られるなど悪夢に等しい。

最高の魔法使いを上回るほどの力を持つクイレルとその主。周りにヒーローの如く持ち上げられようと、「ただのハリー」に過ぎない自分はどうあがいても目の前の男を倒すことは出来ないだろう。マエリベリーが借りてくれた禁書に載る“禁じられた呪文”の一発で、無残に命を散らす未来しか彼には見えなかった。

「くっ、ここは通さない…っ！」

だが、それでもハリーは立ち向かう。

理屈や勝機ではない、決して悪に屈しないという固い意志こそが奇跡を起こす。敵は、何も知らなかった赤子の自分にだって勝てた相手。しかも聞けば瀕死の手負い人だと言う。ここで踏ん張らなくては、自分はいままで経っても周りから勝手に英雄と持て囃されるだけの無力な子供のままだ。

そう気丈に立ち塞がる少年を、クイレルが苛立たしげに睥睨する。

「勇ましいな、ポッター。…だが聞こえなかったのかね？」

思えばこれほど認め難い人間も珍しい。度胸だけは一丁前の、何の力も知恵も知識も持たないクセに、たった一度の奇跡に恵まれ無数の称賛を受け続ける忌々しい小僧。

男の顔が憎悪に歪み、手にした杖が少年の眉間に定められる。今なら、主も感嘆するであろう最高の威力で呪文を放てるはずだ。

そして、男が少年に死を宣告する。

「我が主は、お前の命もご所望だ」

直後、巨大な劫炎の獣がクイレルの杖から現れた。

「ッ!？」

「フ……フハハハ！ 我が主よ如何です、私の【悪霊の炎】の力は……」

この世の全てを焼き尽くさんばかりの炎熱が地下広間に吹き荒れる。ハリーは自身の肌が焼ける刺痛に声にならない悲鳴を上げ、のた

「ぐうっ…！　　ツうおおおオオツッ！」

「ッ何だど？」

何が起きたのか、などどうでもいい。燃えた衣類、溶けた瞳、朽ちた手足、その全てを取り戻した少年は残された活力の全てを投じ、全身全霊の力で焦げた石床を蹴る。

目指すは敵の魔法使い。買った杖も習った呪文も一切忘れ、ただ相手を攻撃することだけを目指したハリーが放ったのは、魔法学校の生徒らしからぬ最も原始的な暴力　拳による殴打法であった。

しかし、呆れるほど頼りない少年の小さな一撃は、凶悪な死喰い人の身体に信じられない効果を齎した。

「ぐっ　　アアアアアアツッ！　　なっ、何だこれはアツ!？」

皮膚が、否、腕が粉碎された。狂乱する男の悲鳴が、眼前の想像を絶する現象が現実である何よりの証拠。まるで乾いた土人形のように、ハリーの右手拳を受け止めたクイレルの片腕が突然ボロボロと崩壊し風化を始めたのである。

『何だこの力は……不味い、さっさと小僧を殺せ、この役立たずが…！』

「う、うでっ、うでがあ…！　　わたしのうでがああ！　　ああ、あっ、あるじよおたすけをおお…」

『……これでは俺様まで滅びる　　チッ、またしてもこのヴォルデモートの前に立ち塞がるか…！』

絶叫を上げ主人へ救いを求める無様な盗人の姿は、しかしハリーの目には入らない。復活した体もその中までは癒えることなく、幼い男の子の心は消耗しきったまま。炎の地獄で精神的限界をとうに超えていた少年の意識は既になく、振るう腕も魂の執念と言うべき奇跡の力であった。

『…いいだろう、いずれその忌々しい護りと癒しの魔法ごと貴様を叩き潰し、愛する全てを奪う最高の絶望の舞台を用意してやる……ハリー・ポッター！』

少年の意識なき瞳に、クイレルのひび割れた肉体から邪悪な黒い霧が噴出する光景が映る。恐ろしい人の顔を形取ったそれは憤怒の形

相を浮かべ、床に転がる。『賢者の石』を惜しげに一瞥したのち煙のよ
うに霧散した。

そして、ハリーの放った最後の力、自由な左手の拳が恐怖に歪んだ
男の顔へ直進し、腕に伝わった硬質な衝撃と共に若き英雄は力尽き
る。

役目を果たし崩れ落ちる彼の目が最後に捉えたものは、守りたかつ
た魔法界の日常。その彼だけの象徴である、一人の美しい少女の姿で
あった。

EPILOGUE：無垢なる観測者たち

西暦1992年6月7日

英吉利・蘇格蘭某所『ホグワーツ魔法魔術学校』4階医務室

「……は……？」

「お目覚めかの、ハリー」

暗闇に差し込む光に導かれ、深い海から浮き上がった少年　ハリー・ポッターの意識が最初に捉えたのは、穏やかな老人の声だった。「ダンブルドア……先生……？」

「そうじゃ、アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。もっともレイブンクロー生でも覚えていてくれるかは不安じゃがのう、ホッホッホ」

強い倦怠感の中、ハリーは微睡む眼で周りを見渡す。声の聞こえた先には、仰々しい名を持つ我らがホグワーツの校長先生の笑顔。周囲には濃い青緑のカーテンが広がり、体を覆う温もりは清潔なシーツに守られている。横の机には山盛りの色とりどりのプレゼント。簡素な衣類の隙間からは白い包帯が除き、少年は自分が医務翼のベッドにいるのだと、ぼんやりした頭で理解した。

そこでハリーは反射的に寝台から跳ね起きる。何か、途轍もなく大事な何かを忘れているような気がしてならなかったのだ。

「そつそつだ、賢者の石は?!　クイレルは?!　ヴォルデモートは?!」
咄嗟に口から飛び出た三つの単語に、少年は戦慄した。想起された記憶の断片。何故これほどの危機を今まで忘れていたのか、焦燥に駆られる幼き英雄は己の働かない脳に激怒する。

「これこれハリー、落ち着きなさい。三日も眠っておったのじゃ、そうはいでは体が驚いてしまう」

「なつ、三日も?!　そんな　　ツぐ……つ、頭が……！」

ぼやけた意識を覚醒させようと思いを回した瞬間、少年の脳が鈍痛を訴えた。まるで『魔法史』の試験に出題された攪拌鍋に掻き混ぜ

られたかのように、頭の中がぐちゃぐちゃだ。

だが隣のダンブルドアは、さもありませんとハリーを宥めるようにゆっくりと彼の小さな背中を摩る。

「わしがMiss グレンジャーに呼ばれ辿り着いたときには、君は燃える最奥の間で倒れておった。その手に守り抜いた賢者の石を持ってのう」

「石を…？ で、でも石はクイレルに…あれ？」

ダンブルドアの言葉にハリーの混乱は悪化する。だがあのときの出来事を思い出そうとすればするほど記憶は混濁し、現実と空想の判断が付かない。

あの事件は本当に起きた出来事なのだろうか。それすら彼の虫食い状態の海馬ではわからなかった。

「大丈夫じゃよ、少年。あそこでクイレルが使った呪文はわかっておる。凶悪な闇の魔法は相手の心さえ傷付けてしまうのじゃ、何も覚えておらんでも仕方がなからうて」

よく、耐えきったのう。ハリー

そう優しく頭を撫でられ、少年の視界が水面のように滲む。霞みがあった思考は頼りない。しかし体が覚えている激痛は、自身がクイレルとの戦いで受けた苦しみ、感じた絶望の残滓なのだろう。ハリーは震える肩を抱きしめ、ダンブルドアの温かい掌に縋りながら、呼び起こされた恐怖を静かに涙で流し落とした。

人に見せられない弱みを最後まで受け止めてくれた老魔法使いが去ってしばらく。赤らむ目を恥ずかしげに冷布で冷やしていたハリーは、一人きりの黄昏の病棟に新たに表れた人物の姿に飛び上がるほど驚いた。

「マエリベリー!？」

「具合はいかが、Mr. ポッター？ お目覚めだと伺ったもので急いで参りました」

白絹のような肌に浮かぶ紅はただの斜陽の悪戯か、はたまた強い想いの高揚感故か。いつもの物静かな彼女らしからぬ、肩を僅かに上下

させるその姿は思わず魅入るほど可憐で愛おしい。ハリーは昂る感情のまま少女に抱き着こうとする両腕を制止してくれた病み上がりの疲労感に、このときばかりは心から感謝した。

マエリベリー・ハーン。心細い少年が今最も会いたかった人物の筆頭で、同時に最も今の無様な自分を見せたくなかった相手である。

「あの、こっこれは目にゴミが入っただけだから……！」
「えっ？ あ……」

泣いて充血した両目を隠そうとそっぽを向けば、視界の端でマエリベリーが気まずそうな咳と共に杖を手にしていった。か細く【Epiエskiスeyキ（癒えよ）】と唱えられた彼女の呪文が、ムズムズする痒みと熱の後、重たい瞼の腫れを治す。親友のハーマイオニーが熱心に練習していた二年生の呪文を既に完璧にマスターしている彼女は、やはり学年最優秀に相応しい人物だ。

「……めんなさい、こちらの呪文はまだあまり使い慣れてなくて。少しはマシになったかしら」

「そ、そんなことないよ！ まるで寝起きに顔を洗ったあとみたいにスツキリさ！ あ、べ、別に泣いてたとかじゃないから、勘違いしないでね！」

身悶えするほどのむず痒い感覚は治癒呪文の副作用に決まっている。右から来る生暖かい視線を無視し、ハリーは窓の外を見つめ続けた。

コチコチと時計の秒針の音が木霊する二人きりの医務室。

幼いハリーにも多少は相手の立場で物事を考えることは出来る。顔を逸らしたままの少年は、相方のマエリベリーへ掛けるべき言葉を持ち合わせていなかった。ダンブルドアの話を感じる限り、事実を伝えれば彼女が辛い想いをするようになるのだから。

だが無言の彼に代わり沈黙を破ったマエリベリーは、どうやら既に事の顛末を知らされていたらしい。

「……凡そのお話は既にハーマイオニーから伺いました。クイレル先生のごことは……やっぱり致し方ないことだったのでしよう」

「……そう、なのかな。あのとき何があったのかは、がむしやらでほと

んど覚えてないんだ。だけどクイレルが死んじゃったのは、多分、僕のせいだ……」

促され、ハリーはぼつりぼつりと自身の穴だらけの記憶を語り出す。

少年自身は自分が成し遂げたことを誇らしく思うことこそあれど、後悔はしていない。クイレルは敵であり裏切り者。勸善懲悪を愛するグリフィンボールに迎えられた彼に相手へ情けをかけるつもりも、その余裕もなかったのだ。

しかしそれでも後ろめたさが拭えないのは、聞き手の少女へ対する想いが大きいからだろうか。紡いだ言葉は自身にも、どこか弱々しく聞こえた。

「ダンブルドアは賢者の石を、願いを映すあの『みぞの鏡』に隠してた。でも石を使おうと考える人には取り出せないようになってたらしくて、だからクイレルは代わりに僕に持ち出させようと考えたはずだって先生は言ってた。そして僕はあいつと戦って……僕の肌に宿るお母さんの愛の魔法があいつを灰にしちゃったみたいなんだ」

「それは校長先生がそうおっしゃっていたの？」
「……えっ？」

抑揚のない、異様に静かな声だった。一瞬誰の声かわからず、ハリーは顔を上げ、こちらをじっと見つめるマエリベリーの端正な顔を目にする。

「あつ、う、うん。僕が倒れてたところの近くに灰の山があって、それがクイレルの、その、死体だろうって」

「ではあなたが当時のことをあまり覚えていないのも魔法的な効果ではなく……心理的なものだと？」

間を置かずに投げ掛けられた質問にハリーは戸惑い、思わずダーズリー家でのように卑屈な上目遣いでマエリベリーを窺う。

目に映るのはいつもの変わらない儂げな表情。しかし今は何故か、その美貌が異様に恐ろしく見えた。

「えつと……魔法の効果と言うより、憎しみとかの悪い感情が作り出す『闇の魔法』は相手の体以上に心を攻撃するみたいなんだ。凄く

痛かった感覚だけは残ってたし、多分その時に僕の記憶が傷付いたんだろうってダンブルドアは言ってたけど…」

「そう…」

ハリーは少女の纏う異様な空気に混乱しながら、校長が語った台詞を慌てて記憶から引き摺り出す。

その内容にマエリベリーが得心の声を零した。俯く彼女の華奢な体は見た目通りに小さく、伏せられた紫水晶の瞳は亡き恩師の不幸を憂いているようにしか見えない。ハリーの良く知る彼女らしい優しさがそこには感じられた。

夕焼けの中に佇む妖精に見惚れる彼は、故に少女が呟いた「そういう風に解釈されたのね」という小さな独り言を聞き逃す。

「…ではあなたは友達である私のためを思って、凶悪な闇の魔法使いに挑んでくださった。そう己惚れてもいいのかしら」

「…えっ?」

見上げた先で、マエリベリーは微笑んでいた。

「もしそうなら…:あなたはとても勇敢なヒーローよ　ハリー」

この日見た彼女の笑顔を、自分は生涯忘れないだろう。そう思えるほど目の前の光景は切なく、そして胸に重くのしかかるものだった。たとえ悪人であったとしても、クイレルは彼女にとって大事な人。友人の名誉を認める精いっぱい笑顔の奥に、痛みに歪む心を隠す。そんな彼女の姿にハリーは拙い頭で全てを悟った。謙虚な少女は、またしても胸中に渦巻く感情全てを呑み込もうとしているのだと。

単純な正義感だけでは解決出来ないこともある。幼い少年は己の浅はかさが浮かばせた想い人の涙という傷を胸に、ハーマイオニーが常に口にしていた「思慮深くあること」の重要性を身を以て理解した。二度と、こんな顔を彼女にさせてたまるものか。

幼き英雄は自身を戒め、己の行動に責任を負う覚悟を決める。それは英雄たる彼の正義を揺るがす心境の変化。だが奇しくも一人の間人として、「成長」と形容すべきものであった。

そして、そんな大人の階段を上ろうと意気込む少年を見つめるマエリベリーの瞳は、まるで懺悔室で罪の重さに震える告解者のように淀んでいた。

西暦1992年6月18日 夜

アイランド
ダブリン
愛蘭土・都柏林某所 『旧ハーン診療所』

「お、光った！ メリー、これ成功しちゃった感じ？」

「…ええ、そうね。犯罪者デビューおめでとう、私」

暗い闇を彷徨う最中、男の身体に突如形容し難い激痛が走る。強烈な刺激に意識が引き戻され、最初に知覚した外部の気配は、澄んだ涼音のような少女たちの声だった。

その片方には覚えがあった。男は辛うじて開けた瞼の隙間に眩い蟬燭と魔術反応の蒼光を捉えながら、くらむ眼で自身の周囲を囲む二つの人影を視認する。

「お、まえば……ハーン、か……？」

木造の、古書の挿絵などで見る魔法族の全盛期中世イングランドの魔術工房と似通った、巨大な拡張空間。その天井の手前でこちらを覗き込む二人の少女、その片割れの名を男は疑念を込めて呼ぶ。

マエリベリー・ハーン。魔法学校に勤務する男が目をかけていた、

非常に優れた「闇の魔術」の才を持つ女子生徒である。

「な、何故お前が私の前に　いや、そもそもここは一体…？　私は主に見捨てられ、ポッターに殺されたはず…」

状況が理解出来ず困惑する彼は、話の通じる教え子に説明を求める。だが返答したのは、その隣にいるモノトーンの中折れ帽を被ったアジア系少女の口が紡いだものだった。

「ここは我らが『秘封？楽部』のダブリン魔術工房ですよ。クイリナス・クイレル教授」

「…！」

記憶にない、間違いなく初対面の小娘に名を呼ばれた男　クイレルは徐々に復活しつつある思考力で警戒を強める。

見た目はただの子供。しかしその赤銅色の瞳はハーン以上に幼子の純粹さとはかけ離れた、賢者の如き深い知性を感じさせる。直前に、ポッターを小僧と侮り死の寸前まで追い詰められた彼の目に、眼前の少女はヤツと同じく危険な存在として映っていた。

「…名乗れ、『ヒフウクラブ』とやら。貴様は何者だ」

「おっと失礼　お初にお目にかかります。私は英国魔法研究家のレニコ・ウサミと申す者にて、以後お見知りおきを」

仰々しく名乗られたそれは、あまり親しみの無い響きの人物名であった。自身がかつて研究していたオリエント魔法圏より更に東、いわゆる極東、あるいは中華魔法圏と呼称される国家群出身の生徒が持つ外見的特徴。毎年何人か Hogwーツに入学するが、中でも子音に必ず母音を追従させる独特な発音の名を持つ彼ら彼女らの出身国名は、生粋のスコットランド人であるクイレルにとっても決して未知ではなかった。

「…聞き覚えが無い。貴様、我が校の生徒では無いな？」

だが少女の名そのものは、Hogwーツ全生徒が学ぶ必修授業を担当するクイレルにとっても、全くの未知であった。

「…理解出来ん、これは一体どういうことだ？　私がポッターの攻撃に倒れた後に何があった…！　そもそもハーン、何故お前が夏季休暇

前にホグワーツを離れ学校外部の子供と共にいる！ 説明したまえ！」

先ほどから一向に口を開かない教え子の非礼を責め、クイレルは苛立ちに身を任せ声を上げる。しかしハーンは感情の読めない瞳でこちらを見下ろすばかりで、彼の問いを煙に巻く言葉を返したのは、またしても部外者のウサミなる東洋少女であった。

「やれやれ……ご自分のお立場を理解しておられないようですねあ、クイレル教授。お控えなされよ、我が部員マエリベリー・ハーンは先生の命の恩人にして ヴォルデモートに代わる貴方の新たな主人なのですから」

「…何だと？ どう言う」

クイレルは不審げに彼女の発言の意図を問い質そうとし、ふと、自分のものとは思えない己の老衰した死人の如き嗄れ声を訝しんだ。朦朧とする意識を覚醒させた、先ほどの謎の痛みが原因だろうか。聡明な男は鈍った頭脳を必死に回転させ、自分の身に起きた変化を探る。

そこで男は驚愕する。靈魂魔法に明るい彼だからこそ気付いた、自分の魂に起きた度し難い異変の正体に。

「ご、これは【服従の呪文】 いや【服従の呪い】か!? まさか先ほどの蒼い光は…っ！」

半狂乱に胸を押さえた彼の視界の端で、ウサミの不気味な微笑が深まった。

「流石は『闇の魔術に対する防衛術』の教授、よくご存じで。心身ともに弱ってらしたのでロクな抵抗も無くスルリと成功しましたよ。先生をここまで追い詰めてくださった魔法界の英雄殿に感謝しなくては、ふふふ…」

「バ、バカな…！」

蒼白なクイレルは自分に起きた変化に戦慄き、美しい少女を象つた二体の化物から必死に距離を取る。

呪文と呪い。効果は似て非なるもので、その本質には決定的な違いがある。即時的効果が期待出来る呪文に対し、呪いは魔術触媒や魔法

た。思わず阿呆のように聞き返してしまうほど、クイレルはかつてなく動揺する。

賢者の石を巡ったあの夜の出来事を、この二人はヴォルデモートすら欺き全て監視していたと言うのか。

恐怖に震えるクイレルをころころと笑い、無様な姿を晒す彼をウサミが更に追い詰める。

「いやはや、それにしても実に面白い魔法戦を見せて貰いました。ポッター君の規格外な力も確認出来ましたし、何とかこうして二人の死を避けられて一安心といったところですよ。貴方は実に幸運だ」

「…『死を避けられた』だど？」

「ふふ、ネタ晴らしはまたいずれ。ただ一言申し上げれば……我々はただ、〃公平に〃力をお貸ししただけですよ」

まさか。その言葉で聡いクイレルは全てを悟る。

思えばあの夜に起きた出来事の中には幾つか不可思議なものがあった。名高いダンブルドアの策とは思えないほど簡単に例の鏡から石を手に出れたこと。【悪霊の炎】で死を待つばかりであったポッターが何故か火傷一つなく復活し、勇猛果敢にこちらへ襲い掛かってきたこと。そして両者の勝敗を喫した、あの石化の拳。

ポッターに殺され主に捨てられたはずの自分がこうして生きていくことも、事件に気付き少年の下へ急行したであろう教師陣を躲し、魔法界随一の要塞ホグワーツから国を超えて逃げ切っていることも、およそ己が置かれている現状全てが正気を疑う現実だ。そして目の前の少女の話信じる限り、これらを成したのは彼女らの規格外な魔力なのだろう。

如何なる手段を講じたのかは定かではない。しかし深い闇の知識を持つ死喰い人たる自分でさえ見たことの無い高度な魔法、【服従の呪い】を行使出来るこの子供たちならばあるいは、とクイレルは常識を捨てて真実へ想到した。

「…何が目的だ。何故私を助けた」

故に男が重視したのは、彼女たちの一貫性の無い不可解な行動原理を知ることであった。

「これは心外。可憐な少女の健気な献身を受けて真っ先に裏を疑うとは、とても教師とは思えませんなあ？」

「惚けるな小娘！ 貴様らが死喰い人などより遙かに質の悪い連中だということとはわかった。私を癒し、呪いで縛り、どんな非道をさせるつもりなのかと聞いている！」

恐怖心を必死に隠し、クイレルは魔法族の誇りにかけてこの「霊能者」を騙る子供たちへ怒声を張り上げる。年長者、成人男性としての意地もあった。無制御の魔法で威圧すると、流石の少女らも怯んだのか口を噤む。

「がッ!?!」

だが直後、それに倍する重圧がクイレルの呪いに侵された体に襲い掛かった。堪らず重厚な板張りの床に這い蹲り、震え上がる男は辛うじて動く首で荒ぶる魔法の発生源を必死に視界に捉える。

そしてクイリナス・クイレルは、ようやく理解した。

脳裏で『闇の帝王』が繰り返し彼女のことを「人ならざる異形」と形容していた真の意味を。

体系化された彼ら魔法族の神秘が兎戯と化す、真の神秘の存在を。

「簡単なことですよ、クイレル先生。あなたの魔法の知識と あなたを捨てた、心無い元ご主人様のことが聞きたいだけですから」

その少女が背負う深淵の歪ひずみの奥底から、血より赫い、意思無き無数の瞳が覗いていた。